

## 明治期戦争劇集成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日置貴之 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21580">http://hdl.handle.net/10291/21580</a>

竹柴其水 作

会津産明治組重



序幕

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

第一番目序満来

若松城下稲荷の場

長局烈女血判の場

寿々女

小由

左之介

若之介

ぼたん

団次郎

升若

菫女

蔦之介

秀世

菫子

鯉之介

今江

佳調

左団次

小団次

米蔵

寿美蔵

荒治郎

小半次

三寿蔵

寿美右衛門

高之介

高治郎

緋鯉

参けい人大勢以

寿三郎

一 桑折の馬丁金太郎

一 老女岩瀬

左団次

寿三郎

一	桑折召遣おたけ	小団次
一	御傍三代治	
一	実八鶴右衛門娘おみよ	米蔵
一	中間久六	
一	実八間者進藤勇助	寿美蔵
一	茶見世の亭主六兵衛	荒次郎
一	大橋湧弥	好太郎
一	若松半之丞	高之助
一	安積山造	
一	中間半蔵	小半次
一	同 吉平	三寿蔵
一	亀屋福右衛門	寿美右衛門
一	赤安阿国	舛若
一	保原雪江	莚女
一	奥女中須川	蔦之助
一	同 吾妻	秀世
一	同 布瀬	莚子
一	同 甲賀	鯉之助
一	同 滝沢	今江

若松城下稲荷の場

一	同 いわひ	佳調
一	同 音瀬	寿々女
一	同 麻二	小由
一	同 幾代	左之助
一	同 八十二	若之助
一	堅蔵悴三之助	ぼたん
一	最上武雄	団次郎
一	貝田福丸	高次郎
一	町家の娘	三人

本舞台一面の平舞台。上手丹塗の鳥居沢山。此傍杉の立樹をあしらい、下手同じく稲荷の幟を沢山達、此傍に一間の出茶屋。棚に焼物の狐、絵馬額、備餅杯並べあり。向ふ曰窓を書割し屋敷町の中遠見。都て若松城下栄稲荷の入口、三の午祭りの体。床几三脚程並べ、焼物の煙草盆を置、爰に茶店の亭主六兵衛立掛り、上手床几に町家の隠居白髪かつら、小紋の羽織。パツチ白足袋雪駄

尻端折にて腰を掛、烟草を吞居る。側に子

役三人町家娘の拵にて立掛り、争て居る。

此見得、二本目出度の唄へ稲荷祭の太鼓を

冠せ幕明久。

子役三人 私しのがほんとうでムリ升く。

トワヤくいつて居る。

隠居 コレく皆女のくせに、何をそんなに喧嘩をして

居るのじや。

子役① モシおぢいさん。私しがお鳥居よりお幟が多ひ

と申升た。

子② 私しはお幟よりお鳥居が多ひと申升た。

子③ また私は両方向じ数だと申升た。

長松 この長松が見た所にてても、どつちがどつち共申さ

れませんか、此所に来て勘定する迄、この出入は

私があづかりました。

六兵衛 是は子供衆達は御尤でムイ升、此柴稻荷様は信

心なさる方がお鳥居だの納め物をなさい升ので、奥

の院迄どの位建て居り升か、私共さへ数が知れ升ぬ。

娘○ ほんに私共も毎日御縁日の午の日にはかゝさず

参詣。

同□ その度毎にお鳥居や又おのぼりがふへ升には、実

に驚き升わいなア。

同△ 今に御奉納でお宮の内が一杯になり升ふ。

隠 私も今日はお幟を納め升たが、此お稲荷様位御利益

のある神様はムらぬて。

六 御当社は昔からお城の守護神で其上何事も願を掛て

成就せぬといふ事はムイ升んが、御隠居さんも午の

日にはきつとお孫さんと御参詣でムリ升が、何か悲

願と見得升るな。

隠 私しの心願といふは外でもないが、此孫達を十人に

したいと思つて、信心を仕升る。お蔭で三人迄は出

来升たが、跡七人を纏め様と思つて、夫で願掛をし

て居升のさ。

六 何でも子宝と申升から、御子孫繁昌致し升のは、此

位御目出度事はムイ升ぬ。

隠 夫に一人り孫が出来ると鳥居を一本奉納して十人目

には銅の大鳥居に仕度積りさ。其上忤に嫁に孫と一

所に揃へて御屋敷へ上り、殿様のお目通りが出来ると

いふ昔よりのならはせだから、どふか一人りも欠

ず、此ぢゝいの息才で、そふして忤も達者だから、



金 イエ、若様が風をお好キ遊すは、一ト方ならぬ訳のある事。只お慰みではムリ升ぬ。

ト合方に成り。

三ノ 既に漢の韓信は風を揚て敵陣を窺ひ、又日本にては天草の一揆に釣蒸籠を上げたる例シ。其他慶安の役には駿府の城中を風にて見下したるも、皆軍略に用ひしものにて、決して弄びにはあらざるぞ。

金 此節世の中が何となく落附き、此度殿様京都より御帰国なされてから、兎角御上<sup>三</sup>にもめが有と専ら人が噂して、既に江戸では公方様が御城をお渡しあらば其俥にしては居られずと、お旗本の方々がお床几廻りの名義をとり、彰義隊とやらいふ隊を組み、東叡山へ参会して、軍議を凝して居るとの事。

竹 言合さねど、お国の人々一人も安き心はなく、イザといふ時力を尽し、御出陣をなさる御様子。金太郎殿も此わたしも江戸より御奉公に参りしもの故、誰一人として其相談になつて下さる方はなければ、心は同じ忠義の道。万分が一でも御恩報じを致す、心でムんすわいな。

ト兩人忠義の心にていふ。六兵衛感心し。

六 其お心立は実に感心致しました。まだお年も行ぬ若様始め、女中衆迄がかうやつて御当家様へ忠義をなされ、御恩返しを仕たいといふは、コリやお国で生れた私なぞは、落附ては居られ升ぬわへ。

ト皆々忠義を尽し度といふ思入。幕明の唄になり、向ふより最上、貝田、大橋、若松、安積の壮年輩、何れも稽古着袴。跡より中間久六、紺看板木刀草履。同じく米藏、吉平皆々の竹刀たんぽ槍を固めて担ぎ、直ぐに舞台へ来り、皆々三三之助に挨拶なし。

最上 桑折どのも参詣でムるか。我々達は稽古の帰路。貝田 幸ひ今日午の日故。

大橋 皆朋友共申合せ。

若松 武運長久祈りの為。

安積 当社へ参詣致さんと。

五人 態々是へ廻り升た。

三ノ 私も同じ参詣故、直ぐに御同道致し升ふ。

ト金太郎、お竹出で。

金 是は皆様お揃ひで。

竹 よふ御参詣でムり升る。



ト此内六兵衛皆々へ茶を出し、五人は床几へ掛る。合方になり。

最 桑折殿、今日は道場にて花々敷大試合を催し升たが、誠に面白ふムつた。

貝 先東西へ人数を分け、隙キを伺ひ立合なし、夫より互ひに入乱れ。

大 双方乱軍と成升たが、当春京都に有し程な戦争でもある時は。

若 若年乍打て出、敵方をば切り随へ、名を後世に轟きんは。

安 皆我々の望む所。互ひに勝利は致し度ものでムるのウ。

ト勇しき心にていふ。

三ノ 私逆も其如く、モシ一大事の其節は御家来方に魁なし、連れ武士の誉れをば揚る心でムり升る。

竹 ほんに若様達さへあの通り、お立派なるお心故、女子といへど此後共、ウカくしては居られ升ぬナ。

久六 身分も軽ひ私共さへ、其御詞を承り升ると、思はず力瘤がは入り升て、実にお勇しふ存じ升。

中間㊦ 成程、お武家様にお育ち遊す若様達は、又格別

魂の違つたものだ。

㊦㊦ 夫に引替我々共は、お供もろくに出来ない骸。

両人 面目次第もムり升ぬ。

ト金太郎は三之助に向ひ。

金 若様、モウ御参詣遊しては如何でムり升る。

最 思はず遅刻致し升た。

四人 桑折どの。

三ノ 御同伴致し升う。

ト右の唄にて皆々鳥居の内へは入る。六兵衛そこらを片付け。

六 親仁の代から出して居るので、見世も大きに繁昌するが、別けてけふは午の日故、いつもより急がしく、是といふも御当社と殿様のお蔭 ○夫はそふと、皆様がお戻りにお立寄りであらふ。其内一寸小用を足して来升う。

ト合方になり、下手へは入る。跡、鳥居の内より以前のお竹、金太郎とつれ立出て来り。

竹 金太郎さん、とつくり相談せねばならぬ事が出来たわいなア。

金 何がそんなにあわたしひ事が出来たのだ。

竹 サ、其相談せねばならぬ事とは、斯ういふ訳でムンす ○

ト合方になり、兩人床几へ掛り。

別の事でもムんせぬが、お前も私も江戸から来て、長らく桑折様へ御奉公して、御主人に可愛がられ、是といつて何一トツ不首尾な事はなけれども、只心に掛るのは、お前と私の二人りの中。お上<sup>ミ</sup>が御潔白な御屋敷故、御家中若様達に至る迄、直ぐなる道をお守り被成るを見るに附けても、心に恥入り濟ない事と

ト思案に余るこなしにていふ。

金 わしも是迄御主人のお気をそこねた事はなけれど、胸に支へて居たは其事。お国人はあれ程に、みんな忠義を立る中で、江戸から来たる二人り斗りは道に欠たる不義いたづら。噂に聞ば近々にお国に事でも起るといふ、専ら屋敷内の咄しゆゑ、今の内に心を入替、おぬしの心も聞た上、咄し合にて縁を切り、会津の人に負ぬ様、忠義を立ねば濟ぬから、おぬしも悪ひと気が附て別れる心になつたなら、けふから

ふつゝりお互ひに、夢とあきらめ是迄の縁を切れて仕舞ふかへ。

ト実となる。お竹も実とこなし。

竹 お前がそふいふ心なら、わたしもきつと辛抱して、清く別れて仕舞ふわいなア ○ 其替り金太郎さん、今迄よりは尚一倍、実の兄弟同様に力になつて下さんせ。

金 たとへ縁は切ふとも、国より力に成合ふて、相談相手になる了簡。まだ今の中に改心せば、遅ひといふ程でもなく是からお国の人を見習ひ、忠勤励むが罪滅し。

竹 此程お奥のお噂には、女子衆方が申合せ、モシ一大事に成時は、お上<sup>ミ</sup>の御助勢遊すと、御覚悟あると申事。及ず乍わたしらも、其お供をば願ふ心 ○

ト兩人後悔の思入あつて、お竹心の残るこなし。

とはいへ深く言替せし、二世のかためも今更に。

金 あきもあかれもせぬ中を。

竹 生<sup>マ</sup>木を割くとは此様な。

金 せつない思ひも此身の科。

竹 わたしや未練が。

金 エ。

竹 ナニ、少しも未練はムんせぬ。

ト切なき思入。兩人気を替。

金 斯ふ決心をした上は、心に掛る曇りもなく、是で胸がせい／＼したわい。

竹 わたしも心残りがなく、よい兄さんを持た故、心丈夫に成ましたわいな。

ト兩人決心のこなし。

金 わしは若様のお供をする程に、おぬしは奥様のお迎ひに行ツたがよい。

竹 ほんにそふいふ事なら、一ト足先へ。

金 夫じやア、お竹どの。

竹 金太郎さん。

金 気を附て行たがよい。

ト唄になり、お竹実となつて下手へは入る。

跡、鳥居の内にて。

久六 勘弁してくれ／＼。

中間二人 イ、ヤ勘弁ならねへ／＼。

トバタ／＼になり、以前の久六、中間兩人

に引づられ、鳥居の内より出て来り。

中一 ヤイ久六。能もうぬは屋敷を悪くいやアがつたナ。

中二 サア、モウ此俣にしては置ねへぞ／＼。

ト久六を打ふとする。金太郎恠りして中へ入り。

金 マア／＼待て下さい／＼。一体是はどふいふ間違ひから起ツた事か、訳を聞いて下さいまし。

久 ナアニ、外の事ではあり升んが、何だか天下が騒々しひとつたのが初りで、京都の軍サがこつちへでも来る様になつた日には、屋敷杯は掛り合だから、

余ツ程骨の折れる事だといつたのが、二人りの癪に障り、主人の事を悪くいふと、めつたやたらになぐられたが、どふぞ扱つておくんせへ。

ト金太郎に頼む。金太郎、兩人をなだめ。

金 お前達も腹も立ふが、こりやア全く詞の間違ひ。悪

りひ気でもあるまいから、マアけふの所は是切りに無事に済して下さいまし。

中一 夫は此節は誰でも気が立ツて居るから、突当ツても只は置は仕ねへ。

中二 不断お扶持を頂いて居る屋敷に、けちを附けやア



ムイ升んと。

中一 一生懸命を揉升たので。

〃二 びつしより汗に成升てムリ升。

六 此境内でキツ、ハツ、でもあつた日には大変と存じ升たが、御笑談では落附升た。

ト皆々安心する。

三 今皆と参詣致せし折、貝田殿が不意に打て懸りし故、夫より入乱れと成て、一時に是へ打出したのじや。

最 不意に打て立合ふは、まさかの時の心掛り、武士のたしなみと申もの。

貝 いづれも骸に隙きがなく、是で真劍の勝負をする共大丈夫でムリ升。

大 今日道場の催ほしにも、まさりし今の此試合。

若 各々武術の修練に、日頃の稽古も顕れて。

安 互ひに劣らぬ此試合。又一段と。

五人 面白ふムつた。

三ノ 今日斗らずもよい慰みを致し升た。

大 何れも竹刀を纏めて帰邸致さん。

最 イザ御同道仕らふ。

ト此内竹刀杯を片附、中間皆々かつぎ、金

太郎、久六、茶代を置。

六 毎度難有ふ存じ升る。〇

ト右の唄に成り、三之助、最上始め金太郎、久六、皆々附て向ふへは入る。六兵衛跡見 送り感心の思入。

同じお人に産れても、一寸しても若様達はあの様なお心掛。取分桑折様の馬丁さんは、生、意気けが少しもなく、忠義一箇のお人の様だが、夫に引替わし杯は、年が年中茶見世の番人。今の若さで此俣に朽果るのは悔しひ訳。こりやア一番身を粉にしてもお国の為をば。〇

ト実とこなし。此もやう幕明の唄にて道具廻る。

### 長局烈女血判の場

本舞台四間、低き二重。此間三間、上の間。上手一間、床の間に次に三尺の違棚。下手三間、次の間。爰に箆寄をはめ込、上袋戸棚。床の間に時の花の軸を掛ケ、手箱、書物杯飾り、上の間次の間共、塗骨障子の出入り。

上手板羽目にて見切り、下手画心に廊下の

出は入り。都て長局老女部屋の体宜しく。

爰に保原雪江、かいどり好みの拵へ藩士の

女房にて帳面をのせし文台を控へ、上下に

須川、吾妻、布瀬、甲賀始め都合十人何れ

もかいどり形り、奥女中の拵へにて控へ、

銘々持紙にて左りの薬指を押へ、血判を済

したる心。此模様琴の曲にて道具留る。

女中① 不断であらば、如月の御献上物の御調進にて、

上<sub>ミ</sub>を始め皆様迄。

// ② 御混雑の上、江戸表へ御飛脚御差立の時なるに。

// ③ 程なふ替る弥生の節も、御雛祭りのお催しもなく。

// ④ 昔に替る武具馬具に五人囃子は陣鐘太鼓。

// ⑤ めぐむ桜も人は武士。其桜木のものゝふに。

// ⑥ 肩を並べてお上<sub>ミ</sub>のお為を。

// ⑦ 致さんものと御老女へ。

// ⑧ 願ひし所、お聞済の上。

// ⑨ お加へ下され、けふよりは。

// ⑩ 武士の魂に成り升て。

// ⑪ 心涼しふ。

十人 存じ升る。

雪江 何れも方の御心中、雪江感心致し升た。

ト右の合方に成り、老女岩瀬、片はづし更

たる拵へ、かいどり好みの形りにて、跡よ

り阿国、藩士の女房、矢張り同じ拵へにて、

兩人上草履にて出て来る。皆々一寸出迎ひ、

兩人上手へ通り、よろしく住居。

女中皆々 只今お下りにムリ升るか。

ト挨拶する。

岩瀬 雪江どの、御加入の御姓名書、御苦勞に存じ升。

雪 皆様の御血判、相済升てムリ升。

阿国 只今御殿にて承りしが、兎角穩かならざるお噂さ。

こりや一倍心を用ひませねばならぬ時節に成升た。

ト此内、岩瀬件の姓名書を見やり。

岩 お認めありし御姓名書を見升れば、何れもお国の

方々斗り。こりや斯ふなふてはなり升ぬ。

国 モシモお上<sub>ミ</sub>に御大事のあらん時は一命擲ち、及ず

乍お力にならんとの決心を、奥様がお聞及びになり

升たら、嗚お悦びにムリ升ふ。

雪 ほんに左様にムリ升る。殊に当お屋敷は外々と違ひ、

文武の道を好ませられ、別て武術は奥様始め、おはした迄お心掛がムリ升れば、気性も自づと柔弱ならず。

女中① 私共は御剣道も未熟にはムリ升れど、互ひに心一致なし。

② 皆お国のかたく、が打揃ふての此血判。

③ 心も勇み、隔てなふ、女子の道も立升て。

④ お上へ御恩の万分が一、報ひ升るが何よりか。

⑤ 心嬉しふ存じ升る。

ト琴の合方に成り、下手廊下口よりお傍三代治、かいどり好みの形り、上草履にて出て来り、障子を明け、次の間にて手をつかへ。

三代治 皆様、御苦勞に存じ升る。

雪 是は三代治さま。

女中皆々 よふお越なされ升た。

三ヨ 皆様御免遊しませ ○

ト能き所へ住ひ。

私はチトお願ひがムリ升て、上り升てムリ升る。

国 何、願ひとはへ。

ト合方に成り。

三ヨ 余の儀でもムリませぬが、今日御老女を初め御寄

合の上、お取極に成升た其御加入の御書面の内へ、叶ひ升なら私もどふぞお加へ下さり升やう、お願ひ申に出升てムリ升る。

岩 コリヤ御尤もなる其仰せ。委細御聞及かは存ぜねど、此取極めの次第はお国さまより一ト通り、お聞なされませ。

国 お詞に任せ、私よりお話しを致し升ふ ○

ト合方きつぱりと成り。

其次第と申升るは、昨年より当春へかけ、上には將軍家の御供にて京都へお登り遊され、引続いで事穩ならず、先上には御無事にて御帰国にはならせられしが、將軍家御一大事の出来なし、上にも殊の外御心痛。次第によらば甲冑にて御出陣あらんも知れず、左ある時には長の年月御恩をうけし身の上故、女子といへど是をマア、どふ手を束ねて居られませう。夫故同意の皆様が此契約を致したのでムリ升。

岩 其かたくも皆お国の御家来のみ。そなた様の思召

は忝ふはムんすが、元江戸よりお出の身の上。御両

親の御案事（註）もどの様でムんせう。若も御一大事のあ  
る時は、一日も早ふ御帰国あるが御孝行に成升れば、  
此お望みはお止りなされたが宜しふムり升る。

トきつぱり断る故、三代治きつと成り。

三ヨ 夫はお恨みに存じ升る。たとへ此身は江戸表より  
参りし迎、幼少よりお兄に上り、お小性（註）よりお傍迄  
と勤め上しは、お上三の御恩。事ある時に勤めねば、  
いつか御恩が送られ升ふ。又御奉公に上る上は、不  
束ながらお上三のお為に尽し升る志シ。いかなる事  
にて両親に別れ升共、お主の為なら夫が不孝になり  
升ふや。矢張江戸の者と思召さず、どふぞ皆様同様  
に、お上三のお供の出来升様、お願ひ申上る。

ト泪乍にたのむ。岩瀬始め皆々かん心の思  
入有て。

岩 左程迄に御決心なら、お咄し申升るが、若御一大事  
に立至らば、お国の私共初め、女子揃ふて組を整へ、  
撃て出ん所存故、其時こそは一命を上三へ捧る同志  
の決心。

トきつといふ。三代治、悦ばしきこなしにて。  
三ヨ そりや固より此身の願ふ所。何の否やがムり升ふ。

ト岩瀬思入有て。

岩 其御心底を見る上は。

ト雪江に思入。

雪 左様なれば、三代治さま。

ト件の性名書（註）へ姓名を記し、三代治式の通  
り血判する事有て、元の所へ居直る。

三ヨ 是にて此身の望みも叶ひ、難有存じ升る。○

ト礼を述べ。

御奉公に上りし折、御法書へ血判を致し升たが、け  
ふは又一倍増る曠れの血判。実に嬉しふムり升る。

ト立派なるこなし。

女中一 実私共初め江戸のお方は何となふ、御柔弱と  
存じ升たが。

//二 武士に優りし其御氣質。

//三 日頃御剣道のおたしなみと申し。

//四 お羨しき事にムり升る。

ト皆々感心する。

三ヨ 皆様のお誉めのお詞、お恥しふ存じ升る。

ト此時廊下の口より詠への狎犬出て来、障  
子の側にて吠る故。



女中一 コリヤ、お九様が御□遊をいたしたと見得升わいなア。

ト是にて⊕奥女中、立て障子を明る故、狎犬走ツて三代治の側へ来り、迎ひのこなし。

女中二 テモよふ馴れて居り升るナ。

三ヨ コリヤ、何か御用でがなムり升ふ○

ト狎犬に向ひ。

只今上る程に、早ふ参りや。

ト是にて狎犬元の口へは入る。

皆様モウ私はお暇を致し升る。

国 左様なれば、三代治どの。

雪 また御ゆるりと。

皆々 お出被成ませ。

三ヨ 失礼御免遊します。

ト皆々へ挨拶なし、立ふとするを岩瀬呼止め。

岩 三代治どの、此度の事はまだ御披露致せし訳にもあらず、お上<sub>ミ</sub>の恐れもムり升れば、只何事もお心にて。

ト気味合の思入。

三ヨ 其儀はよふ承知致して居り升る。

ト琴唄になり、三代治悦ばしきこなしにて

下手廊下口へは入る。入替ツて奥女中壹人

出て来り、次の間の口に手をつかへ。

女中

ハツ、伺ひ上升。只今、桑折様の御召遣ひ竹事

是へ上り度、出ましてムり升たが、お目通りが出来

升ふや。定めてお聞濟になり升まいと存じ升るが、

伺ひ上升てムり升る。

ト岩瀬、一寸思入。

岩

表向では此所へ通す事は出来升ぬが、桑折様のお竹

と申は長らく勤めて居るものゆゑ、ゆるしておやり

被成升せ。

雪 斯る折柄なれば、是へと申しや。

女 ハツ。

ト引返しては入る。

国 桑折様のお節様が能ふお誉遊す召遣の竹。何事の願

ひなるか。

ト考へ居る。下手より以前の女中案内して、

幕明きのお竹出て来り、次の間の口にて平

伏する。皆々見て。

国 ヲ、召遣の竹なるか。これへ進みや。

竹 ハツ ○

ト次の間へ控へ。

召遣の身として御目通りの義叶ひまして、難有仕合せに存じ升る。

雪 遠慮なふ是へ参りや。

竹 ハツ。

ト奥の間へ住ふ。

国 何用あつて参られた。

竹 チトお願ひの筋がムりまして、伺ひ升てムり升る。

国 願ひの義は何事なるか。

竹 其お願と申升るは、私共の身分として御聞濟には成

升まいが、此度御契約の御供へお加へ下さり升る様、何卒お願申上する。

岩 テモけなげなる願ひ乍、其願ひは聞届難し。

竹 エ、。

岩 此度の申合せに就ては、兼て聞たでもあらふが、お手前の御主人お節様のお心添。コリヤお前よりお節様へよふ願ふたがよいではないか。

竹 其仰せは御尤も乍、再応主人へ御供の義をお願ひ申

升たる所、未にお聞濟になり升ず、思案に暮て居り升たが、主人事御同志の数に加はり升る上は、此身にとりておめくくと見過しては居られませず、あなた様へお縋り申、御無理な事とは存じ升れど、爰の所をお酌み分ケ遊して、此義をおゆるし下さり升ふなれば、難有ふ存じ升る。

ト実となつていふ。

岩 爰をよふ考へて見や。そりや道が違ふと申もの。御

手前の御主人がおゆるしなきに、何でこなたで聞濟

升ふや。願ひの程は忝ひが、此儀は断りいひ升るぞ。

竹 そりやどうあつてもかかないませぬか。

岩 たとへどの様に仰せなされても、これ斗りはきつと

お断りを申し升る。

竹 そりやこの様に願ひましても ○ 是といふのも主人

の御罰。

岩 エ、。

竹 イエ、御場所をも弁へず、伺ひ升たる此身の不覚  
○ 皆様宜しふお取なしを願ひ升る。

ト実となり、奥女中に会釈する。皆々も氣の毒なる思入。お国、雪江も心を察し。

国 是が只今の起りしといふにはあらず、只女子の心掛のみ。頓て聞済む時節もあらん。

雪 此同志に洩れたりとて、不忠と申訳でもなければ、尽す忠義はみな一つ。心せかずと、よふ精勤したがよい。

竹 ハイ。

ト泣て居る。

国 サア、下りやツたがよいぞ。

竹 ハイ。

ト立兼るこなし。

雪 早ふ爰を下り升ふぞ。

トなだめる様にいふ。

竹 ハイ、下り升でムリ升る。

ト唄に成り、悔し涙にくれる思入にて、皆々に挨拶し障子を立す、下手へは入る。奥女

中皆々不審の思入にて岩瀬に向ひ。

女中① あれ程忠義な心底にて。

// ② お供を願ふ志シ。

// ③ 適れ女子の魂と。

// ④ 存じ升るが、何故に。

// ① お聞済は。皆々 ムリませぬナ。

ト詰る。岩瀬思入。

岩 忠義といへど、私しにはまだ決心が ○

ト言掛、気を替。

永い月日を御覽被成ませ。

トまだ決心が足りぬといふ思入よろしく。

此とたん薄く風の音に成り、以前の狛犬廊下口より走り出て来り、三代治を尋ることな

しにて、トゞ文台の上に駆ケ上り、水入を倒し、いつさんに上手へは入る。此水書面の連名へ掛りたる心にて、雪江取上げ。

雪 ヤ、コリヤ血判状のにじみしは。

トハツと思入。皆々顔見合せ、岩瀬是を見て。

岩 認め上し名前さへ。

国 斯く散りくくに見得分ぬは。

ト心遣ひの思入。

岩 イヤ、事なふ消る ○

ト笑みを含むを木の頭。

前表でムんせう。

ト紛らす心。皆々は氣に懸るこなし宜しく、  
此模様賑やかに琴の六段打合せて

ひやうし幕

二幕目

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

第一番目二幕目

桑折屋敷決別の場

明治廿七年十月大吉日

紙数 十五葉

千穂万歳大々叶

筋書 竹柴其水

作者 竹柴金松

秀調

ぼたん

米菊

米花

左喜丸

左団次

権十郎

竹本連中

一 桑折堅蔵

一 同弟良助

左団次

権十郎

一 堅蔵悴三之助

ぼたん

一 堅蔵妻阿節

秀調

一 下女おてふ

米菊

一 同 おくわ

米花

一 同 おいと

左喜丸

竹本連中

### 桑折屋敷決別の場

本舞台一面の平ぶたい。正面上手九尺の床の間。是へ八幡宮の軸。此前、三玉に神酒を備へ、上の方に鎧櫃へ甲冑を飾りあり。続いて四尺地袋、違ひ棚。下の方、白地へ唐画の襖。ずつと上手、画心に塗骨の障子を建切り、下の方、折廻し襖の出這入り。なげし附釘隠しの欄間。向ふ揚幕の所、杉戸の出這入り。舞台、花道共薄縁りを敷詰め、都て会津の場外、重役の屋敷広間の体。爰に下女おてふ、おくわ、書院火鉢、烟草盆を並べて居る。此もやう合方にて幕明久。

おてふ なんとおくわどの。騒がしい事でムんすなア。  
おくわ ほんに御城内では軍評定。女隊とやらをお組に成り、こちらの御新造さまもお加はりになり。

てふ 江戸から来て居るお竹どのも、軍のお供が致したいと、御殿へ願て出たれども、其お許シがないとの事。

くわ けふは九月のお節旬なれど、五月人形を見る様な鎧兜をお取出しになり、御用意遊ばす此時節。

てふ 御舎弟様が御内談に御入来あるとのお先触。

くわ お客設ケは仕乍も、案事られたる此御時節。

てふ どうぞおだやかに仕たいものじやなア。

ト爰へ向ふより下女のおいと出て来り、下に居て。

おいと 御舎弟さまが御入来にムり升る、

てふ それではお奥へ申上れば、おくわどのにはおもて

なしの支度をお頼み申升。

くわ それはわたしが引受ました。

いと ドレ、御案内を致しませう。

トおてふ、うしろの襖の内へ、おくわは下手、おいととは向ふへ引返して這入る。是より床

の浄るりに成り。

へ乱れたる世の形勢をかこつ身も、行義乱さぬ武士

堅氣。案内に連れて入來たる、客は儀式の麻上下。

出迎ふ兄も一ト間より服改めて着座なし。

ト此内向ふより桑折良介(三十才)、麻上下

一本ざしにて、いぜんのおいと案内して出

て来る。うしろの襖を明け、桑折堅蔵(三十五

才)、同じく麻上下一本ざしにて出て、上手

へ住ふ。良介下手へ住ふ。下女は辞義をし

て下手へ這入る。

堅蔵 定めて御用繁多ならんに、よくぞ祝義に来てくれ

しぞ。

良介 重陽の御祝義申入度参りし所、兄上にも御丁寧な

る御礼服。近頃恐入てゐる。

堅 イヤ、そちも我等も今日迄存命なして、式日の祝義<sup>儀</sup>

を欠ぬは、目出たい事じや。

良 仰せの如く御同然に存命なすは、先以て目出たい事

にゝり升。

へ折から下女が持運ぶ茶器もあいその花なれや。い

わぬ色なる山吹も、会釈こぼして立て行。

ト此内下手よりいぜんのおくわ、おいと、

高茶台と菓子を持出て、良介の前へ置て下

手へ這入る。

堅 シテ、今日ツた其方には御城内の軍議所にて何か役

目を命ぜられしか。

良 ハツ、越後口への出張を申付つてゝり升。

堅 ヲ、そふなふては叶ふまじ。そちも我等も忠勤を尽

す時節に至りしなり。

良 スリヤ、兄上にも何れへか御出張を命ぜられしか。

ト是より逃への合方に成り。

堅 我等に於ては、昨日命ぜられしが、敵当国へ責寄せ<sup>政</sup>

なば、第一番に討て出、必死を極め防戦なし、君へ

忠義の魁に討死なさん覚期ゆる、早当国の攻口へ敵

勢寄せしと承り、明日にも出張の御沙汰あらんと、

相待てば、そちに逢度思ひ居りしに、祝義に事寄せ

暇乞に参るといふは、悦ばしい。今宵はゆるく酒

宴を開き、打語ふて此度の門出を祝し遣したし。心

落居て過しくりやれ。

良 かく御覚期の上からは、何をか包まん拙者において

も、君命蒙り越後口へ明日出張仕るは、早今生のお

暇乞。忠義の為に一命は君へ捧る所存ゆゑ、御名残をも致し度、服改めて重陽の祝義にかこつけ参りしが、兄上にも兼てよりそのお覚期でありしとは、言合さねど兄弟の所存は一ツ、二腰を帯せしものゝ心掛ケ、斯くぞありたく存じ升る。

堅 ヲ、それ聞て悦ばしい ○

トうしろへ向ひ。

こりや、申付し酒肴を持て。

ト呼ぶ。うしろ襖の内にて。

お節・三之助 ハツ。

ト答へる。

へハツと答へて持出る、酒肴も敵に勝栗や、味方の羽翼のし昆布。銚子持添女房が、子息と俱に取並べ。

トうしろの襖を明け、妻のお節、袴形りにて三宝へ干肴をのせ持出る。前幕の三之介、袴形り一本ざしにて、銚子盃を持出て来り、よろしく並べ。

お節 良介さまにも、よくぞ御入来。重陽の御祝義相変らず。

三之助 目出たくお祝ひ。  
兩人 申上ル。

良 姉上といゝ三之助、心利たるおもてなし。目出たく頂戴仕る。

節 おだやかならぬ時節乍、相変りませず重陽の御祝義に御入来下され、味方の勝利。菊の酒開き升るは武門の誉れ。目出たふお過し下さりませ。

堅 良介にも、明日は越後口への出張を命ぜられしと申事じゃ。

三 スリヤ、伯父上にも明日は御出張に相成升か。

節 それなれば猶もつて目出たふお過し下されませ。

良 イザ、兄上よりお開き下さい。

堅 あれへ祭りし弓矢神八幡宮の神酒を下げ、良助に遣すであらふ。

良 実にや源家の守護神たる八幡宮の御神酒は、願ふ所にムリ升る。

節 夫ではあれを下ゲ。

三 お酌致すでムリ升る。

へ神酒を其俣差置ば、

ト三之助、神酒を下ロし。

堅 然らば兄より開くであらふ。

へ呑む兄弟や妻や子も、口にいさめど今生の是が別れと汲替す心の内の暇乞。しめり勝にぞ見得にける。

ト此内皆々盃事よろしくあつて納る。

堅 サ、此上は良介も打くつろひで過しくりやれ。

良 難有く頂戴仕る。○シテ、兄上には今度の戦争、いかゞ思召升な。

堅 ナニ、いかゞ思ふとは。

良 將軍家の為、上を初め斯大軍を引受升るも、忠義を守る倭魂。然し事情を考へ升ると、当主へ兵をむけられ升るは、実に御無念には入りませぬか。

へ義心に忍び、さし迫る。兄は無念を押かくし。

ト思入あつて気をかへ。

堅 イヤ、なんで無念に思ふぞ。錦旗へ対し奉り、炮発致せば理非を論ぜず朝敵に相違なければ、天下の諸藩官軍となり、奥羽へ下り征伐なすは、こりや当然と申ものじや。

良 サ、夫ゆゑ残念至極にゐる。  
堅 何と申。

良 お国におつて拙者如きはその節お供に列ならねば、その曲直は存ぜねど、抑モ当正月、伏見に於て將軍の上洛を遮ぎる敵の砲発より、事起りたる戦争も、錦旗へ対し奉り、敵たふ所存のなき事は鏡に懸て知れし事。然るを退れぬ場合に及び、慶喜公には大坂より江戸へ引揚御謹慎、赦罪の御沙汰はありしかど、三百年來泰平にお治めありし神君の、旧恩蒙る御譜代迄、時節といへど左右に別れ敵味方と相成は思へば無念至極でゐる。

ト是より床のメリヤスに成り。

堅 へ義を金鉄の良介が、慨歎なすぞ道理なる。堅蔵わざと打笑ひ。

堅 アハ、ハ、ハ、ハ。忠義に凝りし了簡では、左様思ふも尤乍、前將軍慶喜公すら謹慎赦罪を遊したまへば、その簷下に附く藩主たるもの、仮令多年の恩沢あるとも、いかでお名を顧みざらん。只恨むらくは去年迄、京師に於て守護職の大任蒙る我君が、今日斯る事になりしは、申上べく様もなく、只臣下は堅く命を守り、忠義の二字にて防戦なす外に手立はあらざるわへ。

良 サ、夫ゆゑ残念至極にゐる。  
堅 何と申。



へ主君を思ふ赤心はかはりなきこそ頼母し。妻も傍にて勇み立ち。

節 夫故兼て城内の奥向にても誓を立て、イザ戦争といふ時は女乍も討て出、御恩を報ぜん志。又少年の夫々も隊を組立テ討て出、功名手からを致さんと調練致しおり升由。

へ母が披露に三之助、手柄なさんと進み出で。

三 私なぞも日頃から、大きな凧を揚、御出□□□時は凧に乗り、敵の機密を味方へ知らせ、能く調練をせし上で□□忠義をば、尽す□□ムり升。

へ聞くに良介打悦び。

良 ヲ、そちも此程組立し、少年輩の白虎隊へ編入なせしと聞く上は、必死を極め討て出、功名手柄をしてくりやれ。

堅 その上当地は天然の要害堅固の名城にて、西北に山聳へ、東に出丸の砦を構へ、猪苗代の湖水あれば、南の方のみ立切りなば、攻るに難き若松城。全国残らず敵となり、数万の兵にて取巻くとも、容易に落城なし難し。

節 殊に九月の末よりして降雪あれば、明年の花咲く頃

に至る迄、山野も雪に埋もれて戦争などはなり難し。併し寄せ手は名にし負ふ、土佐の板垣退助殿。まつた薩摩の桐野殿、其外長州、大垣など皆勇猛の隊長等を撰んで兵の指揮なせば、それへ対して防戦は

味方の必死、今此時。

堅 過ぎし昔に我父が、かたみにせよと譲られし陣扇あれば取出し、そちに門出のはなむけせん。○

へかたへに飾る甲冑の六具に添へし陣扇を、さつと開て与ふれば。

ト上手の鎧櫃の脇にある詔への陣扇を取て良介の前へ開て出す。此陣扇に金泥にて信の一字記しある。良介これを見て。

良 思掛なき此賜もの。父のかたみは猶以て難有く受納致すでゝる。

へ打悦で押頂く。甥は目早くそれと見て。

三ノ その陣扇を見升れば、信といふ字がムり升のは、それはやつぱりお祖父さまの御手跡でムり升か。

堅 ヲ、それこそは父の直筆。信の一字は当国の信夫の莊を領したる、佐藤庄司が二人の嫡子、嗣信、忠信兄弟に我子二人もあやかれと仰せ置れし御教訓。

良 誠や兄は八嶋にて判官殿の御馬前にて、君に代つて  
最期を遂げ、弟は吉野の雪中に、君に代つて勇敢な  
し、末世に忠義の龜鑑となる。

節 その兄弟の妻二人も、陸奥下向の主君に仕へまつり  
て忠義を立テ、夫に代る赤心は、操の鏡と世の誉  
れ。

三ノ 又、嗣信の一子と聞く鶴若とやらも父同様、忠義  
の為に若年にて戦死をとげしと世のほまれ。

堅 門途を祝し良介には、その陣扇にて一トさし舞ひ、  
目出度帰宅してくりやれ。

良 舞は甚ダ不得手ながら、御所望なれば取あへず。然  
らば兄上、御苦勞作。

堅 ヲ、コリヤ、嗣信にゆかりある、八嶋の切に致  
そうか○

へ扇をかまへ、取あへず。

トよろしくあつて。

ウタヒ へ思ひぞいづる檀の浦の。

ト是より下座へとり、謡ひになり。

ウタヒ へその船軍今はやく。閻波にかへるいきし

にの、海山一度に震動して、船よりはときの声、

陸には浪の楯。月にしらむは劍の光り、うしほ  
に写るは兜の星の影。鬨の声と聞へしは浦風成け  
る高松のく朝嵐とぞ成にける。

トよろしく舞にて納まる。

節 いつも替らぬお舞振り、恐入升てムリ升る。

良 是にて最早御暇いたす。

堅 然ば良助。

良 御機嫌能いらせられませ。

ト三人に会釈して花道へ行を。

堅 コリヤく。

良 ハツ。

ト花道下に居る。

堅 予々承知ならんが、主君の思召は將軍家へ御親義、

祖宗へ御孝行の事は、必ず重んじ奉れ。

良 ハツ、決して忘却仕りませぬ。

トお節、急度なつて。

節 良助殿、戦場にてお目に掛るを樂み居り升るぞ。

良 若しかけ違つてお目に掛らねば、閻魔の庁前にて拝

顔いたさん。

堅 ヲ、いさぎよいな○

ト思はず良介、お節三人顔見合せ、実となつて、思はずホロリとして気を替るを木の頭。

腕を頭はせく。

ト世話にくだけ、腕を叩く。良介心得たるこなし。お節、三之助見送る。此模様よろしく

ひやうし幕  
ト幕引付ると良助件の陣扇を畳んできつとなる。是を静なる舞の鳴物に成り、良介よろしく向ふへ這入る。留の木にて

シヤギリ

### 三幕目

当ル午の十月きやうげん

会津産明治組重

第一番目三幕目

滝沢村松並木の場

天寧寺山頂上の場

御城内奥御殿の場

戦地仮病院室の場

東山天寧寺前の場

寿々女

小由

左之介

若之介

秀調

升若

蕙女

蔦之介

明治廿七年十月大吉日

紙員 六葉

千穂万歳大々叶

筋書 竹柴其水

作者 河竹新七

□五郎	松五郎	米太	左升	左目藏	高藏	好太郎	三寿藏	小半次	左文治	荒次郎	寿美藏	米藏	小団次	左団次	佳調	今江	鯉之介	秀世
-----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
いわ	滝	甲	布	吾	女武者	保原	赤安	堅藏妻	阿節	竹本	権十郎	官軍	百性	大	高之介	五郎	高之介	葛三郎	寿美右衛門
わ	沢	賀	瀬	妻	須川	雪江	阿国	阿節	節	連中	郎	大	性	ぜ	介	郎	介	郎	門

佳	今	鯉	蕙	秀	葛	蕙	升	秀											
調	江	之助	子	世	之助	女	若	調											

- 一 同 音瀬
- 一 同 麻二
- 一 同 幾代
- 一 同 八十二
- 一 桑折堅蔵
- 一 馬丁金太郎
- 一 召遣於竹
- 一 老女岩瀬
- 一 看護婦三代治
- 一 実ハ奥女中三代治
- 一 中間久六
- 一 実ハ進藤勇助
- 一 病院小使六兵衛
- 一 藤原越後
- 一 中間半蔵
- 一 同 吉平
- 一 桑折良助
- 一 土湯東岳
- 一 笹川岩七

- 寿々女
- 小由
- 左之助
- 和之助
- 左団次
- 同
- 小団次
- 寿三郎
- 米蔵
- 寿美蔵
- 荒次郎
- 左文次
- 小半次
- 三寿蔵
- 権十郎

- 一 梁川鮎之助
- 一 郡山峯雄
- 一 半田銀之助
- 一 瀬上角蔵
- 一 日和田照彦
- 一 本柳松右衛門
- 一 長沼辰之丞
- 一 仙道七郎
- 一 百性五左衛門
- 一 同 勘六
- 一 同 甚太郎
- 一 同 源兵衛

- 荒右衛門
- 寿美右衛門
- 若蔵
- 荒平
- 竹本連中

**滝沢村松並木の場**

本舞台高梁通り正面蒲鉾形の草土手。上に丸物杉の立樹、向ふ山々、裾通り在体を見たる稲田の遠見。此在体の間切出し、遠見を遣う詔らへあり。上下樹木の植込みにて見切、上手松並木の向ふより舞台前へ出る

往来を明け、都て若松在滝沢村松並木の体。  
爰に序幕の中間半蔵、吉平そぎ袖も、引脚  
半わらんじ一本ざし、陣笠を冠り柿を喰て  
居る。下手に百性四人うしろ鉢巻繩襷脚半  
わらんじにて籠に柿を入、兩人は切溜に餅  
を入れ、抱へて居る。此見得、調練太鼓笛  
の音へ在郷様の合方にて幕明く。

○ 柿は熟したの斗り撰て参り升たから、渋イのは一ツ  
もムり升ねへ。

□ 餅も切溜へ詰て来たゞから、幾らでも上らつせろ。

△ まだ村でかはるゞ柿も積出せば、餅も搗いて居り  
升はへ。

× まだく、二ヶ月や三月<sup>キ</sup>ではなくなりましねへ。誰  
でも構アねへ、お国の方から勝手次第に上つて下せ  
へ。

半蔵 有難へく。行先くで村の人達が？を揃へて出  
張ツて居たので、ツイに是迄戦地へ出てひもじい思  
ひをした事がねへ。

吉・半 そんなに勧めても餅迄は行届かねへ。モウ柿で  
腹がいつぱいだ。其替り今爰へ屋敷の物がやつて来

るから、さうしたら喰して下せへ。

× エ、皆さまに上げたい斗り、斯うして毎日出張て居  
り升。

ト矢張右の合方にて向ふより序幕の中間久  
六、陣笠そぎ袖一本ざし、脚半わらんじに  
て強葉の箱を背負出て来り、直グ舞台へ来  
る。百性は出迎、手伝ツて箱をおろさせや  
うとするを。

久六 イヤ、待てくんねへ。こりやア強葉の箱で、めつ

ぼうやかましい代呂物だから、おろす事は出来ねへ  
から、此俣爰へ休まして下せへ。

○ イヤ、其様なやかましい箱なら、わしらが歩役に背  
負て行から、こなた衆は警固してゐるがよい。

半 久六、此人達は滝沢の者だから、安心して息をつい  
て行がい。

久 夫では手めへも知ツて居るのか。

半 知て居る共く。此人達なら。

吉・半 大丈夫だ。

ト是にて久六、件の箱をおろし、汗を拭乍  
ホット思入有て。

△ 嘸草臥さつしやつたらう。柿でも只今搗立の餅でも、自由に喰て下さりませ。

久 イヤ、抜目のねへ百性達だ。戦争で滝沢あたりは農業が出来ねへと聞たが、直ぐ餅や柿で商内するとは、此位ひこすく立廻らにやアいかねへな。

吉 何、此人達のは売のじやアねへ。村中惣出で餅を搗柿をとつては籠に入れ、かはるぐ御戦地へ運び、屋敷の者を助るのだ。

□ 斯言時に殿さまへ、日頃の御恩をかへさなければ、返す時がムらぬから。

× 餅と柿を戦地へ運び、御家来衆へ上升て。

○ 軍の力餅と言、延喜「縁起」を付、方々辿つて歩行升はへ。

久 ア、夫ではおめへ方は錢儲けでなく、殿さまの御恩返しに今度の軍サに負ないよふに兵糧の手助けするの。成程、会津の殿さまは家来の衆斗りでなく、御領分の百性迄、夫程有難く思つて居るとか ○

ト思入有て、気をかへ。

実に感心な心掛だなア。

半 サア久六、遠慮はいらねへ。ずんぐ喰ねへ。  
久 所がおらア何も喰えねへ。御城内に喰物がふんだん

だから、今しこたま詰込んで、夫から此箱を背負つて来たのだ。

○ 夫ではせめて行ツしやる先迄わしらが背負て行升べへ。

久 夫じやア本営手前迄おめへの肩を借りよふか。

○ ハイ、貸共ぐ。軍サに出さつしやる手伝ひなら、根限り働き升はへ。

ト件の箱を背負。

久 イヤ、こんな有難へ事はねへ。是では腹ツこなしに成ねへで、余り楽過るやうだ。

□ 其替り戦地で働き、御殿さまが勝ツしやるやう、骨を折てくれさせへ。

久 おめへ達の一心でも負ツこは有やしねへのに、兵糧に困らねへのが第一の強身といふものだ。

半 夫じやア、是から本営へ。

○ わしらも警固して行升べへ。  
久 こいつア、おらア丸もふけだ。

ト矢張右の鳴物にて、上手の松原の内へ這入。段くと下手へ土湯ツチユ、東岳を初メ東軍の武士十式人、後ろ鉢巻筒袖けいこ着義経

袴わらんじにて、左りの袖に合印の小籜を附ケ、各抜刀にて三人ヅ、足並揃へて出て来る。此跡より前幕の桑折堅蔵、後ろ鉢巻陣羽織義経袴大小脚半わらんじ、やはり袖印を附、抜刀を持、続イて出て来り、上手より舞台へ出て能程に。

一 此追分より。

皆く、向ふへ切レ升ぞ。

堅 アイヤ ○

ト是にて右へ廻り、三列に並ぶ。堅蔵は抜刀を構へ皆くに向ひ。

各知らるゝ如く、敵滝沢村近くへ進軍致せば、一層必死の働きてゑるぞ。若此街道を防がん時は、味方の見込みは無に成り升ぞ。併し再応念を押は、決して錦籜へ向ひ奉り発砲いたす訳ではゑらんぞ ○

ト実と見渡し、思入有て。

只 ○ 止を得ざる場合にて、斯く戦争と相成る上は、一命は公にさゝげ、此防戦が肝要でゑるぞ。

ト一統きつと成て。

一 敵軍滝沢は過させません。ナア二、抜刀隊の勢ひを

もつて、屹度喰止て見せ升。

二 激戦は元より覚期。炮兵隙を真ツ先に続イて切込ム我輩らの決心。

三 たとへ討死致す共、見苦敷死は仕らん。

四 隊長の仰。

五 十二人 屹度守り升。

堅 官軍の参謀は名におふ土州の板垣退助殿でゑるぞ。

中く、苦戦でゑる。御承知あれ。

一 皆々 承知仕ツた。

ト此内、小筒の炮声二三発する。皆くきつと成る。

堅 サ、早くく。

ト此号令に皆々振かへり、花道へは三人ツ、駆足に成り行。此跡より。

進メーくく ○

ト声をかけ乍、抜刀をふる。調練太鼓合方にて逸散に向ふへ走り行。此時ばたくに成り、向ふより官軍大勢、赤熊の冠り物せし差図役と一所に、後ろ鉢巻だんぶくろわらじがけ、思ひくゝの拵らへにて、腕に錦



の切れを附、ケツベルの鉄炮を持、出て来り、花道にて衝突する。是にて剣先を揃へ突出す。東軍は是へ切込ふとする。睨み合、堅蔵たけり立ツて。

進メく。

ト声掛る。此内抜刀隊兩人切込み、是より乱軍に成り、ごつちやの立廻りにて舞台花道とニ<sup>タ</sup>手にて打合ひ、ト、両軍向ふへ□て這入。堅蔵は急度成て跡より向ふへ走り行んとして、花道へかゝる。此時ドンと一発音して、胸板に当り、たちくと舞台へ戻り倒れる。ばたくに成り松原の奥より前幕の良助、後<sup>口</sup>鉢巻鎧下義経袴大小わらんじがけ、抜刀にて走り出て来り、此体を見て。

良助 ヤ、コリヤ兄上には。

ト恟りなして抱起し、介抱する。是にて堅蔵心附キ。

堅 ヲ、良助か。やられた。

良 たいした事はムらん ○サ、肩へ掛<sup>ケ</sup>て参る。仮病院迄お出被成い。

堅 イヤ、いかん。急所だ。逆も助からん。  
良 イ、ヤ左にあらず。一ト先御出被成い。

ト此時又一発、並木の立樹へ当り、仕掛にて枝折る。良助べつたりうつ伏にて是を除ける。かすめて調練太鼓に成、切出し在体の間へ烟り立、軍令簾と鉄炮の剣先往来する。堅蔵は苦痛の内にて是を見やり。

堅 猶予致すと汝もいかんぞ。我に構はず迎へく。  
良 イヤ、此俣に見捨られん。サ、肩へ掛<sup>ケ</sup>て参る。

堅 ヤア、いかんと申に。然らば首を打テ。

良 エ、。

ト又一発来る。

堅 ヤア、討んか。サア、打テ。

良 ハツ、ハツ。

堅 エ、討テと申に。

良 是非がムらぬ。

ト刀を持って後ろへ廻る。堅蔵、片足をふみ出し首を前へのり出す。良介、思ひ切ツて討落す。ばたくに成り、上手より幕明の半蔵、吉平走り出て来り。

半・吉 ヤア、桑折さまには。

良 ヲ、能所へ参つた。此死骸、土手の根方に埋めてくれ。

半・吉 ヘイく。

ト此内良介、兄の片袖を切て首を包み、差  
図する。両人は死骸を手がきにして上手へ  
這入る。良介屹度成て。

良 此上は兄の敵、イデや目に物見せてくれん。

ト左りに首を包み、ツカく、と花道へ行か  
ふとする。小影から官兵兩人伺ふて。

官兵○ あく迄敵は東軍隊。

同□ 以後の見せしめ、討取くれん。

良 何を。

進軍の太鼓譟らへの合方に成り、並木の間  
より以前の久六伺ひ出で、向ふを見送り、  
実と思入有て、矢立を出して手帳を附る。  
爰へ上手より以前の半蔵、吉平出で来り、  
並木の向ふを伺ひく、久六の傍へ来り。

半・吉 進藤氏。

久 あたりはよろしうゐるか。

半・吉 只今仔細ムらぬ。

ト久六、小声に成り。

久 東軍の有さま、実に驚き入たものでゐる。武士は元  
より民百性百姓に至る迄、国主を思う真心は、一人ひとと  
して違ふものなし。

吉 粮食手薄にならんとせば、農民こそつて食を運び、  
或は川に橋をかけ、身命なげうち助力なすは、申附  
ずしてまつその如く。

半 実に会津は農民迄、国恩思う者のみゆゑ。

吉 容易に落城。

半・吉 致すまじ。

ト此内、色く、手帳へ留。

久 三年此方間者に入込み、内外共謀ツたが、国主は朝  
帝將軍を重んじ奉り、領内最穩いそか成は、能撫育せし  
ものか。敵にいたすはおしきものじや。

半・吉 シテ今日の実況は。

久 最早逐一認めれば、是より城下へ進むが肝要。

半 然ば是より。

吉・半 猶も様子を。

久 身共は一ト先参謀へ○

ト此時二三発小筒の音する。三人うつ向、除るを道具替の知らせ。

心を附よ。

トきつと成て、久六いつさんに向ふへ這入る。兩人身支度をする。此もやう合方山おろしにて道具廻る。

### 天寧寺山頂上の場

本舞台上寄四間高足の式重岩組の蹴込み。所々松の立樹。向ふ山々の遠見。下手根方に若松城の切出し。式重の下手、山の昇り口、奈落より上る足掛り。松の梢。都て天寧寺山頂上の体。爰に序幕の壮年輩、大橋源弥、最上武雄、貝田稲丸、若松半之丞、安積山造、何れも稽古着袴も、立わらんじ掛、抜刀にて腕足を結び、身体を補ツて居る体。山おろし床の二重にて道具留る。

へ風さそふこずえはいと、差強く枝を鳴すを事共せぬ、壮年隊は身体の勞れやすめて山下を見おろし。

ト此内、山上よりあたりを見廻し。

大橋 飯盛山と二手に別れ、此山上迄集りしが、滝沢口の破れより敵は追々御城下へ進軍致す様子なり。最上 シテ、各の疵所まつた苦痛はいかゞでゑるな。

若松 勇士は食せず、飢ず、疵を蒙りて屈せず。再び生て返らぬ決心。一向に苦痛でゑらぬ。

安積 頂上ゆゑ清水もなく、是には殆ど当惑いたした。貝田 御城下の烟首と申、滝沢口の破れしは。

ト無念のこなしにて。

大・五人 実に残念でゑるよな。

へ痛手を忘れ面々は怒りを含む麓より、是も血氣の壮年隊。草踏分て登り来る。

ト此内麓より檜原松之丞、同じく弟ト重八郎、若衆かつら筒袖袴大小わらんじにて、鉄炮をはすに背負、登り来り。

松之丞 ヲ、モウ此所へ参つたか。

重八郎 実は所々を尋ねて居たぞ。

安ズ お知せ申場合もなく、やうく切抜け。

安ズ・五人 是へ参つた。

松之 非常な激戦に相成り、討死せうかと思ふたが、兩刀にて切まくり、とうく虎口を退れて参つた。

重八 各、大ぶやられたな。

大ハ イヤ、差たる事はムらん。此通りちつ共屈し申さぬ。

最力 一ト息ついて下山なし、御城下へ侵入なし、敵を再び追返さん。

貝タ 左なきときは本城へ連絡に困難ならん。

若マ イザ是より。

最・五人 下山致さん。

へ血気にはやるをこなたは押止。

ト五人立上るを、松之丞留メ。

松之 イヤ、待れよ各。うかつに切込む事いかん。ア

レく、敵軍は御本城の十重廿重迄取囲み居れば、たやすくは進まれず。

若マ シテく、君らの。

五人 考へはな。

ト床のメリヤス、山鳩の声に成り。

松之 今朝御城内より出る前、桑折堅蔵殿の子息三之介

殿と示し合せしは、御城の一方血路を開かば、合図

の狼烟を上る約束。又、其事ならずして応<sub>こた</sub>へ、討死

と決心いたさば、的に動揺悟らぬ為、予々心掛置た

る風を揚げて知する筈。此二ツを見ざる内は、此山上は動けんぞ。

重八 サ、爰が生死の二道にて、若合図の風あがらば、いさぎよく切腹なさん。又、吉兆の狼烟あがらば、敵の横合より切込んで討死なすか、但し又、功名なする時の運。何れに致せ日頃より願ひ置たる武士の曠。

松之 各戦ひなすは、日頃より武士の望む所でムるぞ。

大ハ 然らば是より城内の報知ムるを。

五人 楽しまん。

へ様子いかにと伺ふ折柄、忠義は同じ一ト筋道。年老たれど事共せぬ、大隈いきせき尋ね来て。

ト此内麓より老士保原大隈、更たるかつら裏金の陣笠陣羽織義経袴大小にて、鉄炮を杖に登り来り。

大隈 ヲ、是に集り居られしか。わしはこなた衆の迎ひ

に参つた。サ、直グ下山致されよ。

重八 保原殿、何故下山を促さるゝな。

大スミ サ、官軍弥々御城下近く進軍に及んだれば、壮年輩は是より落よとのお達しじや。サ、早ふ此場を

落られよ。

へいふにこなたは耳も掛ず。

松之 夫は以ての外の仰でゐる。生て再び帰らざるは、

平常父より聞たる詞。則只今、其場合に到り、何安

閑と戻らふや ○ コリヤ、各方は何と思つぞ。

重八 兄の詞に何背ん。拙者は外に返事はゐらぬ。

大八 何ゆへ有て壮年隊の鋒先を挫かるゝか。

最力 戦場に於て不吉の仰せ。武士に似合ぬ卑怯でゐるぞ。

貝タ 御身は然も玄武隊の勇士にてはあらざるか。

若マ ないしは年寄れし故、老耄を致されしか。

安ス よも隊中に老耄なる武士は一人りも有まじ。

松之 疾く此場を。

重・皆々 下山あられよ。

大ス サ、其詞感心いたした。左程の決心あらばこそ、

白虎隊の名を以て一ツ方引受たまひしぞ、其連れ成る魂に猶々討死さすのが ○

へ老の一徹目をしばたゝき。

そりや親御達は思ひ切てゐらふ。決して歎きはされまいが、まだ十代の若衆達。苔の花を散すのが、他

人でさへもおしき故、いつそ此地を落延て、後の時

節を待つた方が良策ではゐらぬかと、是も御身等を

可愛さの余り、思ひ余つて参つたのだ。何と落る気

はゐらんか。

へ涙呑込み勸むれば、いつかな変ぜぬ壮年輩。

ト此内大隈、言悪そふにいふ。壮年隊皆く

屹度成て。

松之 コレ、保原殿。君は武士ではゐらぬか。玄武隊へ

編入されし身を以て、我等に落よとは、隊名にかゝ

はりませう。年嵩の身の上にて落よとは穢らしい。

夫共ニタ股武士の裏切りか。白虎隊には左様なもの

一人もゐらんぞ。

大ス ヤア、裏切とは何を以て。お国の藩士に裏切致す

もの、一人もゐらんぞ ○

ト屹度思入有て、気をかゑ。

なれ共、此苔を散すが不愍さ。どうじや落らんか。

松之 イ、ヤ、落ん。落る場合に到らば切腹いたす。

大ス スリヤ、どう有ても決心致されしよな。

松之 かほど迄の御心添、忝くは存ずれど、一心は変じ

ませぬ。

大ス どふでもいかんか。

重八 下山被成れい。

五人 保原殿。

トきつといふ。保原実と思入有て。

大ス ア、おしき花をば ○

へ猛き心の武士も、同じ思ひの愛着心。是が此世の別れかと、齒を喰めて立上り。

ト此内是非なく立上り、下手へ行掛ケ。

此決心では向ひなる飯盛山の壮年らも。

へ道は直なる死出三途。助ケる事もならざるをか

と、余る思案のとつおいつ。是非もなく別れ行。

ト見返り乍下手へ行。皆くも道を気を附ろといふこなしあつて、切り穴へ這入。

へ折柄吹来る山風と共にうなりの音すさまじく、遙かあなたの城内より上りし風待構へし壮年隊はきつと見やり。

ト此文句能程に、風の音に成り、下手城の切出しより詔への風、相引にて日覆へ引上ゲ、段々舞台前へ上り来る。皆々山上の立

樹に取附、是を見おろし屹度成て。

大ハ ヤ、折柄起る大風に。

若マ 御城内より。

五人 いかを上げしは。

松之 ム、扱は予ての合図なりしか。

五人 檜原氏。

松之 ム、○

へ早是迄と苦痛も忘れ、無念の涙はらくらく拳かためて脇目もふらず、暫し詞もなかりしが、又もやあなたに心をつけ。

ト此内皆く風を見て、悔しき思入。此内大砲の音して城の外廓へ煙り立昇る。

ヤ、続いて城外一円に。

重八 各いかんぜ。

五人 ム、。

へ只一言の詞もなく、銘々顔を見合せて、あきれ果たる斗りなり。

松之 斯く報国尽忠も。

重八 事成ずして相果るか。

松・重・五人 チエ、残念な。

へ父の代なりし其時より厚き恵みを賜はりし、城下も今は斯成かと、踏しむ足の力にて岩根もくぼむ斗りなり。

ト此内皆く座したるまゝ、松之丞は皆々の中へ立身にて山下を見おろし、実と成り。

松之 飯盛山へ集りたる野村の隊も一ツ時に生害なすは必定なり。

重八 思へばけふ迄学問も一所にいたした中なるゆゑ、斯一ツ時に相果るは。

松之 能々尽ぬ互ひの因縁 ○ コリヤ愉快じやの。

五人 ム、左様じや。

松之 清き最期をいたそふぞ。

六人 承知いたした。

へいふが此世の別れぞと、竹馬の友達諸共に見廻しくどつと座し、惜き花をぞ。

ト此内松之丞、皆く顔見合、少しも愁いの思入なく、別れをおしむ事有て、ト、双方両肌をぬぎ、馬手差を腹へ突立て、又は咽喉へ突立ル。此もやう三重山おろして道具廻る。

### 御城内奥御殿の場

本舞台真中四間、なげし附、常足の式重。

雲形桐に鳳凰の金襖。平舞台の上下銀地秋草の張壁。上下画杉戸。都て城内上段の間の体。爰に序幕の老女岩瀬、白の襷がけ一本差わらじがけにて式重へ腰をかけ、平舞台に同じく序幕の雪江、同じ形り白の鉢巻にて切首の髪の毛へ札紙を附、奥女中須川、大台の上にて各札を認め、跡序幕の女中吾妻、布瀬、甲賀、滝沢、麻次、幾代、八十二の七人、蒔画の盥の中にて切首の血を洗ひ、下手に鎧櫃より出したる首沢山脇台へ乗せてある。此見得、り、しき合方にて道具留る。

- ① 此様におきれいに血を洗ひ、一々御名前をお記し遊ばし。
- ② 御埋葬被成升れば、御身内や又御親類が。
- ③ たとへ討死被成ふ共、有難がるでムりませう。
- ④ 猶も此上必死と成り、戦ひあらば味方も討れん。
- ⑤ 最早、御菩提所へ運び升たは容易な事ではムり升せ

ぬ。

② お印のあるはよけれど、髻り斗りは本意ないわけ。

③ 第一印を附升に、実にわかり兼升る。

① 一昨日より昨日へかけ、日増に数のふへ升るは、余程激戦に成ましたな。

老女 多くの首級の血汐を洗ひ、御菩提所へ葬るは斯く戦争の其中にて、実に御上の有難き。死す共武士の誉れ故、成仏致すでふりませう。

雪江 最早昨日の倍に成升たが、あなた方にお任せ申、早ふ戦ひが致したふり升。

老 夫は私しも同じ事。いよ御廓外が破るゝとあれば、此俣に居られませねば、日頃のたしなみ顯はずは、御同様に此時なり。年老たれど、たやすくは負ぬ積りでふり升。

⑥ 御老女様を始めとして、テモおいさましい御心立に。

⑦ 私共迄御上の為には、一層心が引立まして。

⑧ 死をおしませぬ決心故、此よふなうれしい事はふり升ぬ。

雪 御櫓へお出被成れし阿国さまは、どふ遊ばせしか。

早ふ御様子が承りたふり升に。

へ噂中端へ向ふより、阿国は先へ女中達、尾越の鳥の夫奈良で、戦地を越て入来り。

ト此内向ふより序幕の阿国、白の鉢巻襷掛大小わらんじにて先に立、跡より序幕の祝尾、登瀬の兩人、同じ形りにて鎧櫃へ首を入是へ棒を通し兩人にてかつぎ出て来り、直グ舞台へ来て。

阿国 皆さま、天寧寺へ送る事は出来ませぬわいな。老 何、御寺へ送られませぬとな。

国 サ、御廓外一円に官兵押寄ました上、町家へ火をかきましたる報、只今斥候の兵士上申にふり升れば、此上は埋葬の手續き、御城内にて計らはねば成り升まい。

老 扱は御廓外へ進軍せしとな。左様なれば是成首級一応伺ひ申上、其手續きにいたし升る。

へ勇む心の女中達。首級をいだし、拭ひし所へ、烈女の名前高かりし、阿節はいそく御殿へ進み、折目正しく一礼なし。

ト此内、祝尾、登瀬の兩人、鎧櫃より首級



を出し、拭ふて居る。此内向ふより前幕の阿節、白の鉢巻襷掛大小わらんじにて長刀を持出で来り。

阿節 只今御表より仰渡に、是成首級は御城内の御霊屋脇へ埋葬せよと承はりましてムリ升る。

雪 左様なれば、少しも早くお跡の首級をお拭ひ遊ばせ。祝尾・と 畏りました。

へ続いて取出す数多の首級。阿国はハツと心附、鎧櫃の傍へ寄添。

ト跡を出す。此内、阿国心附、ツカくといつて櫃より子供の首を一つ出し、実と思入有て、顔を見せぬ様に抱へ。

国 此首級は私が拭ひ升でムリ升る。

へ心有気な言葉に虫が知すか前髪出立。もしや夫かとお節が胸、老女も共に伺ひて。

ト此内、阿国首級の顔を見せぬやうに拭う。阿節は手拭にて刀の中身を拭ひ乍、右の首級へ心を附る。老女も思入有て是へ目を附る事有て。

老 兵士にあらぬ若衆の首級。わたしが身内も壮年隊へ

編入いたせし者もあり。

雪 又私しの弟も同盟有志の一人なれば、早ふそなもの、姓名（名）をお聞せ被成れて下さりませ。

へ問はれて何といらへさへ、轟く胸を押しづめ。

ト阿国、実なき思入有て。

国 イエ、此首級は御二々方さまの御存じの方くくではムリ升ぬ。

へ聞にお節は猶更に、もしや我子にあらざるかと。

ト阿節、心遣ひの思入有て。

節 左様なれば、何人の御子息でムリ升な。

国 サアそれは。

雪 姓名を記し升に、お名をおつしやつて下さりませ。

国 サア、其御名前は、壮年隊の内にて。

節・雪 何人でムリ升な。

国 サア、是は。

節・雪 お名前はな。

国 サア、それは。

三人 サアくくく。

節 猶予いたす場合にあらず。よし身内に有ふ共、戦場に於て死するは本望。御腹藏なく仰つて下さりませ。



へ首級を愁う其所へ。

ト腰帶をとき、件の首を包み、端に背負。ばたくくに成り向ふより又女中同じ形りにてわらんじの俣、走り出て来り。

× 只今、外廊の仮病院、負傷人多分に成升たれば、看護の御助力下され度、夫に大手口の通路止り升たれば、搦手より御出有やう、お迎ひに出升てムリ升る。

国 そんなら内外へ別れ。

雪 看護の助力いたし升れば。

節 御老女さまにも。

女皆く、是より直ぐに。

老 イデヤ、手並を○

ト刀を抜、立上り、ずつと腰を伸ばし。

見せませうわいな。

へ勇ましかりける。

ト皆々引張りよろしく三重へ調練太鼓の音

を冠せ幕。

ト幕引附ると、戦地の鳴物にてツナギ、直

グ引返す。

## 戦地仮病院室の場

本舞台一面の平舞台。正面より下手へ画心に鼠壁、日窓。上手壱間、附家。此内板羽目、薬を乗せたる棚。此前、龕末なるテーブル。上手の柱に掛行燈、刀掛ケを取附、所々へ椅子を置。都て外廊藩中を仮病院にせし体。爰に前幕滝沢口へ出たる土湯、笹川、梁川、郡山、半田、瀬ノ上の六人、何れも負傷人にて鉢巻又は手足を白布にて結び、白の藁ぶとん、白赤の交りのケツト、思ひくゝの拵らへにてくゝり枕にて寝て居る。上手家体の内の椅子に前幕の雪江、前の形りの上へ白の病室着、燭台の許にて薬を水に加へ、調合して居る。傍に同じく前幕の奥女中兩人、祝尾、登瀬、めんざんし糸をといて居る。ずつと下手に序幕の六兵衛、病院小遣ひの拵らへ、屋敷の法被を着て、帆布綿のもつこへ竹をとち附けて居る。此見得、合方笛の入りし調練の鳴物にて幕明く。

六兵衛 急げば廻ると申まつつけへが、早く附よふく

と思ふので、結びそこなつて斗り居て、ねつから塚  
が明キませぬ。

祝ひ 御出入の納方へ申伝てはやりましたが、追々戦地  
に成升ので、此所迄参られぬと見得升る。

尾・登 御同様に御城内から病院へ廻りましてから、折々  
炮声が近く聞へ升が、能心持でムリ升な。

雪江 看護婦へ廻り升た上は、負傷者は平常より懇ろに  
致さねば成ませぬから、戦ひに出たいと思召ても、  
一切爰は出られませぬぞ。

六兵 わしも城下の栄福稲荷さまで親父の代から茶店を  
して、今日まで安楽に世を送つたのは、皆殿様の御  
影といふもの。夫故今度は御味方仕やうと思ひまし  
たが、ヤツトウは出来ず、又鉄炮もうてませず、只  
あるのは力斗り。是非なく病院の小遣に遣うてお貰  
ひ申升のも、御恩報じでムリ升る。

雪 斯も御国の人くは心が一致したもののか。一人とし  
て変心なく、町人百性（註）に至る迄、軍事のお手伝致す  
といふは、御国も益々栄へる前表。テモ、感心な心  
立テじやな。

祝 此室にある方ぐは皆輕傷の者斗り。一日も早う全

快させ、再び出陣出来るやう。

尾・と 看護に怠りムんせねば、最早程なく出陣が出来  
るに相違ムりませぬ。

ト此時合方へ冠して調練太鼓の音する。怪  
我人は是を聞、むつくと起上り。

一 ヤ、大ぶ近く聞ゆるぞ。扱は敵勢進軍せしか。

二 御城下へ進むやうでは、たとへ身内に疵は受る共、  
因循しては居られんぞ。

三 全癒を待つて居る場合でない。モウ聊かも痛み所は  
ムらん。

四 看護の衆、繃帯を下さい。構はず巻附て、出張致す。

五 九死一生なら知らぬ事、ナア二片足位ひ、討れて居  
るとも一本足で飛で参る。

六 拙者も右の腕はやられたが、左りで切払つてやり升  
から、少しも差支はムらぬ。

一 どうしてあれを聞て居つて、べんく爰に寝て居ら  
れるものか。

ト六人そろくと立懸るを。

雪 皆さま、暫らくお待被成い。院長の御差図なきに、  
猥りに出院が成ませうや。たとへ敵軍進み来る共、

御沙汰をお待被成ませ。

一 イヤ、夫は元より承知なれば、あの動揺を承はつては。

二 実に飛立つ。

六人 思ひでる。

ト合方きつぱりと成り、向ふより序幕の三代治、病室着へ襷をかけ、水薬のビンを持って走り出て来り。

三代治 二階の患者は皆済ましてムリ升る。

雪 只今此お方くは炮声を聞れ、思はずも出陣致さん此有さま。お止メ申て居り升る。

ト是にて三代治、六人に向ひ。

三代 御尤には存ずれど、左様な思召がムんしては、却て疵が癒ませぬぞ。只今はやるは疵所の害。御全快の上、殿様のお為をお尽し被成ませ。

一 イヤ、嬢方が男子に増りたる健気な振舞見るに附ケ、痛杯は少しも覚へず。直グにも飛出ん心持に、ぢりく致して成ぬはへ。

三代 追々間近に成升れば、其思召は御尤 ○雪江さま、最早爰では患者には余程御不為でムんすわいな。

雪 最早院長より此所へ何とも御差図がそふなものじゃ

ナ ○

ト此内、調合終り。

サ、お上ゲ下され。

祝・登 ハイ。

ト合方きつぱりと成り、兩人水薬のコップ、ビンを持って、六人に吞せる。此内向ふより序幕のお竹、小包をはずに背負、走り出て来り。

お竹 皆さまお願ひ有て参り升てムリ升る。

三代 ヲ、桑折さまのお女中か。何の願ひでムんすへ。竹 サ、旦那さまは昨日より御出張に成ました切り。又今朝、奥様も続て御出張に成升て、其時御供を願へ

共、そちは命を全ふせへ、と御聞濟なく御出陣。其内早、御住居は戦地と成て立退き升たが、予々願ひ置升た万部が一の御恩報じにせめてお薬を運ぶなりと、お使いひ被成れて下さり升やう、どうぞお願ひ申升る。

三代 ム、そんならモウ、御二方共御屋敷にはお出被成らぬとナ。

竹 只今、ツイ此先の若松丁の四ツ角で戦ひが初まり升

た。

六兵 エ、そんならあの、若松丁で。コリヤ斯しては居られ升せぬ。

トがたく震へ出すゆゑ。

三代 モシ、何を騒ぎ被成んす。たとへ戦ひ間近に成共、此病院へ切込むやうな、左様な官兵ならず。御沙汰ある迄騒ぎ被成んすな。

六兵 ヘイ、夫でもどふも落附ては。

三代 ハテ、患者の障りに成升まいわいな ○

ト屹度いふ。是にて六兵衛是非なく心遣ひの思入にて、矢張木瓜（益）をとじて居る。

左程迄御恩報じがいたし度思ひ被成んすなら、爰は女隊の看護ゆへ、今よりお手伝仕被成んせ。

竹 ハイ、夫はどふも有難ふり升る。

ト合方きつぱりと成り、向ふより藤原、越後、後ろ鉢巻、義経袴大小わらんじにて出て来り。

越後 是は何れも看護御苦勞に存ずる。

三代 藤原さま、追々炮声近附升が、御様子如何にり升な。

越 サ、其義に附て参つたが、所詮爰らは危ふきゆへ、

当病院は是より北の小路へ引揚る事に、只今達しがりムつたゆゑ、直ぐ御手配お頼み申 ○

ト患者に向ひ。

各、此地一時引揚に成升。只今其手続きを致せば、左やう御承知下されい。

一 エ、スリヤ弥々。

六人 引揚とな。

越 往古の合戦と違ひ、弾丸の恐れあれば。大切なる各がた、若もの事ある時は上へ対して濟ざるゆゑ、先御立退が能る。

一 此外ト廓迄、立退クとは。

二 実に残念。

六人 至極でるな。

越 サ、其思召が御不為でるぞ。夫よりも一日も早く御全快下されい。

トなだめる。皆々きつと思入。此折、曰窓の向ふにて二、三発打。六兵衛おどくして居る。三代治、窓より表をのぞき。

三代 ヤ、直ぐ此先より黒烟り。サ、お竹殿、お手伝ひ

下さい。

竹 ハイく。畏り升た。

三代 サ、皆さまざま早く。

祝尾・と、心得ました。

ト女形、刀掛の刀をさし、支度に掛る。六兵衛うろくくして木瓜をかつぎ下手へ行ふとするを祝とらへ。

祝 モシく。夫は足痛の方くを。

六兵 ハイく。

ト下手へ行を。

祝 ハテ、爰で入るのでムり升。

ト手荒く引たくる。是にて六兵衛つんのめり、恟りする。

六兵 コリヤ方角を間違へたのでムり升る。

ト此内、祝尾、と瀬、上手へ木瓜を持行

ひろげる。

越 サ、足痛の方、是へく。

三 チエ、歩行も自由ならざるか。

四 是非ない事でムるよな。

三代 サ、早くく。

ト合方きつぱりと成り、此内時々曰窓の外、

小筒の音。女形、怪我人へ竹の杖を渡し、

お竹も介抱して漸く立上る。足の疵所の

兩人、女形手がいにして木瓜へ乗る。是

にて越後差図して祝尾、と瀬、雪江と六兵衛

手がきにして木瓜を持、上手へ這入。此内

三代治は上手刀掛の刀をあつめ、お竹に差

図して結びさせ、下手へ来やふとする。此

とたん、下手の曰窓より一発飛込む。三代

治の胸板へ当り、うつ伏に成る。お竹、恟

りなし。

竹 ヤ、コリヤ三代治さまには。エ、ハ、ハ、ハ、

トどふと成る。ばたくに成り、上手より

序幕の馬丁金太郎、法被纏襷鉢巻足袋はだ

しにて出て来り。

金太郎 ヤ、こいつア大変だ。

竹 ヲ、金太郎どの。早く助けて上げて下さんせ。

ト兩人にて抱おこす。此内、三代治の後ろ

よりゑんせうの烟り立、苦痛の思入。兩人

は介抱仕乍。

竹・金 三代治さま、しつかり被成いましく。

ト呼生る。是にて漸く、両眼ひらき。

三代 ヲ、お竹どの。所詮わたくしは助からぬ。たつた

一ト言頼がムんす。

竹 ハイ、何なりとおつしやつて下さりませ。

ト兩人涙を拭う。

金太 コリヤ飛た事に成升た。何でムリ升か、馬丁の金

太郎も居升る。どうぞ御用をおつしやつて下さりませ。

三代 サア、頼みといふは外ならず。私の実家は江戸の

日本橋本町三丁目の葉種渡世若松屋鶴右衛門と言ものゆへ、此背負守と着物を証拠に髪の毛を添て、どうぞ届けて下さりませ。又道中の入用は、此守りの内であれば、それを遣ふて江戸へ行、委しふいふて下さりませ。

金 ハイ。夫は承知致し升たが、まア、手の届く丈ケおつれ申て、逃ると仕やう。

竹 どぶぞさうして下さりませ。

ト抱上ゲやうとする。爰へ又一発音して、金太郎ぐるみ引くり返り、三代治苦しみ、

烟りの中にて落ち入る。兩人こわく、進寄、

掛行燈の灯りに顔を覗き込み、ぎよつと思

入有て。

金太 お顔も真ツ黒、ゑんせうにて○

ト震へる。是にて億病億に成りし思入にて、

こわく、下手へ這ひ出し、震へる。本釣鐘、

詔らへの合方に成り。

お竹どん、けふ迄主人へ恩返しに命を捨てもお手伝をする気で戦地へ出掛たが、此有さまに身の毛立テ、襟にひいやり億病風、吹込むとたんに心が替り、命を捨るはおしく成た。

竹 今迄きれいなお嬢さんが、只一発で相好変り、忠義

もしれない戦地の犬死。言ば縁の下の力持。私しも実はぞつとして、今にも玉が飛で来るかと、斯して居て冷くするのさ。

金太 夫じやア、いつそ焼ぼつくひ、一旦切れた式入り

が中も、又も結んでお嬢さんの此遺言の旅用の金で、一ト先江戸へ逃ると仕やうか。

竹 幸ひ証拠の二品を届けてやれば又先キで、礼を貰

へば双方から、二重どりの金もふけ。金太さん、軍



サで運が直つて来たねへ。

金太 さう極つたら猶予は出来ねへ。早く仕事を仕にやア成らねへ○

ト合方きつぱりと成り、兩人跡先へ心を配り、三代治の顔をのぞき込み、ぞつとして。

ゑんせうで顔がすっかり替わつて仕舞つた○

ト実と思入有て。

こいつア丁度もつけの幸ひ○ヲイ、耳を貸ねへ。

ト囁く。

竹 そんならわたしの。

金太 コレサ。何ぼ乱世でも静に物をいゝねへ。

ト三代治の背負守りをとり、お竹の上着を脱せ、三代治の着物と取かへる。能程に上手へ前幕の久六、下手へいぜんの六兵衛出て来り、灯影に思はず覗き込む。兩人、是に心附キ、はつと思入。此時本鉄炮の音して上手柱の掛行燈へ当り、くだけて灯り消る。此炮声に皆く、べつたりうつ伏に成り、金太郎は法被をすつぱり天窓から冠る。是を忍び三重もやうの合方に成り、上下より

伺ひ寄る。金太郎はお竹を尋るこなし。双方さぐり合にて調合のテーブルを遣ひ、だ

んまりの立廻り有て、此内金太郎は吹替と替り、トお竹を連れ花道へ行。兩人は舞

台を尋ぬる。此時、一、三発音する。兩人除るを道具替りの知らせ。金太郎法被を冠り

し俛、お竹をつれて向ふへ這入。兩人は上下を伺う。此もやう合方調練太鼓にて道具

廻る。

### 東山天寧寺前の場

本舞台向ふ天寧寺の大門より境内。兩側、松並木。左右、山の根方、稲田の遠見。是へ廿一日灯入の月を出し、更舞台真中、東山天寧寺と彫附たる石の傍示杭。上下松の立樹、藪疊。都て天寧寺大門の体。床の三重にて道具留る。

茲に幕明キの百性四人、食物を背負、竹籠を持て立懸り居る。此見得、調練太鼓の鳴物、在郷唄にて道具留る。

○ 大ぶゑらく成て来たぞや。斯う追かけくどし込で来られては、猶一生懸命じやぞ。

△ 何でも小ぜり合の内は糧米杯には困らぬが、是から皆さまの腹を助ける所じや。

□ 何でもあぶない所へ飛込で、兵糧に差支へてムらつしやつたら、どしく是を上ゲよふではムらぬか。

× どうせ生ては返らぬ積りじや。此様な百姓の命でも殿さまへ差上たのじや。

ト此時上手にて調練太鼓の音する。皆々、急度成り。

○ どこじやく。ア、葛野の方じやな。サア、行ベいく。何の恐れる事はないぞや。

△ サア、しつかりしてムれ。皆々 しつかりせへく。

トきつと成て四人下手へ這入る。へ烈しけれ。刃きらめく月代も落来る西か東山。

天寧寺の門前をころざしたる女武者。虎口を退れ、走り来て。

ト此文句の内、ばたくに成り、向ふより前幕の阿節、長刀を持、首の包を背負、走

り出て来り、花道に留り。

節 夜中を幸ひ人目をさけ、やうく是迄来りしが、官

軍城下へ充満なし、御城へ連絡なし難く、此上首級を廟所へ納め、討死の外、手だてはなし。ム、そうじや。

へ大門さして進みし所へ、滝沢口より欠来る良助。

ト此内舞台へ来る。是と一時に上手より以前の良助、抜刀にて出て来り、兩人行合、顔見合せ。

良 ヤ、姉上でムるか。

節 ヲ、良助殿。あなたも御無事でムりましたか。シテ、堅蔵に戦地にて面会は被成れませぬか。

良 ハツ、兄上には先刻御目に懸りましたが○シテ、御子息三之介殿はな。

節 ハイ、悴はな。ト実と成る。

良 いかゞ被成れた。へ問はれて阿節は背負うたる包みとくく取出す首

級。

トいぜんの子供の首級を出し、良介に見せ

て。

節 斯の通りにムリ升る。

良 扱は首級となられしか。ムウ ○

トハツと思入あつて、気を替。

是非がムらぬ。是も時節じや ○ 姉上、実は兄上にもかやうな姿に成ました。

ト包みを開き出す。阿節悔りして。

節 エ、そんなら最早お討死遊ばしましたか。

へ絶入思ひに膝すり寄せ、夫<sup>ト</sup>の首級打見やりく、

流石に猛き女気も、父子のさいごに又二倍、消入

思ひぞ道理なり。

ト阿節二ツの首級を取上げよろしく有て、

良介も心遣ひの思入にて。

良 戦場の切死は武門の習ひ。何といさぎよひ事ではム

らぬか。

へはげます詞に阿節が胸、思ひ余りしその所へ、数ヶ

所の手疵にくつせぬお国。踏<sup>メ</sup>く<sup>く</sup>出来り。

ト良介きつと思入。文句能程に、上手より

以前のお国、手負にて出て来り。

国 ヲ、思ひ掛なき御二方さま。

節 ヲ、お国さま、大ぶ手疵を負れしが、よふ是へお出

が出来ました。シテ、御城内はいかゞ被成ましたな。

国 サア、それは ○

へふさがる胸を押しづめ。

実は官軍御城を取巻き、いよく只今御上<sup>ニ</sup>には。

節・良 エ、いかゞ被成れた。

国 御降伏被成ましてムリ升る。

トわつと泣伏す。

良 スリヤ、上には。

節・良 エ、ゝゝゝゝ。

へしばしあきれて詞なし。

トどうと成り、良介覚期の思入にて。

良 最早我見込み、更になし ○ 此上は御身等、早御覚

期致されよ。

節 仰せ迄もムりませぬ。二ツの首級を葬むりて、頓て

跡より参り升るでムリ升る。

国 わたくし迎も此深手。阿節さまと諸共に、あの世の

御供いたし升る。

節 シテ、あなたさまの御覚期わ ○

ト此時、良介思入有て不意に馬手差を脇腹

へ突立る。

ムゝ。テモおいさましい此御自害。

良 姉上、冥府に於て御待申ぞ。

へ清き最期ぞ。

ト良介引廻す。兩人急度成る。此引張宜敷

幕

**中幕**

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

中満来

毛谷村御牛洗手の場

彦山権現内陣の場

ぼたん

団次郎

左団次

小団次

米蔵

寿美蔵

荒次郎

左文治

左目蔵

松五郎

高之介

明治廿七年十月大吉日

紙員 廿六葉

千穂万歳大々叶

筋書 竹柴其水

作者

菟蔵

嶋三郎

権十郎

寿三郎

常磐津

竹本連中

一 毛谷村六助

後二貴田孫兵衛

一 木村又蔵重政

一 傘の一本足

一 井上大九郎高行

一 飯田角兵衛忠英テル

一 森本儀太夫武成

一 三ツ目大入道

一 加藤兵衛慶行ヨシ

一 田舎娘お米

実ハ一ツ目の化物

一 松下金吉祐安

一 庄屋左衛門

一 同 五郎兵衛

左団次

権十郎

小団次

同

寿美蔵

荒次郎

同

左文次

米蔵

同

寿三郎

菟蔵

一 神職宇佐太夫

一 同 菅生太夫

一 同 富貴太夫

一 御手洗の河童

一 豆腐買小僧

一 神主六郎太夫

実ハろくろ首の化物

常盤津連中

竹本連中

左目蔵

松五郎

高之助

島三郎

ぼたん

団次郎

### 毛谷村御手洗の場

本舞台上手四間、一面の岩山。高粱の際、朱塗金めつき金物附し唐門。扉左右へ開き、是より下手へはすに石段。山の半腹、所々に紅葉の楓の立樹。下手、山々を見たる遠見。灯入満月の切出シ。上手、山の根方、岩穴。此内より舞台前へ御手洗。廻り蒲鉾形の草土手。内一面の水布。本社御手洗と記せし高札を建、此水布の内より芦原。此根方

誂らへあり。ずつと下手、朱塗青楼羽目神輿庫の裏手、是と山の間、杉の梢にて見切。都テ彦山麓毛谷村御手洗の体。在郷唄、田舎囃子にて幕明く。

ト鳴物打上げ、しらせに付竹本出語りに成る。

へ抑茲は豊前国田河の郡に名も高き、彦山の麓にして、然も隣国三所にまたがり清水落合御手洗は最も凄き有さまなり。昼の勝負の戻り道、連立戻る毛谷村六助。

ト文句の止り、在郷唄、田舎囃子に成り、向ふより毛谷村六助、藁たばねの鬘派手成るどてら帯をメ着流し中下駄、少し酒に酔しこなし。庄屋左衛門、同五郎兵衛、羽織り着流し草履、一升樽を提げ、扇にて六助を仰ぎ乍出て来り、花道にて。

五郎兵衛 コレく六助殿や。けふ御祭礼の奉納角力に美事に勝をとらつしやつたは、実に毛谷村のもの、鼻が高ひぞや。その勝祝ひの贈物迎、ぎやうさん酒が来て居るが、名主さまに預けてあるぞや。いかう

こなたが底抜でも、一ト月位ひは大丈夫じゃ。六助 無鉄炮の素人角力を子供の内からとつてあるき、味く是迄勝通シ、出る度毎に貰ひ物で年中遊んで暮すとは、エラ勿体なふむるわへ。

五郎 何にせへ、毛谷村からこなたのよふな豪傑が出るのは村の誉れだから、権現様では太夫様初メゑらひ悦んでゐるぞや。

六助 イヤ、そりや面目ないこつちやのう。へ勝ほこりたる四方山のはなし乍に歩行来る。

ト此内舞台へ来り。

五郎 時にまだ大ぶ酔て居るから、内迄送つてやり升ぞや。

六 イヤく。モウ御手洗じゃ。此池を廻れば内じゃ。酔て居ても大事ムらぬ。どうぞ戻つて下されや。

五郎 夫でも此樽を渡すと、又直ぐ煮売屋へ引掛らふ。そう一ツ時に呑ではならぬから、送らいでよいなら人質を預つて置うかへ。

六 イヤモウ今宵は呑ぬ。翌の楽しみに仕升から、決て心配さつしやるな。

五郎 夫じゃア、わしはこなたの勝た事を庄やの左衛

門どのへ知らして、悦ばしてやり升ふわい。

ト件の樽を渡す。六助、是を見てひよろ／＼とする。

五郎 ア、コレ、あぶない。まだ大ぶ酔ふて居るが、此上決して吞つしやるな。

六 エ、よいといふ事よ。

五郎 そんなら六助殿、又翌、逢升ぞや。

へ後を約して五郎兵衛は隣り村へと戻り行。六助空を打詠め。

ト兩人あいきつして橋掛りへ這入る。六助跡を見送り、床のメリヤス、虫笛に成り。

六 毎年九月十五日は、此彦山権現さまの奉納角力に近在から集る素人の力競べ。先づけふ迄は味くいつたが、中にはおれを意恨に思ひ、一番鼻をへし折ふと、闇でもあらば帰りを待つけ、ゑらい目にあわせよふと思ふやからも有そうだが、折能今宵は風もなく、空に雲なき秋の月。仇するやつも有まいから、ドレ一ふくやり乍、爰で月見をして行ふか。

へ取出す火打かつちかち、くゆらず煙り蒙朧と立つや夜霧の其内に、あなたに立ちし豆腐買。

ト此内六助、捨石に腰を掛、根ツ子のきせ

る、木の皮の煙草入ほくちにて火を打、煙草を吞ム。文句能程に薄く風の音をあしら

ひ、花道すつぽんへ豆腐小僧、竹の子笠胸当の油屋竹の皮ぞふり、盆に豆腐をのせ片

手に通帳を持、立身にてせり上る。

へ昼間出た切油をうつて、内へ戻るに戻られぬ。し

んきしん苦がたゝまりて、途方に暮の草の道。たどり／＼てこなたへ来り。

ト此内、花道にて一寸振有て、ふたいへ来り、六助の傍へ来て。

小僧 モシ伯父さん、豆腐の御用はないかへ。

六 何じや、豆腐の御用じや。おれは豆腐はいらぬわへ。

小ゾ いらぬといふても、今買ぬと○

へ酒屋へ三里、とうふやへ二里はきまりの道法に、

ツイかはしやんせ。困るぞへ。

其様な事いわずと、此半丁の残り物、買ふて置たがよいではないか。

へ門下にイむ思ひにて、目先へ差出す其手さへ、紅葉豆腐の名のみなり。

ト此内小僧よろしくあつて、件のとうふを盆へのせし候、六助の顔の前へ突附る。

六 エ、いらぬといふたら、いらぬわへ○

ト突附たる盆を推かゑそうとして、豆腐へさわり。

ヤ、コリヤ石ではないか。

小ヅ エ○サ、田舎の豆腐は堅ひもの、

へ言捨行んとなしたるを。

ト上手へ行ふとするを、こしをとらへ。

六 コリヤ待て○ハ、ア石を豆腐と偽るやつは○

ト引戻して小僧の顔を覗うとする。此時、小僧豆腐の上へ顔を押つけ、通ひのとぢ目をくわへて顔を上げる。此顔三ツ目に変り、通ひの内より長ひ舌をくわひ、ずるくと出る。六助恟りして手をはなし、再び捕へよふとする。是に恐れて上手芦原の内へ走り這入る。六助跡見送り、実と思入。本釣鐘、薄く水の音に成り。

へ冴行月の御手洗に写る光りの夫ならで、眼まきらめく水際に、様子伺う河太郎。

ト此内小僧の這入し芦原の裾へ縫ぐるみの河童、水布より半身出してそつと下手を見込ム。六助と顔見合せ、又水布へ這入る。六助扱はといふ思入れ。

へ伺ひく、芦原より露置草の忍び事。走り寄て動かせず。

ト此内再びそろくと芦を押し分ケ舞台へはい出す。六助やうくと立上り、みたらしの方を見込ム。見得ぬこなし。此内河童は一ツ足々に飛乍、六助の後ろへ来る。こなたは是が見得ぬこなしにて、しきりと上手を見廻し居る。此内河童、不意に六助の足へ組付ク、是にて六助恟り心附キ、片足上ると前に河童も宙へ上り、手を放すはづみにばつたり落ちる。

へ扱こそ今の小わつぱと、あしらふ栗の刺かならで、ころくくと蹴返せば、又立戻つて飛来るをこなたも手練の早業にあなたの池へ投込めば、水音なして失にけり。

ト此内かつぱを相手に一寸立廻つて握り拳こぶし。





ト此内お米、六助に酒を呑ムなとすがるを、其手を払う。「替り安き」といふ頃、どろく

米

アモシ、まアく待て下さんせ。

ト此中へ娘這入り。

のよふな水の音を冠せ、下手杉の梢の間だより神主六郎太夫、烏帽子狩衣ふんごみにて半身出し伺ひ、気のもめるこなし。此内

竹へ隔てる内に賤の女は忽ち変化の形を顕はし、右と左りへ飛去りけり。

神主の首、段々長く成る。お米下手を見て心附キ、間夫といふこなし。又六助を見やり、急度成て二<sup>タ</sup>面の振りよろしく。是へ六助、一寸からみ、六郎太夫堪へ兼、首ずるくと杉の梢をわたり、下手へ出て二人が中をわけよふとして手をのばす。此手も長く成り、娘の襟髪をとり、下手へ引戻す振あつて納る。六助、急度成り。

六 うぬも河童の仲間だな。

<sup>常</sup>へ姿は神の守り人、<sup>ヒト</sup>是も恐るゝ景色もなく小腕<sup>ガイナ</sup>とつて引いだせば。

<sup>常</sup>へヒヨックリ、ヒヨコく、ピヨックリくどつこいあぶない、是はゴム製、押ても又出る。竹へフウラリく。アツハツハ。ハハハハハイ左イなら。

ト杉の間より神主を引出す。前の間骸吹替、是にて本人に替り、引され。

神主 ア、コレくわしは当社の神職成ぞ。鹿忽いたすなく。

ト目まぐるしく六助の傍へ来る。六助、邪魔だといふ思入にて踏まいとしてまたぐ。此股の下<sup>タ</sup>をひよいくとくゞる、おかしの振有て、ト六助蹴飛すと、ころくころげ、能所のすつぽんへ落る。六助見送りて、此



角兵 当社彦山の祭礼に隣村の又蔵殿を頼（半行判読困難）

難）予て主人事、御身の力量試さん為、又蔵どのが

□□申せば、□□同道致されよ。

ト是にて恟りなし。

六 化物と間違へて又はり殺そうと思ひましたが、案に

相違ひのおまへさま方。何の御用かしりませぬが、

在々のものがほんの着たまゝ。其御無礼を御承知な

ら。

角兵 何のく、元より戦場往来なす武士の身に何遠慮。

心置なく参られよ。

六 そんなら是から庄屋に咄し。

角 少しも早う、ハイデン拜殿へ。

六 上り升るで○

ト辞義儀をするを木のかしら。

ムり升る。

ト此もやうチャツパ入神楽の鳴物にて、拍

子幕。

ト幕引附ると神楽の鳴物にてツナギ。

### 彦山権現内陣の場

本舞台一面の平舞台。正面壱間、四尺の高

式重。是に御簾を卸シ、左右朱塗金物附の

扉。此前、黒塗高欄附の段。上下朱塗の鏡板、

前側一面大欄間、箔押の彫物、朱塗の丸柱。

此内惣体注連を張、平舞台の正面、白木の

八足台。真中神鏡。其外三宝に供物を備備へ、

左右に蒔画の大灯台。長き灯心の油火。都

て彦山三所権現拜殿の体。爰に烏帽子直垂

の神主三人住居、此見得、チャツパ入神楽

にて幕明く。

① 今日ツた例年の御祭礼に、当社は国家鎮護の為、事

なふ御祈祷相済て、各方にも御苦勞に存じ升る。

② 殊に清正公の御家臣方は、御用繁多のその中を彼有

名の方々、打揃われ参詣ありしは、珍らしき事。

③ 尤、近頃太閤殿下、国家を納めたまひしとはいへ、

未ダ血なまぐさき時節ゆへ、兎角に干戈を交ゆる事

のみ。

④ まつた国内のみならず、異国に於ても兎角に不和を

生じる由。

② 場合に寄らば、戦たんを開き兼ね趣にて当時専ら軍備最中。

③ 若シ左様な時は、猶一層祈念をこらし。

④ 日本勝利を。

三人 いのりでムらう。

ト上手より子役の巫子、白の着附緋の袴にて出て来り。

巫子 ハツ、申上升。只今御参詣の御客さま方、是へ御入にムり升。

ト言捨て這入る。

一 書院より御帰邸と存じの外、又候是へ御入来とは。

二 コリヤ何か御相談と。

三人 見得るわへ。

ト是より床の上るりに成る。

へ明る杉戸の音高く、廊下伝ひに入来るは、清正公の臣下にして其名轟く木村又蔵。続いて軍慮に秀たる、義は金鉄のものゝふが暴然として入来り。

ト此内上手より木村又蔵、割羽織り野袴大。小。跡より井上大九郎<sup>ママ</sup>、飯田角兵衛、

森義太夫、加藤清兵衛、同拵へにて出て来り、

よろしく住居。

一 是はく、各方には何の御愛相も仕らず、平に御用捨三人 下さりませ。

又蔵 御祈祷相済、殊の外の長座。大イなる妨げいたした。然ルに又候御拜殿にて少々談ずる一義ムつて、暫時拜借いたし度、御聞済の下されい。

一 斯へんび成る山上故、御不自由さへ御厭ひなくば、御一泊遊ばし升共、聊差支ムりませねば。

二 御遠慮なく御ゆるりと御休息の程。

三人 願上奉り升。

大九郎 万事御配慮、忝ふむる。

ト合方に成り、向ふより以前の角兵衛出て、以前の□□附添、舞台へ来り。

角兵 毛谷村の六助、只今庄や同道にて拙者召連参つて

ござる。

又 早速の御同伴、御苦勞でござつた ○

清兵 然らば是へお通し下され。

巫 ハツ。

ト巫女向ふへは入る。

又 神職には御構ひなく御退座の。

四人 下されい。

一 どうぞ御ゆるりと。

三人 遊ばしませ。

へ案内につれて玄関より、庄屋が附添荒くれ男。豊み障りも気さんしに、億する気色更になく、拜殿近くひざま附キ。

ト神官三人、辞義をして橋掛りへ這入。文句能き程に、向ふより以前の六助、いぜんの着附の上へ麻上下を附、跡より前幕の庄屋左衛門、附添出て来り、花道にて庄屋さしず、下に居る。

庄屋 ハツ、毛谷村の庄屋左衛門、御召によつて六助を召つれましてムリ升る。

角兵 兩人共、構わず是へ進れよ。

庄 へい〜。

ト六助に行と袴の裾を突。

六助 へい〜。

トやはり同じあいさつする。

へ恐れ気もなく進寄、勇士が前にどつかと座せば、又蔵見やり。

ト舞たいへ来り、よろしく住居、文句の切れ、誂らへの合方に成。

又 其方はへ招きしは、チト談事度一義あつて、拙者は

加藤清正の臣、木村又蔵と申者。

大九郎 まつた拙者は井上大九郎。

角兵衛 飯田角兵衛。

義太夫 森本義太夫。

又 皆腹心の者共なり。以後は別懇に。

又四人 いたしたふゝる。

へことばに六助、面をあげ。

六 先程御前さまに逢まして、何の事だか訳もわからず、

お宮へ来いとお詞に、庄屋さまに咄して、こなた

のセナアが智入したとき遣つたといふ窮屈物、此□

□つゝぼり廻た□□さし、□骸形り□□□廻りしに、

□□様でも□ぬ所へ参りましたが、いつたい是は何

の用でムリ升な。

又 突然是へ招きし故、其不審尤もなり。主人清正公、

昨日当社へ御参詣の砌、当山の麓に於て奉納角力を

御覽あつて、御身の力量拔群成るに、殊の外愛たま

ひ、村内にて承はれば毛谷村に住六助とやら。農夫

におしき者なりと、深く賞賛いたされて、簾下に属する心あらば、推拳いたし参れと有る主人が深き思召。御身の所存聞されよ。

六 何にもしらぬ在郷ものを侍にして下さり升とな。

又 主人御見所あつての御所望。何と有難ひ事で有ふか。

六 イヤ、少しも有難くムりませぬわへ。わしは侍はきらひでムり升。

へにべもあらざるあいさつに。

トきつぱり云。庄屋心遣ひのこなし。

大九 何、その方出世を。

四人 望まぬとな。

六 ハイ、わしは武士は大嫌ひ。又、主取するも猶嫌ひ。

何の事かと思ふたら、其御用でムりましたか。イヤ

こりやア、つまらぬひまつぶし ○ モシ庄屋さま、

こなたに借た損料物、しわに成たが堪忍して下さり

ませ ○

へ何の礼義もあらばこそ、肩くつろげてしわ押伸し。

ト肩「衣」をとつて不骨なく伸乍。

ア、まだきうくつだ。ドレ、玄関へいつて腰袋もつんぬがうかへ。

へ会釈もろくに立上り、のつさくゝと行掛るを。

ト片手に肩をつかみ立上る。

又 六助、戻る事罷成らぬ。

六 ハ、ア、ならぬとはな。

ト替つた合方に成り。

又 主人の命を承る我々、其方武士を望まぬ迎、此俣帰宅いたされては、此方主人<sup>江</sup>言訳立ぬ。

六 それは無理ではムらぬか。わしがいやだといふのじやもの。喰エといふた迎、腹がいつぱいふくれて居ては、喰れぬ道理。お武家にしてはわからぬ人じやわへ。

又 イヤそりや農民同士の申事。一旦、<sup>シ</sup>武士が望んだら、只此俣には返されぬ。

六 そりや御主人が無理いふかしらぬが、其又家来のこなさんが、ゑらい無理いふお人じやな ○

ト思入あつて下に居て。

去ラバ聞が、どふでもいやだといふたら、どふする。

ト急度思入。

又 我も加藤の臣下にて、人に知られし木村又蔵。此俣汝は返へされねば、今此所に於て力を試シ、我其方

に力おとらば、此場は此假返しくれん。左なくば爰は返されぬ。

六 コリヤ面白ひ。こなたの力量しられど、立会ふた上わしが負たら、望み通り家来とならん。

又 ム、夫承知なら、後共いわず此場に於て兩人が。

大九 力試しは互ひの勝負。

角兵 勝て味方に附ケさするか。

義太 負て元々歸村<sub>ン</sub>をさするか。

清兵 土儀にあらぬ拜殿にて。

又 イデヤ勝負を。

六・又 いたしてくれん。

へ 双方一度に立上り、□□早く取組あひ、神の御前の拜殿を爰ぞ勝負の定め時。動かぬ心、双方よりためらいく進寄り。

ト此内、又蔵羽織を脱ぎ袴も、立をとる。

六助も袴も、立をとる。又蔵は四人、六助

は庄屋身支度を手伝ひ乍、負ては成ぬとい

ふこなし。六助承知せしといふ。双方よろ

しく支度整ひ、実と見合ッて。

六 ヨイシヨ○

ト立上ッて又蔵に突かけ行。是を突戻し、双方たぢくと成り、上下へとまつて急度

見得。是より詛らへ角力太鼓もやうの神樂

の鳴物大小入に成り、又蔵は柔術の手、六

助は角力の手にて力競べの立廻り。庄屋は

心遣ひのこなし。此内六助危ふく成り、ト、

六助下手へたぢくと行、急度止ッて。

参つたくく○

ト声を掛る。是にて又蔵控、下に居る。

へ 六助ちりを打払ひ、未座に下りて手をつかへ。

ト六助下手下に居て。

恐れ入たる御身の力量。六助いかにも今日より清正

公の臣下と成ば、どうぞ御世話を願ひ升る。

へ 身をへりくだり、願入。

又 ム、然らば勝負も決せぬに、今より旗下に属すと

六 イヤ、決せぬ所か、立会はちうぶんわしが負ました

から、家来に成れて下さりませ。

角兵 スリヤ、いよく承知とな。是にて主君も御満足。

能御家臣を得升てゐるな。

へ 人々安堵の思ひをなし、元の如くに座に直れば、



又蔵あなたを打見やり。

又 先刻より心を附しに、下民にあらぬ御身の振舞。仕官の望みなきとはいへど、武術は慥に心得居るは我はとくより見拔たり。

六 ム、。

大九 始終すきのあらざるは、慥に武術を心得居る事、十日の見る所。

角兵 清正公の臣下に属さば、是につらなる人々は、御身と一ツ朋友なり。

義太夫 決して包むに及ばねば、何人を師と頼み劍術修行致されしか。

清兵 まつた御身の望みと共に推挙致せば我々共へ。

又 此場に於て。

五人 語られよ。

へ問れて六助、是非なくも申上んと座を正し。

ト是にて笛の入りし床のメリヤスに成。

六 再度の仰せにいなみがたく、逐一申上るが、劍術は當国の達人吉岡一味斎を師と頼み修行致せし其跡成、我父は當国豊前企救郡田之浦の産にして貴田村の孫右衛門と申、由緒ある船持なりしが、此六助

幼き時○

へ多くの水子の指揮なして、父は追手に帆を揚て対

馬の国へ赴く折柄、忽ち起る暴風に、防ぐひまさへあらし吹、見る間に船はくつがへり。

乗組の者、影だに見得ず、其内我父万死を退れ、流れ附しは朝鮮の○

へ釜山海に程近く、ヲイくと助けを乞しにはるか向ふの地方より腕を限りにこぎ来るはしげに、エイヤと船へ引上られ。

釜山の浦に助られ、憂年月を送りしが、或時明人入来り、彼は日本より斥候の国賊なり。ゆるすな討テと下知なせば○

へ元より無情の輩らゆへ、多勢をもつてやにわに掛り、無斬の死をとげたまひしゆへ。

此うつぶんを晴さん為、一ト度朝鮮に押渡り、往々明の帝土に進み、一ト太刀成共国王を弑さんものと決心なし、劍術修行致せしも、及ばぬ腕に臣下に属シ、是切り望みも果せぬかと、実は残念至極にゐる。へこぶしを握り六助は無念面に頸はれ□□し聞く人々も心を察し、共に無念の思ひなり。

ト此内六助よろしく思入。又蔵皆々きつと思入。庄やは悔りしてあきれて居る。

大九 いさぎよき其心体。御身只人にあらざる事（半行

判読困難）

角兵 爰に幸ひなる事は、近頃殿下秀吉公には、三韓御征伐のきづくしあつて、しばく軍議遊す最中。

義太 尤モ彼地は明国にあらねど、征韓の上は続いて明も平げん御決心。

清 御身只今明んに対し無念あるといわるれば、出陣と相成上は旗下に属すは幸ひなり。

六 スリヤ、朝鮮御征伐の御きざしとか。忝けなし○イヤ、思掛ない此身の幸ひ○庄やどの、我日頃の心願も成就致してござる。

ト庄屋是を聞、又悔りなし。

庄 しらぬ事とて毛谷村に斯る御方が有ふとは、今迄夢にもしらなんだ。

六 今日より清正公の簾下に属せば、是より直グ名主方へ御届ケ下され。

庄 ヲ、云ふともく。こなたより、わしが第一鼻が高い。先名主様始、□□わしの村から近村残らず触廻

し、どふだゑらいもんじやと言触てやらねばならぬ。ゑらいものじやの○

ト心附、下に居て。

恐入てござります。真平御免下さりませ。

へ思掛なき悦びに、自慢顔して話さんと、挨拶なし  
て毛谷村へ庄やはいそくく走行。

ト庄屋悦び乍下手へ這入る。

へ折柄境内動揺なし、轡の音のいかめしく、息をはかりに欠来るものゝふ。

トばたくに成り、向ふより松下金吾、襷  
がけ袴も、立大小にて走り出て来り、直グ  
舞たいへ来り。

金吾 一大事でゝるく。

角兵 何、一大事とは。

四人 何事成ぞ。

金ゴ ハツ○

へはつと答へて勇み立ち。

兼て殿下秀吉公には、思ひ立れし朝鮮征伐、いよく  
軍勢さい足なし、其先鋒は我主人清正公仰せ附り、  
御簾を賜り出陣の○

へ軍令いでし其所へ、小西行长二番手に名馬を賜はり乗船なし。

抜掛なさん手配りと、聞より味方は猛り立ち○

へ彼地へ渡らば小西は東シ、又御主人は西口より、火花を散シて討かけく。

勝に乗じて明国へ○

へ討入く王城迄、目にももの見せて降参させんと、先陣争う味方の勇氣。

一刻も早く出立有よふ、おしらせ申に参つてゐる。

へ始終落なく物語れば、□□勇士□□弥悦び。

ト此内、松下金吾注進の振りよろしくあつて納まる。

又 イヤ、増々貴殿の望み通り、朝鮮□き大明の王城迄も攻込まば。

六 先日本の手初メに夷狄イデキを亡して。

五人 目に物見せん。

又 御身臣下に属する上は、六助にては何とやら○

ト考へる事あつて。

ヲ、親シ父が産シ地は貴田村の孫右衛門○ヲ、是をその俛、貴田孫兵衛と名乗るべし。

六 ヲ、流石は木村又藏殿。然らば此上神前にて。又誓ひの神文。

皆々 唱へられよ。

六 ハツ。

へ切手水して孫兵衛は、心も清き彦山の神前へ打向ひ、勝利を祈る其内鏡に写る人影に。

ト此内、六助骸を清め、神前へ向ひ拍手を打て礼拝なす。能程に又藏、四人に目くばせする。是にて四人忍びくくに鉄扇を持って六助の後ろより伺ひ寄て、打て掛る。此影、神鏡に写りし心にて、六助三宝の上の櫛をとつて、一ツ足に振かへる。爰へ四人打て掛る。はげしく立廻り有て、トゞ此中へ又藏割て這入り、是にて双方別れる。

又 八重垣流の手の内、慥に見得た。

六 イデ、朝鮮に押渡り。

大九 明ン国迄も。

皆々 攻破らん。

へ勇ましかりける。

ト又藏、上手に陣扇を開く。六助立上り、

力足を踏ム、此とたん板敷抜ケて前側の板、  
芻上る。五人きつと思入。此引張、きをひ  
三重神楽の鳴物にて

幕

**四幕目**

当ル午の十月狂言  
会津産明治組重  
第一番目四幕目  
浅草奥山茶店の場  
本町薬種屋奥の場

明治廿七年十月大吉日  
紙員 十八葉  
千穂万歳大々叶  
作者 竹柴其水

左之介

米菊

国江

秀調

升若

蕙女

佳調

小由

寿々女

左団次

小団次	
米蔵	
荒次郎	
左文治	
左伊介	
左伊三	
左喜蔵	
左升	
寿美右衛門	
寿三郎	
一 晒屋長兵衛	
一 実八馬丁小町の金太	左団次
一 若松屋鶴右衛門	寿三郎
一 鶴右衛門娘おみよ	
一 実ハ文金のお竹	小団次
一 若松屋丁稚松太郎	米蔵
一 旅人会津の六兵衛	荒次郎
一 若松屋手代佐兵衛	左文次
一 非人劍菱の呑助	左伊助

一 同 七ツ梅の万太	左喜蔵
一 長岡屋幸兵衛	左伊三
一 若松屋若イ者与吉	左升
一 甘酒屋女房およし	寿美右衛門
一 巡礼万沢のおぎん	
一 実ハ金太郎妹おぎん	秀調
一 若松屋女房おすみ	升若
一 同 妹娘おたい	菫女
一 大坂屋娘おさい	佳調
一 伊勢屋娘おみや	寿々女
一 唐木屋娘おきん	小由
一 津の国屋娘おきの	左之助
一 下女おあき	米菊
一 同 おつゆ	国江
一 学校歸りの子供	四人

浅草奥山茶店の場

本舞台一面の平舞台、上の方奥深に念仏堂の横手を見せ、此より少し下手、鉄網を張りし間口四尺斗り家根附の小サな堂。此内、

立像の観音。此堂に並んで御影石の大きな

石塔。此傍に榎の大樹。正面、瓦葺の家根

附神仏の諸堂。此間立木。楊弓店の横を見

せたる書割の張物。能所に葎簀の家根鹿未

なる掛茶屋。此に甘酒屋の荷を置、床几二、

三脚並べ、都而浅草観音奥山の体。爰に子

役四人、学校帰りの生徒、石盤、草紙杯を持

床几に掛り、甘酒を吞で居る。此を甘酒屋

の婆およし、やつし前垂掛にて盆にて給仕

をして居る。此見得宜しく双盤楊弓の音に

て幕明く。

およし サア、ぼつちちゃん、お替りを上ますから、たん

と上ツて下さい。

生徒○ 僕にはもつと濃いのをおくれ。

△ そふしてぬるひから、熱くしておくれよ。

よし へいへい。熱く致して差上升が、マアぼつちちゃん

方は毎日お手習ひからお帰り掛に寄つて下さいます

が、お師匠さんは馬道の文海堂へ入らつしやいます

か。

生徒□ 婆アさん、そんな文海堂杯と旧弊な名を呼びな

さんな。

× 今年からお師匠さんも学校と名が替つて、僕等もみ

んな苗字をおゆるしになつたから、文ちゃんの勝

ちちゃんだのと呼ばまふな。

○ 今時そんな事をいふと、今に人に笑た<sup>(ママ)</sup>。学校に成つ

た祝ひに毎日甘酒を呑みにこれるよ。

△ 前田君、モウ一杯やりたまへ。

□ 何んだか苗字を呼附ないから、おかしいねへ。

よし ヲヤ、どなたもマア、こまつちやくれた事をおつ

しやつて、おかしひぼつちちゃんだよ。

生○ ぼつちちゃんなんて、モウいつておくれでない。

よし 夫では何んと申升へ。

生○ 島村君といつておくれ。

よし ハイへい、君とでも僕とでも何んとでもいひ升か

ら、甘酒を沢山吞で下さいまし。

生△ イヤ、欲張ツた婆さんだ。

ト子役、銭を払ひ、此内捨ぜりふあつて。

○ 爰へ銭を置たから、早くお仕舞よ。

四人 婆さん、又あした来るよ。

ト右の鳴物に成り、子役四人下手へは入る。

跡、件の錢を勘定し乍ら。

よし 昔しの子供衆より今の子供衆は智慧が早ひから、勘定杯は木丁面でどふして一文でも余慶あきにやア置いて行なさらぬが、悪くするとごまかされるから、どふして〳油断は出来やアしない。

ト又鳴物に成り、向ふより一番目金太郎、堅気成やつし旅形り糸立テわらし掛。同じく一番目のお竹、同じ旅形にて出て来り、直舞台へ来り。

金太郎 浅草の賑ひは江戸一だといふが、相替らず賑やかな事だ。

ト是をおよし見て。

よし お休みなさつて入らつしやい〳。

金 お竹、一服遣つて行ふ。

ト床几へ掛る。

よし 此はお出なさいまし。甘酒を上ゲませふか。

金 イエ、茶を一つ下さい。

よし ハイ〳。

ト渋茶を汲んで出す。

お竹 私しは江戸が初めてゞござい升が、大層賑やかな

所でムイ升ね。

よし 左様で居らつしやい升か〇そふしてお国はどこらで居らつしやいます。

金 わしは奥州の方から式入り連しで出て来ましたが、先一番に観音様へ参詣に来ました。

よし 奥州で居らつしやい升か。夫では先頃軍サのございました所でございますね。

金 イヤモウ、其軍サにはこり〳でございます。

よし イエ、奥州斗りではございませぬ。あなた、此江戸にも軍サがございましたが、此から定めし所々を

御見物でございませぬが、上野へ行つて御覧じませ。

一昨年、彰義隊の軍サがあつた時、御山の立木や黒門の柱へ鉄炮が当つて、今でも其玉がは入つて居りますが、奥州では夫所の事ではございませぬ。

金 イヤ、軍サの話は今ではされますと、身の毛がよだつ様で、今の不仕合せになりましたも、こんな軍

サゆゑでございます。

竹 ほんに夫故、古郷を放れ、江戸は繁花と承りまして、身の落附を願ひに参つた者でございます。

よし 夫はマア、お気の毒様な事でござりますな。

ト誂への唄へ双盤を冠せ、向ふより若松屋の女房おすみ、丸鬚商人の女房。同じく娘おたい、嶋田振袖。丁稚松太郎、尻はしより雪駄、包みを背負ひ供をして出て来り、花道にて。

おすみ けふは観音様の御茶湯ウ日故、取分て賑やかじやのふ。

おたい ほんに左様でござりまするな。

松太郎 いつも甘酒やで休んでお出なさいまし。

すみ そふしませふわいな。

ト件の鳴物にて舞台へ来り、床几へ懸る。

よし ヲ、此は本町のおかみさんにお嬢さん。観音様へ

御参詣でござりますか。

すみ イエ、けふは志す仏があつて、菩提所へ参詣

して、夫から廻つて来ました。

よし 夫はよふお廻りでございました。

ト茶を汲んで出す。

松どん、甘酒を上ゲませふかね。

松 一杯斗りは面倒だから、三ツ四ツ一所に持て来ておくれ。

よし ヘイ、沢山上つて下さいまし。

ト松太郎、甘酒を呑で居る。鳴物きつぱりとなり、向ふより女順礼おぎん、笈づるやつし形り脚絆わらじ、笠と柄杓を持、此を非人呑助、万太、そぼろ形りにて引立て出て来り、花道にてむごく引附。

呑助 ヤイ、此あまは見掛に似合ねへ、ふてへあまつち

よだ。何んでおら達が縄張り内を挨拶なしで貰つてあるきやアがるのだ。

万太 夫も橋本町か山崎町の仲間ならいひが、どこの

山出しだか知れねへ女に此山をあらされて堪るものか。サア、貰ひだめがあるなら、そつくり出して。

呑 あやまればよし、四の五のいやアがりやア、引張つ

て行つて乞食の法に行なはにやアならねへ。

ト言ながら舞台へ引張つて来る。おぎん、

宜しく兩人へ詫をして。

おぎん 其お腹は御尤でムリ升が、あなた方のお仲間の勝手をしらぬ田舎者。どふぞ御勘弁被成て下さりませ。

呑 何んだ、堪忍しろと。べら坊め、只堪忍が出来



るものかへ。

万 達てあやまるなら、貰ひ溜を出してあやまるがいゝ。

トむごく突廻す。此内、金太、お竹は此順  
礼を見て悔りなし、思入有て。

金 ア、モシ、手水場はどこでございますね。

よし ハイ、此お堂のついで横手でございます。

金 あすこでございますか。ドレ、一寸行ツて参ります。  
よし 御ゆつくりいつてお出なさいまし。

ト金太郎、お竹は足早に上手榎の大樹の蔭  
へは入る。此内、始終おすみ、おたいは順

礼が可愛そふだといふ思入。ト、非人兩人  
はおぎんを引立。

呑 エ、こいつア、中く強情な女だ。

万 銭を出せといふに、出しやアがらねへか。

ト胸倉を取て、こずき廻す。おすみ此を見  
兼て。

すみ ア、モシお前方、手荒ひ事をしなさんすな。

たい 可愛そふな。あの通りあやまつてお出だから、堪  
忍してやらしやんせ。

松 弱ひものいちめを仕なさらずと、いひ加減に勘弁し

ねへな。

ト非人、此にてむつとこなし。

呑 勘弁するもしねへも何も、お前さん方のお世話にな  
る事じやアねへ。乞食は乞食の法があつてするのだ  
から。

万 素人衆が口出しをするにやア及ばねへ。

すみ そりやさふでもござんせふが、あんまり可愛そふ  
ゆゑ。

ぎん ア、モシ、有難ふございます。どふぞ堪忍してく  
れます様、お執成をお願ひ申上ます。

ト手を合せ頼む。松太郎、身兼て。  
松 ヲイ、あんなにあやまつて居るから、いひかげ  
んに堪忍してやるがいひ。

呑 エ、此素丁稚め。手めへ達の出る幕じやアねへから、  
ト此を聞、非人兩人むつとなし。

万 余慶な口を叩きやアがると、順礼と同じ様に引張ツ  
て行ツてたゝツ殺すぞ。

ト悪口をいふ。松太郎こなし有て。

松 何んだく、引張ツて行くと。こいつア面白い。引

張ツて行なら引張ツて行て見る。サア、此からはおれが相手だ。

トきつとなるをおすみ留て。

すみ ア、コレ、松太郎。どふしたもののじや。

よし 相手が悪ふございますから、マアく静になされませ。

松 イエ、うつちやつて置いて下さい。○うぬらア、おれを只の小僧と見違へやアがつたか。○

トせふでんの様な誂への合方に成り。

生れは新橋金春で、芸者屋の中で育つたお蔭にやア、東京市中はいふに及ばず、横浜切ツての親分でへに可愛がられる松太郎だ。今の主人が木葉や故、薬研でおろす陳皮や胡椒。小粒でも辛ひから、サアどこへでも連て行ツて見やアがれ。

ト此にて非人兩人は碎けて。

呑 イヤ、こいつはわつち共が目先きが見へなかつた。

白雲あたまの小僧さんだとあなどつたのが、大頓智気だ。

万 足弱の順礼などをいぢめてかすりを取てへのも、此頃世間が不景氣故、つい無理な仕事をしましたに。

呑 どふか一杯のまして下せへ。おめへさんのお顔にめんじて。

万 仕悪ひ勘弁しますから、一杯買ツてやつて下せへ。

松 そふ来てくれゝば、こつちも男だ。此で一杯やんなせへ。

ト二朱出してやる。非人受取。

呑 ヤ、こいつア二朱だ。

呑・万 おありがたふございます。

ト乞食がいふ様な礼をいふ。

松 夫でよければ早く行なせへ。

呑 ヘイく。参りますく。○そんなら御新造様やお嬢様。

万 往や返りのお旦那様、助けてやつておくんさい。

どふぞや、あなた様。

ト大きな声にて言乍、下手へは入る。跡。

おぎん悦び。

ぎん どふなります事かと存じましたに、あなた様のお蔭にて災難をのがれまして、有難ふござりました。

ト涙ながら礼をいふ。

すみ そふしてお前さんは、どこから江戸へお出でござ

んすへ。

ぎん ハイ、私は奥州の会津の女でございますが、子細あつて回国を思立ち、江戸浅草の観音様へ参詣に参つたものでござりまする。

たい エ、そんならお前さんは会津のお方でござりましたか○

トこなし有て。

会津のお方と聞に附ケ、てもおなつかしい姉さんの事。丁度此お方の年格好といひ、同じ様かと思ひますと、又思ひ出して悲しふござりますわいな。

すみ 成程、そふいやれば行糸の知れぬ姉の年輩○

ト気を替え。

そふして何故、回国に出なすつたのじやへ。

ぎん お話し申せば長ひ事。マア、聞て下さいまし○

私しの身の上は、兄弟たつた二人りで長らく会津に居りましたが、おとゝしの軍サの時、行糸知れず、多分それ玉にでも当ツて死ましたか、何分乱軍の中ゆゑ、探す事も出来ませず、と申して外に身寄りもござりませぬから、責て兄の菩提を弔ひませふと、思立まして此回国。長ひ旅ゆゑ今の様な悪ひ者に出

逢ひまして、僅かに路用もとられて仕舞、詮方なくく辻堂や、畠の中へ野宿を致し、難義を忍び参りましたも、万一兄に巡り逢ふかと、夫ばかりが空頼め。御推量なされて下さりませ。

ト思入にていふ。此以前より金太郎、お竹、出懸り居て、此を聞思入有て、又元トの榎の蔭へ隠れる。トゝおすみは紙入より金を出し、紙へ包んで。

すみ お前さんのお話しを聞まして、思はず涙にくれました。嗚心細ひ事でござんせふが○

ト件の金包を出し。

此は少しでございますが、ほんの志ゆゑ、どふぞ納めて下さいまし。

ト出すを受取。

ぎん エ、こりや沢山に此お金を○イエ、此を頂きましては済ませぬ。

ト押返すを。

すみ ハテ、お前へ此恵みを致しますも、けふは大事の仏の速夜。功德に上げる其お金。遠慮なく取て置なさんせ。

ぎん 夫ではあなたも私の供養に。

すみ 実はお前さんと同じ様な、義理ある娘の行糸が知れませぬ故、人に恵むも其子の為。

ぎん 何んとおつしやります。

ト合方に成り。

すみ 今お前さんの生れ古郷が会津表とお言ひ故、他人の様には思はれず、話せば長ひ事ながら、元ト私は今の連合の後妻にて、程経て此娘をもふけました。が、先妻の子に一人りの娘。後添を貰ふにつけ、後日彼は面倒と、私しが来ぬ前、奥州会津の親類先へ養女にやりしが、運拙くして戦争起り、親子兄弟散くばらく。

たい お姉エさんのお内では、家蔵迄も失ひて、姉さんは行糸知れず。夫故其日を命日に、けふが丁度三回忌。

すみ 今菩提所へ参詣して、戻る道にてなつかしい会津の人の難義をば、救ふも私の導きと、夫で恵んだ其お金。斯ふいふ訳ゆゑ、マア取て置いて下さるまいナ。

トおぎんも此を聞、気の毒の思入にて。

ぎん 夫はマアお気の毒な事でござります。左様なら

ば此お金はお貰ひ申しますでござりませぬ。

ト金包をいたゞき悦ぶ。此時、弁天山の七

ツの鐘なる。

松 モウ七ツか。何にしる順礼さん、今日は早く旅宿へ

帰り、ゆつくり休ムとし被成せ。

ぎん 何から何迄、お心添へ。そんならおいたしませう。  
すみ 今の非人に逢ひ升と、又むごい目にあひ升から。たい 気を附て行きなさんせ。

ぎん 御深節の其□、此御恩は忘れ升ぬ。

すみ その礼よには及ばぬゆへ、おまへさんも達者で居被成せ。

ぎん 有難ぐ存じ升る。御縁があらば、又重ねて。

すみ お目に掛る事もムリ升せう。

ぎん 左様なれば何れもさま、是でお別レ申升る。

ト右の鳴物に成り、おぎん捨ぜりふにて、皆く辞義をなし、ふり返り見乍、上手へ

這入る。おすみ跡見送り、思入あつて。

すみ けふは思わぬくどくをして、能心持でムんす。

たい 草葉のかけで姉さんも、嘸悦ぶでムんせう。

すみ 夫はそふと、もふそろくと帰り升ふ。

よし マア、宜しひではございませぬか。  
すみ イエ、今夜は又内で法事を勤めまする故、そ  
ろく、出懸ると致しませふわいな。

ト此内紙入より式朱出し、松太郎へ渡す。  
松太郎、婆アの前へ出す。

松 ソレ、お茶代だよ。

トおよし受取。

よし 此はマア、沢山に有難ふござりまする。

たい 夫ではおぼさん。

すみ お世話になりましたナア。

ト時の鐘、誂への合方にておすみ、おたい、  
松太郎附て上手へは入る。跡、片附ながら。

よし ほんとうに本町のおかみさんは、よくお恵みをな  
さるが、どんな金持でもあのお方の真似は出来ない  
ね。

ト爰へいぜんの金太郎、お竹、榎の蔭より  
出て来り、皆く、の跡を見て、お竹と顔見  
合せ思入有て、兩人後向に床几へ懸居る。  
双盤楊弓の音に成り、向ふより長岡や好兵  
衛、羽織着流し、商人の拵へにて風呂敷包

を肩へ掛け衣裳やの体。跡より旅人六兵衛  
旅形やつし脚絆わらじ、笠を持、連立出て  
来り、花道にて。

六兵衛 モシ、錢塚地蔵様といふのはどこでござい  
ますね。

好兵衛 錢塚様は、此から左りの方へ行つて聞くと、直  
分ります。

六 ハア、そふかね。有難ふございます。

ト兩人舞台へ来る。およし、好兵衛を見て。

よし ヲヤ、仲町の旦那様。マアお休みなすつて入らつ

しやいまし。

好 ばアさんのお世辞だ、一服遣つて行ふかね。

ト好兵衛、床几へ掛る。

六 おまへさまが休むなら、おらも休んで行くべい ○

併し茶代は何んぼだね。

よし ヲホ、マアあなた、お茶代は思召次第でよ

ふござります。

六 夫じやア、四文が所を休ませて下せへ。

ト同じく床几へ懸り、茶なぞ吞ながら。

好 お前さん、江戸は初めてかへ。

六 ハイ、初めてゞございませうが、江戸といふ所は生馬の目をくりぬく所といふから、道をおるくにもけんのんでなんねへ。

好 成程、初めてゞはそふだらふ。そふしてお国はどこだね。

六 わしが国かね。国は奥州会津で、おとゝしの軍サに身上震ひをして、思ふ様でねへから手堅ひ所へ奉公でもする気で、わざゝく国を出て来たのだよ。

好 そふかへ、奉公する積りとは丁度いひ所だ。何んとおらが内へ二、三年奉公する気はないかね。

六 何、奉公しろつて○  
ト好兵衛の身形りへ思入して。

おめへらの内は何商売だね。

好 おらが所はまづ猿若町の三芝居を始め、踊りの浚ひやなんぞへ衣裳を貸す、随分面白ひ商売だ。

六 ハア、夫では芝居や踊りへ衣裳をかきなざるおふ（ウツ）か。そんなあふなつかしひ商売はいやだ。

好 イヤ、あふなつかしひ商売とは挨拶だ。  
よし 夫ではやつぱり、よし町の口入宿へ懸ツて口をお

探しなさいまし。

六 成程、よし町に口入宿があると聞たから、そこへ行ツて頼みます○併し軍サせへなけりやア、こんな江戸へ出て苦労をせずともいひに、情ケねへこんだ。

好 イヤ、こんな江戸だの、生馬の目を抜くだのといふのは、あんまりひどいが、御一新此方は東京となつた此土地。何から改まつて、まづこんなよい所は外にありやアしない。

六 イヤ、おらは又第一江戸が東京と名を替たからして、癪に障るのじや○国のお殿様が軍サに勝せへなさりやア、やつぱり元の江戸で居様に、御家中の人達は老人子供女迄、御恩報じに命を捨、働いたのも水の泡。考へると悲しくなります。

好 イヤ、会津の人は正直だから、そふ思ふのは尤だ○ばアさん、茶代を置よ。

ト財布より銭を出して置。

トシクゝ泣出す。好兵衛、感心の思入にて。

好 イヤ、会津の人は正直だから、そふ思ふのは尤だ○ばアさん、茶代を置よ。

六 ハア、夫ではおらも遣るべい。  
ト財布を。

好 イエ、一所に遣つたから、お前はやらすともよい。

探しなさいまし。

六 エ、夫ではおめへさまが出してくれたか。夫は御奇特なこんだ。

よし マア、御ゆつくりなさいまし。  
好 サア、一所に行ふかね。

ト双盤に成り兩人捨ぜりふ言ながら、上手へは入る。此跡、金太郎、お竹、前へ向ひて。金 計らず爰へ差合ものは、みんな会津の者斗り。現在今来た順礼は、置去にした実の妹 ○

たけ エ。

トあたりへ思入有て、気をかゑ。

金 モシおかみさん、只今しがたあちらへお出なすつたお嬢さん連の御新造は、あれはどちらのお方でございますね。

よし ハイ、アノお方は本町の葉種問やのおかみさんで、大層お慈悲深ひお人でございます。

金 さつきから爰で居りましたが、お情ケ深ひ、よいお方。そふして家名は何んといふ葉種問やでございますな。

よし 慥か家名は若松屋鶴右衛門さまとおつしやいました。

竹 そふして又、旅のお人と忝入りして向ふへお出になりましたは、芝居や踊りのお浚ひへ衣裳を貸す御商売だと承りましたが、私は江戸が初めて故、一向勝手を存じませぬが、そんな御商売がございますのでござりまするか。

よし ある所じやアござりませぬ。衣裳やではまづ、山の宿の守田やか、仲町の長岡や。二本の指に折れるお内でございますよ。

金 田舎と違ふて、芝居へ出す衣装を貸ても暮らせるとは。

竹 成程、咄しに聞た通り。

金 大都会とは ○

ト床几へ掛るを道具替りの知らせ。

能いつたな。

ト此仕組、楊弓音、双盤のせめにてよろしく道具廻る。

### 本町葉種屋奥の場

本舞台矢張り平舞台、向ふ折廻し、上の方一間の床の間。此に六字名号の掛物。此前、

小さな須弥壇。此上に鶴亀の真鍮の蠟燭立へ蠟燭をとぼし、真中香炉、花活の三ツ具足を飾り、此前色々の備物。此に続いて地袋違棚。此脇、襖の出は入り。都て若松屋奥座敷の体。爰に精進物の本膳を並べ、大坂やの娘おさい、伊勢やの娘おみや、唐木やの娘おきん、津の国やの娘おきの、いづれも友達娘にて膳に向ひ、喰しまいたる体。下手に下女お秋、同じくお露、盆を持、そこから片附て居る。番頭佐兵衛、羽織着流しにて皆くへ挨拶して居る。此見得、誂への合方にて道具留る。

佐兵衛 今日皆様よふこそお出下さいました。あちらの座敷で差上ませふと存じました所、爰でよいとの仰せに随ひ、お上げ申しましたが、イヤ早お鹿末な事で失礼を致しました。

おさい イ、エ、御丁寧な。大層頂戴致しました。

おみや 私共はお顔は存じませぬが、責ておみや様のお位牌の前で。

おきん 頂戴致す方が折角のお志しゆえ。

おきの よろしからふと、お相伴を致しました。

佐 イエ、お友達で居らした皆様が、そふ遊して下さいれば、今日の仏様も大悦び。夫におかみさんも嬢さんも、モウ仏参から帰ります時分故、マア御ゆつくりなされて下さりませ。

ト此内下女は膳部を奥へ運びなぞして。

下女お秋 其お帰り迄、御退屈ゆる草双紙か役者の錦画でも御覧に入れませふか。

佐 成程夫はお慰みにならふから、早く持て来てお見せ申すがよい。

下女お露 夫はお土蔵から出して持て参りませふ。さい イエ、お取込みでございませふから、決してお構ひ。

娘四人 下さりますな。

ト合方きつぱりとして、奥より主人鶴右衛門、かつら羽織着流しにて出て来り。

鶴右衛門 此は失礼を致しました。〇皆様が斯ふをお揃

ひを見るにつけ、みよが宅に居りましたら、お話し相手にならふかと存じますると涙の種でござりまするが、実に人は息のある内の事。加様に位牌になり



ましては、つまらぬものでござりまする。

ト鼻紙で鼻をかむ。皆くゝ気の毒思入にて。

さい ほんにお達者でお出なさいましたら、私共もよいお友達で。

みや お芝居杯へお誘ひ申して。

きん 御一所に参るもの。

きの 惜しひ事でございまする。○そふしてお内のおみ

よさんは、おいくつの時、田舎へお出なさいました。

鶴 三才の時でございますが、実の母がなくなりまし

て、私し一人りの手故、育て方に当惑致し、丁度奥

州会津に懇意な人がございました故、夫へ養女に遣

りました所、程なく御領主の殿様へ御奉公に上り、

お小姓より段くゝと出世致し、十八才でお傍になり

ました時が丁度おとゝしの戦争故、殿様さへ降参遊

す程な事、娘が生死も分り兼、定て戦死と心得まし

て、其日を直にあれが命日。けふが三回忌の速夜に

当り、あなた方をお招ぎ申し、鹿末な膳部を差上ま

したのでござりまする。

さい マア夫はお可愛そふな事でござりまする。

鶴 イエモウ、こんな事と思ひますれば、会津などへは

出しませぬに、此と申もあれが不運。

佐 只今となり主人も後悔致して居りますが、扱ひふて

歸らぬものは命斗りでございまする。

ト爰へ下女一人出て。

露 只今おかみさんとお嬢様がお歸りでございまする。

鶴 ヲ、夫はよかつた。早く爰へ来て皆さんへお礼をい

へと申してくりやれ。

露 畏りましてござりまする。

ト下女は入る。合方きつぱりとなり、奥よ

り以前のおすみ、おたい、松太郎附添出て

来り。

すみ 只今歸りましてござりまする。

鶴 ヲ、御苦勞であつた。早く皆さんへ御挨拶をするが

よい。

すみ ヲ、此はお揃ひでよふお出下さりました。

たい 大方お出と存じまして、道を急ぎましたれど、途

中で暇取りました故、つい遅くなりました。

さい きょうは御馳走さまになりました。

娘四人 有難ふござりまする。

ト挨拶よろしく有て。

佐 お寺参り斗りでは大層お手間が取れましたが、途中

でお暇取りは何事かござりましたか。

すみ イエ、何も案じた事ではないが、よい善根をして参りました。

鶴 娘が速夜に善根をしたとは、夫は耳よりな事じゃ。どの様な事をなされました。

ト合方に成り。

すみ いつも寄り附の奥山の甘酒やへ寄りました所、非人式人りに引立られて参りましたは、年の頃といひ、然も会津の生れの者にて行系の知れぬ娘と丁度同じ年格好。

たい 其乞食に手込めに逢はふとした所、松太郎が少く、お金を遣りまして、其順礼の災難を助けて遣しました所、大層悦んで居りましたが、丁度三年の御法事に会津の人を助るとは此も草葉の蔭の姉さんのお引合せかと存じまする。

松 今おかみさんのお話しの通り、中く、其乞食が強情を張りますのを、此松太郎が相手に致して、芝居で立テをする様に、ポンく、ポンと手玉に取つて、投て遣りましたので、其乞食は命からくどこへか逃

て参りました。

佐 イヤ、夫はいつもにない大手柄だったが、其話しはあつちこつちでお前の方がその乞食にポンくと投られたのではないか。

松 イエ、投たのは実はうそだが、お金をおやんさすつたのは御新造様で、わたしはほんの取次でやつたのさ。

佐 そこらがそなたの本役だ。○併シよい善根をなされましたナ。

トバタくくに成り、爰へ奥より若者と吉出て来り。

与吉 大変でございますく。

ト此を聞、皆々恟りなし。

鶴 何、大変とは何事だ。

与 只今会津からお嬢さまがお帰りになりました。

鶴 エ、馬鹿をいふな。死んだものが何んで会津から帰るものか。夫は大方人違ひだらふ。

与 イエく、正真正銘のお嬢様だと、証人に晒屋さんといふ方が附てお帰りなさいました。

鶴 エ、夫はマア、ほんとふの事か。

すみ ほんに夢の様なれど、生死の知れぬ娘の身の上。  
鶴 何にしろ、早く爰へ通せく。

佐 夫では一寸お出迎ひに。

松 わたしも一所に参りませふ。

ト佐兵衛先に、松太郎、与吉奥へ這入る、  
娘四人こなし有て。

さい おなく成り被成れたおみよさんが。

みや 御存命にてお帰り被成。

きん こんなお目出たい事はムり升ぬ。

鶴 何だか骸がぞくくして、居ても立ても居られませ

ねば、どうぞそ<sup>(ママ)</sup>うして下さりませ。

きの 私共も宿へ帰り、此お咄しを致し升て。

さい 又改メてこちらさまへ。

みや お悦びに。

四人 上り升る。

鶴 そう被成れて下さり升せ。

ト鶴右衛門、悦ぶ。娘四人捨ぜりふにて辞

義をなし、下手へ這入る。此内鶴右衛門、

おすみ悦び、気のせく事あつて、能程に誂

への合方に成り、奥より佐兵衛案内して、

以前の金太郎、羽織着流し商人の拵へ。同  
お竹、文金嶋田半振袖、商人の娘の拵へに  
出て来り、下手能き所へ住ふ。鶴右衛門、  
これを恠りこなし。

鶴 ヲ、娘か。よふ帰つて来てくれた。

たけ そんならあなたが実のとゝさん、おつかさんでム  
りましたか。

鶴 ム、そう共く。わしは実の父なるぞ。

すみ 又わたしは義理ある母。

鶴 死だと思つた娘が無事。

さい わたしも姉さんに逢イ升て。

すみ こんな嬉しい事はない。

鶴 能まア、帰つて来てくれた。

たけ ア、おなつかしうムり升る。

トお竹、鶴右衛門のひざへ取付。兩人よろ  
しく思入。鶴右衛門、氣をかへ。

鶴 夫はそうと三年跡に死んだそなたが、どうして帰つ

て来た事か。是には深いわけがムらふ。どふぞ聞し

て下さりませ。

ト思入有ていふ。「金太郎」左団次前へ進み。

金

其御ふしんは御尤。扱、何からお話し申しませふやら、お娘御が余りの嬉しさに、先だつものは泪ばかり。実に此再会は夢に見た様なものでございませふ。まづ私しから委しひ子細、摘んでお話し申ませふ。

ト誂への合方に成り。

私しは会津の御城下に久しく住居致しました、晒や長兵衛と申す者。何が扱、一昨年戦争、御存知の通りの混雑に当家の娘御おみよさんが、御殿からお立退になりますとたん、御養家は戦争の為に焼払はれましたので、家内散々、行系知れず。おみよさんたつたお独りで路頭に迷つてお出の所、御養家の岩代屋様とは同商売ゆゑ、お顔を存じ、マア兎も角も私し共へとおみよさんをお連申した所、間もなく岩代屋の御主人も命から去り、お出になり、暫く私し方へお囲まひ申せし所、御主人は夫や是や ○ 御心配から終に御大病□。何分長びく所から、私しへのお頼みには、乳呑の時に貰つた娘。実の親御はこれが顔をろくく知らぬ位ゆゑ、此を証拠に見せてくれと、お渡しになつた此品々。どふか当分実家にて預

つてくれとの御伝言でございました。

ト大詰の着物と背負守りを出し、思入にていふ。鶴右衛門、件の品々を見て。

鶴 ヲ、此品は、私し共で何れも覚へがござりまする品。殊に慥かな此守り。夫では愈々娘みよは助かりまして、おつれなされて下さりましたか。

竹 ほんに不思議な此おめもじ。よくお達者で居て下さりました。

鶴 そなたも達者でよく居てくれた。

すみ そふとは知らず此年月、死んだと思ひ、あの様な位牌迄拵へて。

たい 会津の軍サのあつた日を、直に御命日と思ひ話たお姉さまと。

鶴 無事で再び逢ふといふのは。

竹 おとつさま。

鶴 娘、よく達者で居てくれた。

ト鶴右衛門、お竹の手を取て引寄る。

竹 お嬉しふござりました。

ト鶴右衛門の膝へ縋り泣く。金太郎こなし有て。

金 何んにしろ此節は油断の出来ぬ世の中故、いくらも人をこんな手でだます奴がございますから、今差上た品々の外にお手紙も持参致しましたが、此には岩代屋さんの御実印が慥に押てあるといふ事。此も御覧下さいまし。

ト書状を出す。鶴右衛門、此内佐兵衛に云付奥へやり、件の書状を開き見て。

鶴 疑ひもない此が養父岩代屋の慥かに真筆。御信切なるあなたをば、何しに疑念致しませぬ。御信切な

金 御疑念晴れば遠くの所を参つた甲斐もあり、又私しが義心も立、こんな嬉しひ事はございませぬ。

たい 其嬉しさは姉さんと、けふからお傍に一ツに居られ、おとつさんへ孝行を尽されますのが、何より私しや嬉しふござりまする。

鶴 ヲ、そう共く。わしはあんまり嬉しいので、夢のやうに思ひ升。

佐 是と申も晒屋さんのおかげ。只今迄は色々と厚い御世話に成りし上。

「お竹」 斯うしてぶなに実家へ帰り、こんな嬉しい事はムりませぬゆへ、お礼を申上る。

トお竹、手をつき礼を言。金太郎、思入あつて。

金 そう改めて礼杯をおつしやるには及びませぬが、夫承るとわたくしも案心して国へ帰られ升る。

ト爰へ奥より佐兵衛、金を紙に包み、のしを掛、盆へ乗せ持出ル。

鶴 是は甚ダ失礼乍、ほんの旅用のおたし前に、お納め被成れて下さりませ。

金 お□の旅用は岩代屋さんから充分お預り申て参りましたから、その御心配には及びませぬて。

鶴 デハムりませうが、どふぞお納め下さりませ。

金 夫でも是を頂戴致しますては。

鶴 ハテまア、お納め下さりませ。

ト無理に出すゆへ。

金 左様なれば、折角の思召、てうだいゝたすでムり升る。

すみ はるぐ御出下さりまして、余りおあひそうがムりませぬ。只今一寸支度をいたさせ升たから、一口召上つてお出下さりませ。

鶴 ヲ、そうじや共く。夫になるべくは今晚は手前内

へ御泊を被成ツては下さり升ぬか。

金 イエ、有難ふはムリ升が、まだ顔を出し升所もムリ升から、是でお暇いたし升。

すみ 誠にお早くでムリ升な。

金 ならばをてうだいたして置升る。

竹 そう被成て下さりませぬと、こちらの心が済ませぬ。

鶴 併シお帰りとおつしやり升が。

すみ 是からどちらへいらつしやい升る。

たい 初めてお出のお人には。

佐 勝手のしれぬ東京ゆへ。

鶴 誰にか送らせてやりませう。

金 度々参つて存じて居り升。どうぞお構ひ下さい升な。

鶴 夫では店迄。

皆く お見送りを。

ト皆く立掛る。

金 イエ、けつして夫には○

ト立上るを木のかしら。

及びませぬ。

ト此もやう、賑やかな唄にてよろしく

拍子幕

明治廿七年十月大吉日

紙員 十六葉

千穂万歳大々叶

筋書 竹柴其水

作者 竹柴彦作

五幕目

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

第一番目五幕目

本石町蕎麦屋の場

本町薬種問屋の場

升若

薙女

鯉丸

左団次

小団次

米蔵

荒次郎

左文治

松五郎

門兵衛

五郎

左太郎

しげ蔵

左薙

権十郎

寿三郎

一 晒屋長兵衛

一 実ハ馬丁小町の金太

左団次

一 若松屋娘おみよ

一 実ハ文金のお竹

小団次

一 丁稚松太郎

一 出前持六兵衛

米蔵

一 手代佐兵衛

一 非人吞助

荒次郎

一 板前長野の信蔵

一 長岡屋幸兵衛

左文次

一 町人客丸助

一 同 字六

左伊三

一 若者 角七

一 同 千喜八

一 会津庵四郎兵衛 権十郎

一 若松屋鶴右衛門 寿三郎

一 鶴右衛門女房おすみ 升 若

一 おみよ妹おたい 莚 女

一 そば屋小女おまき

本石町蕎麦屋の場

本舞台上手へ寄せて三間常足の式重。六枚

飾り。正面上手一間の中仕切りあるまいら

戸の戸棚。此前に帳場格子。つゞいて一間

障子を建切り、此上に神棚金具よろしく飾

り、下の方二段の棚。これにそばの蒸籠、

けんどん箱杯並べ、此下にそば粉の俵を積

み重ね、式重の下手、一面の土間。跡へ下

げて釜前の竈并に板前あり、能き所に醬油

樽大分積重ねあり。下手の欄間へそばの品

書の札を張り、ずつと下の方のれんの入口。

横手のつま、半格子。此外トへ横長のあん

どふをかけ、はやしの下座の所、黒塀にて

見切り、都て本石町会津庵の体。上手の帳

場の内に亭主四良兵衛、着流し前だれがけ

にて帳合をして居る。店先に町人の客二人、

そばを喰つて居る。下手の板前に長野の信

藏、襷がけにてそばを打居る。式重の下手

に前幕の六兵衛、そばやのかつきに成りし

拵らへにて、かんなにて鯉節をかいて居る。

下女おまき、たすきがけにてそばを客へ出

して居る。此模様、けいこ唄へ角兵衛の鳴

物をあしらひ幕明久。

○ かわりをくんな。

おまき ハイ ○ お二人さん、盛り一おかわり。

信藏 ヲイ、承知だ。

トそばをこしらへて居る。町人二人そばを

喰ながら。

△ 爰の新見世が出来たので、此かいわいのそばやはひ

まだろう。

○ つゆがよくつて、そばがよくつて盛りがいゝと来て

居るから、これじやアはやるも尤だ。

△ 外のそばやじやア、寄合でもして直下げでも仕にや



ア、追附かねへ。

トおまき、かわりを持て来て。

まき ハイ、おかわり。

○ ヲイ／＼跡は湯とうだ。

トそばを喰ツて居る。此内、四良兵衛は帳合を仕舞ひ、やはり帳場のうちにて。

四良兵衛 毎度御ひぬきに下さい升て、有難ふムります。

○ トキにこつちの内は会津庵としてあるが、会津からでも出た見世かね。

四 ハイ。一昨年迄、会津におり升たが、御存じの戦争

後から此東京へ出て参り、何ぞ致したらよかろうと、いろ／＼迷ツたそのあげくが、そばやを出入事に成まして、国の親類からそば粉を取よせ、せい／＼気を附ますつもりも、まだ素人でござりますから、悪い所がござりますなら、どうかおさしずを願ひます。イヤ、会津から出た人と聞イては、猶／＼ひぬきにせねばならぬ。

○ それじやアおめへも会津ひぬきか。

△ あの時降伏したものの、徳川家の為にやアカラを尽した会津の国から出たと聞ちやア、江戸で産れたこ

ちとらは、猶／＼ひぬきに仕にやアならねへ。

四 おなじみ薄い私共を、左様におつしやつて下さいますと、心丈夫でござります。

ト此内六兵衛、かつぶしをかいて仕まひ。

六兵衛 モシお客さま、わしもやつぱり会津出でムりますから、どうぞ御ひぬきをおねがい申ます。

○ ア、若イ衆さんも会津かへ。

六 ハイ。会津の者でござりますが、こつちの主人が□□国ゆへ、便ツて参つたのでムります。

△ それじやア、ひぬきに仕にやアならねへ。

ト兩人そばを喰ツて仕舞ひ、湯とうを呑んで居る。右の鳴物きつぱりとなり、向ふより前幕の金太、やつし旅形りにて小包を背負ひ出て来り、直グに舞台へ来て内へは入る。

六 いらはひ ○ おそばは何に致し升。

金太 盛りをいっぱい出して下さい。

まき 盛り一チ引

トこれにて信蔵、そばをこしらへる。金太は式重へ腰をかけ。

金 ねへさん火を一ツかして下さい。

四 コレ、たばこぼんをお上げ申せ。

まき ハイ、お火。

トたばこぼんを出して居る。町人は銭を出して。

○ ヲイ、代は爰へおいたよ。

四 これは有難ふござります。

△ 御ていしゆ、お世話に成升た。

四 毎度有難ふござります。

六 イヤお帰りツ ○

ト町人二人りは橋懸りへは入る。おまきは盛を金太に出して居る。鳴物きつぱりと成り、向ふより前幕のでつち松太郎、麻風呂しきを首へ巻き出て来り、そばやの門下より口をのぞき、あたりへこなしあつて、そつと内へ這入り。

いらはい ○

トうつかりいつて。

ヲヤ、松どんだつたか。

松太良 ねへさん、いつもの盛だよ。

まき ハイ、盛一引

ト信蔵こしらへて居る。

六 どこかへ使ひにいつたのかね。

松 小伝馬町の幸山堂へ旦那のお使ひにいつた帰りだが、爰の内の前を通ると、そばの匂ひが鼻へ這入り、腹の虫がキウと鳴いて、どうしても通り切れぬから、一ツパイ喰ねば虫が納まらない。

トおまき、そばを出ス。松太郎腰をかけ、あわてゝすわりこみ、そばが胸につかへしこなし。

六 ヲイく、松どん、どふかしたかへ。ヲイ、松どん。

ト背中を叩く。

松 ア、苦しい。すんでの事にそばと心中仕様とした。

六 心中をされてたまるものか ○

ト此内金太は盛りを一ツ喰ツて仕まひ、考へて居る。四郎兵衛はこれへ目を附け居る。

信蔵、門下口へ出かけ、向ふを見て。

信 ヲイく、松どん、お店の佐兵衛どんがやつて来たぜ。

松 エ、佐兵衛どんが来ましたへ。それは大変だ。

トそばを片づけ、まごくして下手の板前

の所へ行く故。

信 松どん、何をするのだ。

松 板前を手伝せておくれ。

信 これサ、まぜつかへされちやア、わしが困る。

ト兩人争ツて居る。鳴物きつぱりと成り、向ふより前幕の佐兵衛出て来り、内へ這入ろうとして松太良が居る故、わざと表より声をかけ。

佐兵衛 松どんは居ぬか、松どんく。

ト呼びながら。

六 それく。とふく見付ツたぜ。

松 ナニ、見付つたつてかまふものか ○

ト門下口より外トへ出て。

松 何ぞ御用でござりますか。

佐 御用かもないものじや。てつきりこんな事じやろうと心当りを尋ねて居たのじや。旦那さまがお待ち兼じや。早ふ内へ帰らんか。

松 今、爰の内の前を通ると、いそがしいから手伝つてくれと頼まれました、よん所なく。

佐 エ、そばを喰ひに這入りおつて、そのいゝわけは立

んわへ。

トこれにて六兵衛、門下口へ出て。

六 これは佐兵衛さん、お迎ひで御苦労様でございまして。実は松どんが通りましたから、休んでござれとわしが呼びいれ、お気の毒な事をしました。

佐 イヤモウ、とんと猿の様ながきで、何を見ても真似をしたがり、こんなつらの憎いがきはありやアせんわへ。コレ、早ふ店へ帰りおらんか。

松 それじやア、何はあした一所に ○ イエ何、わしは一所に帰らずに、一ト足先きへ帰ります。

ト門下口へ出かける。

まき アレモシ、松どん。鼻の先きへ粉名(コメ)がつい居升よ。松 今ふきながら帰る所だ。

ト橋懸りへ這入る。跡へ佐兵衛思入あつて。

佐 ア、いふ口のへらぬやつじやが、併しわしも爰の内の前は素通りも出来憎い。裏から這入つて奥の間で、天をいつぱいやりたいが、さし合あるまいか。

六 誰れしもさし合はございません。それじやア、あちらからお這入シ被成い。

佐 天を一はい出して下さい。

ト下手へ這入る。六兵衛は門下口より這入り。奥へ天がいつぱい出るよ。

まき ハイ、天一引。

ト信蔵はそばをこしらへて居る。此内、金太はぶたいに居るゆへ、六兵衛此様子を見て。

六 ○コリヤ、喰逃げでは。

トいふを四郎兵衛、コレと押へて。

四 モシお客さま、お見うけ申せば、先刻から御心配でもある様子。どこぞおわるいのはござりませぬか。  
金 イエ、どこも悪くはござりませんが、実は心配な事がございまして、どふしたらよかろうと考へ事をしております。

トおまきは天ふらそばを持、奥へ這入る。

四郎兵衛、帳場より出て。

四 それは失礼ながら、どんな御心配でござり升る。咄して大事ござりませんなら、膝共談合でござりますから、咄してお聞かせ下さいまし。

金 御深節なその御詞。まア、聞て下さいまし ○

ト誂らへの合方に成り。

何をお隠し申ませう、わしやア、奥州の会津在の者

でござりますが、始終御城下へ熊胆をおろして廻ります内、おとゝしの軍サ騒ぎでその売先きは焼れて仕舞、余義なく今度少し斗りの仕入れ残りを持まして、此東京の本町の去ル薬種屋へ見せた所、これは慥な見本故、ありたけ買ふ約定極り、既に取引仕様といふ間際に至つて、突然に是は偽物と言出して、竟に夫が破談と成り、ほとんど当惑致し升。実は是を引当に路用の金を国でこしらへ、はるく出て来た東京で、此熊の胆が偽せ物だといわれましては、国へ帰る路用の金にも困るしぎ。どうしたものこちらへ這入り、そばを一ツぱい喰ひましても、胸に支へて通りませんから、考へておりました。

ト六兵衛、思入あつて前へ出て。

六 そふいわつしやれば、見た様だが、もしやおまへさんは会津の御重役、桑折様のお屋舗に居たお人ではござりませんか。

金 エ、○

ト思入あつて、気をかへ。

イエ、御城下へは始終出升て、薬をおろしてあるき

まするが、そんな覚へはございません。

六 よく似たお人と思つたが、それじやア、違つて居ましたか。

四 なんにしても、お気の毒な。会津の在のお人と聞い  
ては、わしもどうやらなづかしい。そうしてその熊  
の胆はそこに持てお出でござりますか。

金 ハイ、偽せ物だなぞといわれましては、引合ひませ  
ん。正真の品。大事に爰に持ております。

四 何も心得。後学の為、一寸見せては下さいませんか。  
素人衆でも一ト目見りやア、偽か本物はわかるはず。  
どうか御らんすつて下さいまし。

ト包をととき、小サな柳ごりの中より薬たひ  
しに包みし熊の胆を出す。四良兵衛へ見せ  
る事あつて。

四 コリヤアどう見ても正真の熊の胆に相違ないが、こ  
れが偽せ物とはわからぬものだ。

金 正真の物に違ひないを、偽物だといわれては、誠に  
心外でたまりませんが、そこらが売物買物故、喧嘩  
にもなりません。

四 そうして、いくらに売るつもりで約定をさつしやれ

たか。

金 元方同士の取引でも六十両がものはござりますが、  
右の次第で私もどうでもかうでも此品を売ませんで  
は、さし当り帰る路用に困りますから、二足三文捨  
売に甘両なら手放します。

四 六十両の代呂物を甘両とは安いものだが、極メがつ  
かねば何共早。

ト佐兵衛を見て心付き。

イヤ、そういふわけなら、一寸いつて見て貰ふ所が  
あるが、なんとこれをすこしの間わしにかしては下  
さらぬか。

金 イエ、もふそれはどちらへなりとお見せ被成つて下  
さいまし。安イといへど甘両。偽物をお売申ては濟  
ないわけでござります。

四 それではざんじかして下さい。○

ト四良兵衛、件の熊の胆を元の通りに紙に  
包み、下手へ来り、土間へ下る。此時、六  
兵衛出て。

六 モシ、親方。

ト一寸囁く。

四 それは丁度いゝ。

ト門<sup>下</sup>口を出かける。是にて道具は知らせなしに半廻しに成ル。

本舞台横手のれんの入口、上手に成り、つゞいて行燈のかゝりし格子窓。下の方一めんの黒塀に成る。四良兵衛、佐兵衛下手へ行き、能き所にて道具留る。

ト四郎兵衛、下手へ行き、裏口へ来て。

四 佐兵衛さん、一寸お顔を。

佐 御亭主、なんぞ御用でゐるか。

四 奥にお出でしましたら、始終をお聞でゐりませうが、こなたはさしづめ商売人。目利をしては下さらぬか。

佐 人の事とはいひながら、商売冥利で耳へのり、口を出したく思つた所。どんな性質の熊の胆か、一寸見せて下さいまし。

四 わしにはとんとわからぬが、どうも偽物ツとは思われません。

ト件<sup>レ</sup>の包みを渡す。佐兵衛開き見て。

佐 イヤ、これはたいした代呂物じゃ。

四 正真物でござるかな。

佐 正真共く。併もこれは会津辺の山から出る琥珀出の、上ものゝ熊の胆。コレ、此通り琥珀の様にすいて見へるが何より証沽。これだけあつて甘両で手に這入るなら、わしでも買たい。

四 コリヤ買ずには。

佐 エ、。

四 イエ何、買ずに返せばあの通り、途方にくれると困る様子。思ひきつて買つて置きませうか。

佐 今あの人がいふ通り、六十両にはものいわず売る琥珀の熊の胆を、甘両なら誰れでも買物。わしも半口のりたいたいものじや。

四 何をするのも商法づくだが、たと儲けては冥利がわるい。

ト包みを請取り居る。鳴物きつぱりと成り、橋懸りよりいぜんの松太良出て、此体を見て。

松 モシ佐兵衛どん、旦那様が大そう起つてお出被成るに。

佐 何を起つてござるのじや。

松 佐兵衛のやつのおそひは、大方石町の会津庵で天ぶらそばでも喰つて居るだろうと、大そうおこつてお出被成る。

佐 エ、貴さまではあるまひし、誰れがそんな事をするものか。

松 そうでなければ、わたしと一所にサアく、早くお歸ン被成い。

佐 イヤ、今一寸勘定を ○イヤサ、かんじんな儲け口があるのだ。

松 イヤ、そばを喰ふよりその外に用のないこつちの内。サアく、一所に行ませう。

ト手を取つて引ばる。

佐 エ、引ばるな。人が見るわへ。

ト兩人よろしく橋懸りへ這入る。跡に四良

兵衛、思入あつて。

四 丁度折よく葉種屋の手代が目利に来て居たも、天からさづかる儲け口。増々運んが向いて来たわへ。

ト道具元へ戻る。

本舞台いぜんの店先き。金太はそばを喰ひ  
仕まひ、湯を呑んで居る。右鳴物にて道具  
留る。

ト下手入口より四良兵衛出て来り。

四 これはお待遠でござりました。

金 イエ ○もふおもどりでございますか。

ト四良兵衛、式重へ上り、住居。

四 お待遠でござらうと、取急いで戻つて来たが、今隣り町の葉種屋や行き、不断懇意な間柄に、只何となく見せた所、まことの物には違ひないが、何をいふにも時節柄、差向き甘両といふ金は右から左り、出し憎く、十五兩なら買つておくと向ふのあるじがいひましたが、わしもこなたが困るとき、救つてあげる誠心で、目利をさせた此熊の胆。見たおしますのも気の毒故、いひ直で買つて進ませう。

金 エ、左様なら、甘両である、お引取り下さいますとか。

四 サア、此時節に甘両、耳を揃へて出し升かは、これも全く達引づく、欲徳づくでは買れませぬ。

金 おつしやる通り、地獄で仏。はじめて出て来て勝手

は知れず、どう致そうかと途方にくれ、そばさへ喉へ通らぬ程、心配をしておりますが、おかげさまで助りました、こんな有難ひ事はござりません。

ト嬉し泣きに泣く思入。

六 イヤ、それといふのもこつちの内は、会津から出たお方故、故郷の人の困るのを、見兼てお救ひ被成るのだ。

金 実はこのれんに会津庵と記してあるのがおなづかし、うか／＼這入る気になりまして、かういふ御恩に成るといふは、これもお国の殿さまのお引合せでござりませう。

四 それではこれは買ツて置きます。

金 ヘイ、目方をかけて差上ますから、一寸おかし下さいまし。

ト件シの包みを開き、柳膏李の内より小サキ秤を出し、目方を見て居る。此内四良兵衛は、うしろの戸棚より金を出して居る。金太はわざと六兵衛に見せて。

御ら下さい、百廿目ござりますから、六十両は元で売れます。

ト元の通りに包み、六兵衛に知れぬ様に同じ包みとすりかへる事よろしく。此内四郎兵衛は金を出して来り。

四 壹両札ツで廿両。改めて請取つしやい。

金 ヘイ／＼お頂き申します。代呂物とお引換へ故、別にお請取はさし上げません。

四 よい共／＼。金と引かへ、薬は慥に請取りました。

ト件シの薬包みを請取る。金太も札を請取り、元の通り風呂敷包みを通し。

金 そうしておそばはいか程か。代をお取り下さい。

四 盛は一ぱい八十ツ、百六十置つしやい。

金 それではこれをお取下さい。

ト天保銭二枚出しておく。

六 イヤ、どう考へてもこなさんは見たお人に違ひなひ。

金 そこが他人の猿似とやら、よく似たものはいくらもあります。

ト風呂敷包を手早く背負ひ。

左様なら旦那さま、自由ながら私はこれでお暇致します。

四 サア、片附いたから早くお出被成るがい。



金 これは皆さん、おやかましふござりました。

て来い。

ト唄に成り、いそくと門ド口へ出て、に

まき ハイ／＼、畏りました。

つたり思入あつて、よろしく向ふへ這入る。

下手の落間より信藏上つて来り。

ト下手の落間から火打石を持て来る。四良兵衛、件シの葉包みへ切火を打かけ、正めんの神棚へ備へて柏手を打、拜んで居る。鳴

信 モシ親方、見ず知らずの今の人から、廿兩といふ金

を出して熊の胆杯をお買ひ被成つて、なんぞお見込

物きつぱりと成り、橋懸りよりいぜんの佐

みでもございますか。

兵衛出て来り。

四 ハテ、見込みがなくつて此時節に冷てへ金の廿兩、

佐 あんないまく／＼しいやつはありやアせん。

耳を揃へて出せるものか。

ト口小言をいひながら、内へ這入る。

信 夫じや大丈夫ですね。

六 ヲヤ佐兵衛さん、又お出被成つたか。

四 今爰に居た佐兵衛どんを頼み、目利をさせたが慥な

佐 旦那が起つて居るなぞと、松太郎のがきにかつがれ

証話だ。

て、天ふらそばを喰残した。

信 成程、あの佐兵衛どんなら、葉種問屋の若松屋に子

四 佐兵衛さん、只今は有難ふござりました。

飼から居る商売人。コリヤア慥な証人だ。

佐 どうじや、お引取に成つたかな。

六 だから大丈夫だ。

四 へイ、儲けませうとは思ひましたが、あの通りの難

併し買直を知られては儲ける事が出来ぬから、いく

渋ものを見倒すでもございません。十兩直をよく、

らで買つたと聞イたなら、知らぬといつて置いてく

七十兩で今買取つて置きました。

れ。

佐 ナニ、七十兩 ○

六 それはよろしふござります。

ト思入あつて。

四 これぞ舞込んだ福の神 ○ コレおまき、石と鎌を持

それじやア、ねつからつまらんわけじや ○ トキニ

替りをあつくして下さい。

まき 天一かわり。

トこれにて信蔵、そばをこしらへて居る。

四 イヤ、大金で買った代呂物。まア、大事にして置きませふ。

ト神棚からおろす。

佐 モシ親方、目方はいくらあるともいわなんだか。

四 秤りにかけて百廿目、慥にあるといひました。

佐 ハテ、そんな目方はないはづじやが。ドレく、も

ふ一ぺん見せて下さい。○

ト請取つて開き見て。

ヤ、こりやさつきのとは違つて居る。

四 ナニ、違つておりますとは。

佐 さつき見たのは琥珀出の熊の胆。コリヤア、松やにをかためたのじや。

皆く、ヤアくく。

ト恟りしてよくく改め。

四 成程、これは松やにだ。

六 それじやア、すりかへて渡していつたか。

四 そうとも知らずうつかりと、心をゆるして請取つた

が、そんなら今のはかたりであつたか。

信 イヤ、これだから油断はならねへ。

四 コレ、六兵衛も信蔵も、そばなんぞはどうでもい、から、今のやつ跡を追かけ、見当り次第つかまへてくれ。

六・信 ハイく、よろしふござります。

ト身支度をする。

四 おれもかうしては居られねへ。

ト身支度をする。おまきは気のもめることなしにて。

まき モシ、おかわりとおつしやいましたら。

四 エ、かわりはないと、ことわつて仕まへ。

佐 イヤ、これはとんだ御あいさつだ。

六 モシく親方、今の野郎は。

六・信 どつちの方うへ行きましたろう。

四 エ、そりやアおれにも。○

ト尻をはしをつて、きつとなるを道具替りの知らせ。

なんでわかるものか。

ト下手の落間へ下りる。佐兵衛はあきれし

本町薬種問屋の場

こなし。此もやう、早い合方、角兵衛の鳴物にて道具廻る。

本舞台五間、通し常足の式重、奥深に飾り、かな網の蹴込み。軒口へ暖簾をかけ、正面上手式間、薬種の箆笥。此上に薬の壇を並びし棚。此前能き所に帳場格子あり、真中壱間、大坂格子の出這入り。此前に四尺程の薬の看板あり。下の方向じく薬種箆笥。此上に薬種の袋を大分乗せし棚。式重の上下、板塀にて見切、都て本町若松屋見世の体。式重の下手に若イ者式人、薬研にて薬をおろして居る。上手に前幕の鶴右衛門、煙草盆を控へ莩を吞居る。此見え、本町二丁目の飴屋の合方にて道具留る。

鶴 コレ、佐兵衛が見へぬが、どうしました。

只今、新道のお土蔵へ調べものがあると、出て参りました。

鶴 イヤ、何も土蔵へ調べもの杯に行く用はないはづじ

やが。  
 大方それをかこつけにして、遊びに出たかも知れません。

鶴 イヤ、あの男にも困つたものだ。わしが見世に居てやるから、二人りは夕飯にするがよい。

ヘイ、それは有難ふござります。

ト奥へは入る。合方きつぱりと成り、向ふより以前の佐兵衛、足早に出で来り、花道にてふたいを見て。

佐 ヤア、大将が見世に居るわへ○兎角天ぶらといふやつは油の香がしてならぬ。

ト口を拭ひながら舞たいへ来る。

鶴 どこへいつて来さつした。

佐 取引の事でいわしやへ一寸いつて参りました。

ト爰へ奥より以前の松太郎出て。

松 天ぶらそばにいわしはないはづだが。

佐 エ、何をぬかしおる。

ト間のわるきこなし。鳴物きつぱりと成り、向ふよりいぜんの四良兵衛、金太の襟がみを取、引立、跡より六兵衛附イて出て、花

道にて。

金 モシく、旦那、どこへ引ばつてござらッしやります。

四 どこでもいゝからだまつて行け。

六 証人の所へそびゐて行くのだ。

金 どういふ間違ひか存じませんが、あなた方に疑<sup>うたが</sup>ひうける、左様な覚へはござりません。

四 まア、いゝからゆけといふに。

松 サア、天ぶらそばだく。松太良、此体を見て。

トはやしながら奥へは入る。佐兵衛は此体

を見て、わるいものが来たといふこなしに

て下手へ小さくなつて居る。鶴右衛門思入

あつて。

鶴 ヲ、誰かと思へば石町の会津庵の御亭主か。

四 これは旦那さま、御迷惑でもこちらさまで少々伺ひたい事があつて参りましてござります。

ト金太はあたりを見て。

金 ○ヤ、この店せは。

ト悔りする。

六 ○うぬ、逃るとて逃すものか。

ト供にとらへる。金太は顔をそむける。

鶴 何か様子はわからぬが、まアこつちへ上らつしやい。

四 六兵衛、しつかりと押へて居ろ。

六 ハイく、よろしふござります。

四 それでは御めん下さいまし。

ト式重へ上りよろしく住ふ。六兵衛は平ぶたいにて金太を押へつけて居る。

鶴 シテ、聞たいといわつしやるわな。

四 ヘイ、伺ひたいと申次第は○

トうしろを見やり。

モシ、佐兵衛さん。一寸どうかこれへお出下さい。

佐 ハイく、これは会津庵さん。しばらくお目に懸り

ません。

四 イエ、しばらくではござりません。今方あなたに内

の前でお目利を頼み申た熊の胆の一条で、証人に立

てお貰ひ申たく、それでこちらへ参りました。

ト間のわるき思入。松太郎出て。

松 天ぶらそばをたべには入つて頼まれたのだと、有体に申上た方がよささうだ。

佐 エ、又出るか。すつこんで居る。

ト松太郎、逃込ム。

鶴 さうして何を頼まつしやりました。

ト合方きつぱりと成り。

四 熊の胆の売物がムりまして、佐兵衛さんに今方目利きをお頼した所、真正正銘のものわかり、あれにおります旅の者が、去ル葉種屋でその品を偽物といわれ途方にくれ、困ると聞いて不便に思ひ、買取りましたその跡で、見ればいつしか偽物と替り、扱は術りと気が附いて直ぐに追懸けつかまへましたが、ツイ此先故、こちらの前へ引張ツて参りました。

ト此内金太は始終顔をかかくして居る。鶴右衛門、思入あつて。

鶴 それではあれにとらへて居るのが、その旅人でございますかな。

四 左様でございます。

鶴 どうやら覚への○

ト思入あつて。

六 モシ、若イ衆。その仁ッの顔を見せて下さい。  
ヘイ／＼○サア、つらをあげる。

トむりに顔をあげさせる。鶴右衛門見て。

鶴 ヲ、こなたは先き頃、会津から娘を送つて来てくれた長兵衛殿ではござらぬか。

四 ○それではこちらで御存じの。

六 ○イヤ、これは思ひがけない事だ。

トこれにて金太、わざとしほれしこなしにて。

金 ヘイ、長兵衛でムります ○逃も隠れも仕ませんから、まア放して下さいまし ○

トよろしく下手へ上る。これにて合方きつぱりと成り。

誠に思ひがけなひ事で、又お目通りを致しますが、あふせの通り此間こちらのお嬢さまを送りとゞけ、お手当迄も頂いて国へ帰ろうとは思ひましたが、戦争後にて得意もなく、所詮見込みはございせんから、いつそ此假東京に居て元手をこしらへ何なりと商売に取つきたいと、国を出る時持て出た真正正銘の熊の胆を去ル葉種屋へ持て参り、六十兩に売る積りも、偽物といつて断られ、うか／＼寄ツたそばやさんで始終をおはなし申した所、さういふ訳なら買つ

てやろうと、目利までさせ廿両でお買ひ下すつた熊の胆が又偽物にかわつたとは、すこしも合点が参りません。すりかへました覚へなぞは、露聊も御座いませんから、どうぞおうたがいをお晴らし下さいまし。

ト此内四郎兵衛は金の高をいわれて間のわるきこなし。佐兵衛思入あつて。

佐 それでは今方七十両で買つたといつた熊の胆は、廿両でござつたか。

四 イエ、それはわしの五言の違い。廿両で買ました。トいひまぎらす。

金 廿両で買つたものを、七十両とおつしやる様では、そちらにあやがありそうだ。

六 うぬ、そんな事ぬかしやアがつて。

ト立懸るを留て、鶴右衛門思入。

鶴 イヤ、わしの方にも此お人に聞たい事もござるから、まアく一ツぶく上ツて下さい。○コレ、松太郎は居ぬ、松太郎く。

松 ト呼ぶ。看板のかげより松太郎出て。ヘイく。お使ひでござりますか。

鶴 奥へ往つておみよを呼んで来い。

松 ヘイく。畏りました。

ト奥へ這入る。引違つて女房おすみ、好みのこしらへにて、いぜんのおたひをつれて出て。

おすみ 思ひがけなひ長兵衛殿。又お出でござりましたか。

金 これはおかみさま。先き頃はいろくと御厄介に相成りました。

四 ○それではこのお嬢さんを送つて参つたのでござりますか。

鶴 ○イヤ、これではない、此姉でござる。

ト此時奥にて。

松 サアくおみよさん。一寸お出被成い。

トむりに手をとり、いぜんのお竹をつれて

出る。

竹 エ、もう、あわてくさつて、わたしをとらへて何が  
用があるのやら。

ト思わず前へ出る。六兵衛これを見て。  
六 ヤ、こなたは桑折のお竹どんだ。

竹 エ、○

トぎつくりして、わざと気をかへ。

ア、モシく、そりや何をいわしやんす。その桑折のお竹どんは知つては居れど、あの人と見違ひられ  
ては困るわいなア。

六 イヤ、とぼけても、そりやアいかぬ。わしやア、会  
津の病院で小遣ひをして居た六兵衛だ。

竹 サア、それはわしも知つて居れど、おまへも知つた  
あの時分、御城内より手分けをして戦地へ女隊の  
くり出した跡に残つて負傷人の看病をしたみよでござんす。お竹どんとは違ふわいなア。

トよろしくいゝまぎらす。六兵衛思入あつ  
て。

六 ハテナ、此旅人ともさつき見た時、もしや桑折の家  
来かと思ひ違へたよく似た顔。今又爰の娘さんが、  
お竹に瓜を二ツとは、ふしぎな事もあるものだ。

ト考へ居る。これにて金太もじつとこなし。

四郎兵衛思入あつ「て」。

四 そうしてこちらのお嬢さんを送つて参つた此仁は、  
どういふ縁でござりますか。それをおきかせ下

さりませ。

すみ サア、その縁もどういふ訳か娘を送つて見へた時、  
はじめてあひし此お人。もふ二人り共よいかげんに、  
誠の事をいふたがよい。

金 そうおつしやると、私がどうやらうそでも申した様  
で、猶く人にくたぐられます。

竹 ○ほんにわたしも同じくで、極が悪ふござり升。  
すみ コレ、おたいや、耳をかしや。

たい ハイ。

ト傍へよる。おすみ囁く。おたい心得て奥  
へ這入る。佐兵衛思入あつて。

佐 ○思ひがけない此様子。どうやらわけがありそふ  
な。

すみ 旦那が事をお好みなされず、只穩便を專一に、実  
はけふ迄だまつて居たが、長兵衛さんに又再びお目  
にかゝるは退れぬ訳。もふ隠さずと二人り共身分を  
いふたがよいわいな。

竹 モシ、おつかさま。何が私におうたがひでもござり  
ますかゑ。

ト此内奥よりおたい、風呂敷包みと手紙を

持て出て、おすみの傍へおく。合方きつばりと成り。

すみ サア、自分をおいゝといふ訳は、おまへが国から着て来た小袖。比翼仕立は心得ずと、わたしの里方浅草の長岡屋へやり、内へにて目利をさすれば、

奥山の去ル所から借りに来て、先き頃貸た同家の衣裳。損料ものもそれなりに返らぬ故に先方へ催促中の品と知れ、扱はと思ひ、その後は立居に心を付る内、段々へはげる不行跡。いかにこちらの先妻が、我假氣隨に育テしとて、合点の行ぬ所行といゝ、又かうして見知り人が覚へるものに似た二人りと聞イて、大がひこちらでも知れた素性のまがひもの。それでわざ／＼此着物を爰へ取寄せ見せるのさ。

トこれにてお竹わざと悔しきこなしにて。

竹 モシ母さま、そりやけしからぬ事をおつしやいます。そりやもふ、なさぬ中故にそのお疑ひがあるかは知らぬが、幼ない時から私は会津のお国へ里にやられ、現在実のお父さまのお顔もろく／＼知らぬかなしさ。こしらへ事かなんぞの様に、左様な事をおつしやつては、実に悔ふござります。

金 ヲ、御尤なそのお恨み。私逆も正真の薬を売て、すりかへられ、疑ひ受るそれ斗りか、お嬢さまを送つたのも、まぎれものだとおうたがひを受けます様では、誠に残念。供にくやしふござります。

ト兩人よろしく思入。

すみ モシあなた、もふ致し方がござりませんから、此手紙を見せ被成ツて白状おさせ被成いまし。

ト件シの手紙を鶴右衛門に渡す。

鶴 ア。此状は会津の城下へ娘を養女にやつた先から、ツヒツヒ一昨日来た知らせの手紙。

金・竹 エ。

ト思入。合方きつぱりと成り。

鶴 成程、先き頃聞た通り、城下の町は戦争で残らず焼れたその折りに、病院でそれ玉の為に娘は変死したなれど、死人の着物を着かへさせ、逃たものがあるとの噂に、早速跡を調べて見ると、玉に当ツてゑんせうでくすぶる顔を幸ひに、巧んだものがある様子。併しそれはそれにしても、養女が変死した事を、騒ぎに紛れ、知らせの延引。今度改め知らせるとくわしく書た此書状。又長岡屋の損料を借りて返さぬ証



詰といひ、すりかへたろうと熊の胆の疑ひ懸る此一件。もふたいがいにあらにて、退れぬ所と有体に明した方がよきそうだ。

竹 それでも覚へのない事故。

すみ アレ、まざくとその強情。

四 コリヤ、出る所へ連れて出て、上みのお手数かけねばなるまい。

六 サア野郎、おれと一所にうしやアがれ。

ト金太を引立に懸る。これにて金太きつと成り。

金 エ、やかましい、静にしろ。

ト大きくいつて振払ふ。

皆く ヤア。

ト恟りする。お竹もこれ迄といふ思入あつて。

竹 ヲヤ、もふおめへはむけたのかへ。

金 もふだめだから、ぶちまけて仕舞わふ。

竹 モウく本音を吹くのかへ。

佐 そんなら、いよく。

佐・六 此二人りは。

金 実は是まで街ツたのだ。  
皆々 エ、。

ト是より兩人、敵役のこなしに成る。皆く扱わといふ思入。これより合方かわつて。

金 おれも会津で重役の桑折のやしきへ住込んで、馬丁をして居た時は、家中一統気を揃へ、忠義を尽すを見習つて、江戸からいつたものだつて、忠義の出來ぬ事はねへと、くつゝいて居たお竹まで、思ひきる気で働いたが、戦争の時病院でこつちの娘が変死をした苦痛を見たので気がかわり、こんな巧みも薄綿の損料ものからぼろが出て、種が上ツて居様とは、今の今迄知らなんだ。

竹

わたしも元から悪法をかく了けんもなかつたが、一ツたしきに勤めて居て、いひかはしたのも思ひ切り、女隊の内へ加わるふと願つて出ても、はぶかれて、今いふ戦地の病院で看病人になつた時、こつちの娘のおみよさんが死んだのを見て気が替り、こんな巧みはしたものの、かう悟られて仕まつちやア、もふ三文の直打もないのサ。

四

それではやつぱり六兵衛が見ぬいた通り、二人り共

会津の城下の桑折さまに奉公して居てついでろくでなし  
か。

金 どうせそれからぐれ出して、寒の師走も着た形りで、  
ごろつきあるく法被一枚。併し骸は筋彫から仕あげ  
た袴の朱迄入れ、十二単の雑物は、いつでも背中へ  
背負つて居る雨乞小町のほりものから、仇名に呼れ  
る小町の金太。これでも当時は遊び人の中間の内じ  
やア指折りだ。

竹 その女房も同様にぐれてあるいた旅先きも、戦地を  
退れたばくれんだけ、見様見まねの筒もたせ。鉄砲  
艘もよろしくで、毒婦の数にやア入れられたが、や  
しきに勤めて居た時分、野暮な天窓に結びなれた、  
文金鬻がくせになり、こつてり造りの厚化粧。文金  
お竹と名を取つた、肩書付きのくわせものサ。

四 それじゃア、さつき熊の胆もそちらですりかへかた  
つたに相違ないといふのだな。

金 そりやア、いわねへでも知れた事だ。見本見せたは  
正真の六十両からする熊の胆。それを見切つて廿両  
で買ふといふのがこつちの山。手品の種と知らねへ  
で、欲に目がくれ、引かゝり、情けごかしで買取ふ

と、きよろつく所へ附け込んで、すりかへたのにふ  
しぎはねへ。出る所へ出ていひ立りやア、そつちも  
不正な代呂物を見たをしをする横着もの。どこへで  
も一所に行から、自身番へでも羅卒にでも、勝手な  
所へ引て行け。

六 ヲ、引て行ねへでどうするものか。  
金 手めへと行のはいやだ。  
六 なぜわしと行のがいやじゃ。

金 手めへもやつぱり会津から、批興（華盛）未練に逃たやつ。  
そんなやつと行のは穢らわしい。

六 エ、何（し）くせへ。おらは余義なく助かつたのだ。う  
ぬ、悪たれ口を利と、たゝきのめすぞ。

金 ム、面白い、扣きなぐつてくれ。ぶたれる度毎直（マ）の  
骸だ。サア、なぐつてくれ。

六 才、承知じゃ。  
ト立懸るを。

□（脱） まアくまつて下さりませ。

すみ エ、そばやさんでかたられたその甘両は、こちら  
にて弁へますでござりませふから、只何事もおんび  
んにお済せ被成れて下さりませ。

四 イエ、御ひみきのお得意へ御損をかけては、濟ぬわけ。

六 それよりいつそ、そんなやつは表向きにつき出して。

ト立懸る。

鶴 エ、モシ、暫らくまつて下さりませ。○ そうしたくはムらぬから、まアわしに任して下さい。○

ト合方になり。

事を好まぬわしが性質。殊に娘が死んだと知れ、仏事供養もした所。二人りはなんと思ふか、此まゝ爰からつき出せば、いわず「と」知れたかたりの罪。そこをわしから廿兩、蕎麦屋さんへ更に納め、何事も穩便に歸さうといふ、此扱ひ。聞けば二人りも戦争から心がわりがしたとの事。わるい心を改メて、堅気になつて一生涯、無難に此世を送つた方がよさそうなものと思ひます。

トこれにて金太、お竹顔見合せ、思入あつて。

金 イヤ、実はこれからまとまつた仕事に仕様と思つたが、そう又清くいわれて見ると、こつちもかれこれいわぬわけ。それじゃアお竹、出かけ様か。

竹 ほんにおめへがそういうふ気なら、もふあとねだり出

来ぬから、こつちもきよふに出かけよふ。

ト爰へ看板のかけより松太郎出て。

松 サア、早く歸つたく。厄病神の厄介払ひだ。

トほうきをもつて立懸る。

金 エ、何を仕やアがる。○ くすねた錢でそばやへは入り、盛を喰つたのを知つて居るぞ。

佐 それ見ろ、おのれも厄病神だ。

松 エイ、今度は出そくなつた。

ト奥へ逃げ込む。

金 ざまア見やアがれ。

ト式重より下りる。お竹もつゞいて下り様

として。

竹 ヲ、イ佐兵衛どん、はきものがないよ。

佐 なければはだして行がい。

竹 アレ、おんびんにしたいといふから、成たけ世間へ

知れないよふに出て行く娘がはだしじゃア、わたしはいゝが、わるくはないかへ。

たい これく佐兵衛、はきものを早く出してあげぬか  
いのふ。

佐 これが盗人に追錢だ。

ト下手のあげ板の下からはき物を出して、  
縁先へほふり出す。

竹 ほんにいけぞんざいな出し様だのう。

トこれにて兩人下手の方へ行きながら。

金 併し、手めへを送つて来た時、手当てを貰つたその  
上に、欲に迷つてかたられた金まで弁へおんびんに  
濟せてへとは、さすがは大店<sup>ナ</sup>。情け深へのはかん  
しんだ。

竹 さう気が附いたら何も人情。わたしの礼でもいつて  
おくれ。

金 扱、長くくと内のやつが、大きに御厄介に成りまし  
た。

鶴 悪るい心を入替へて、向後は堅気になるがよい。  
そこがやつぱり熊の胆で、にがい葉は口にあわねへ。

トこちらへ来る。

竹 もふいゝかへ。先きへ行よ。

トづんゝ花道へ行きかける故。

金 かうゝゝなんで先きへ行くのだ。

竹 おめへの形じやア、どう踏んでもおいらの供としつ  
きやア見へねへからサ。

金 形りは安イが懐ろにやア、かたつた金に会津の熊の  
胆。当分手めへは脚ツかぢだ。

竹 さう安くしてくんざんな。これからのろまなでれ  
助でも、引かけるのはおいらの腕だ。

金 所でおれが男めかけか。

トお竹、向ふを見て。

竹 あれ、向ふから人が来た。

トこれにて金太跡へ下り、わざとまぢめに  
成り。

金 サアお嬢さん、送つてあげませう。

竹 ほんに御苦労でござりますねへ。

金 ヘン、おつすましましやアがる。

トけいこ唄に成り、兩人よろしく向ふへは  
入る。

たい これでやうゝ悪魔を払ひ、一ト安心を致しまし  
た。

鶴 忠義にこりし侍の揃ふ会津の城下にも、あんなやく  
ざがあると思ふと、実になげくわしい事じや。

四 イエ、国の者にはあんなやくざは只の一人りもござ  
りませんが、聞ケば二人は江戸の様子。

六 当時でいへば東京だが、あれが江戸ツ子のつらよこ  
しだ。

佐 どうかよごされたくないものじゃ。

四 ヲヤ佐兵衛さんは、江戸ツ子でござりますか。

佐 これでも江戸の吉原ツ子じゃ。

六 イヤ、吉原ツ子とは請取ない。

ト此内鶴右衛門、甘両紙に包み。

鶴 サ、御約束の甘金。手前が返上いたしますから、

どふか内済にしてやつて下さりませ。

四 イエ、どういたしまして、是も全くわたくしの欲心よくしん

より起りし事。却て面目なふござります。

すみ イエ、穩便に済ましたのも、仏の為。どふぞ御受

とり下さりませ。

ト無理に押付ゆへ、是非なく。

四 さやうなれば折角のお詞ゆへ、是は申受まするが、

又会津の面よごし杯とおつしやつてはいけませぬ。

すみ ヲヤ、そばやさんも会津のお方で。

四 ヘイ。それ故家号を会津庵とつけましてござります。

鶴 わしの先祖も会津出にて、代々続く若松屋。

六 ヘエ、それで若松屋さんでムリ升か。

四 誠に目出たい家号でムリ升。  
鶴 何はななくともほんの有合。奥で一ト口○

ト是を木のかしら。

呑でいつて下され。

ト此もやう、あめやのたいこ鎌倉ぶし合方

にて

ひやうし幕

明治廿七年十月大吉日

紙員 廿四葉

千種万歳大々叶

筋書 竹柴其水

作者 河竹新七

六幕目

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

第六幕目

旅順口海軍戦の場

入船町貸長家の場

明治座

- 一 支那人道昌恵 左団次
- 一 世話役勝五郎 小団次
- 一 もぐり車夫五郎介 寿三郎
- 一 士官濱野進 左文治
- 一 差配人太ツ腹の長兵衛 寿美蔵
- 一 郵便配達喜太郎 左伊助
- 一 長家かゝアおすゞ 同
- 一 同 おかね 小半次
- 一 水兵
- 一 同

一同

一 支那人女房おぎん 秀調

実ハ金太郎妹おぎん

一 勝五郎妹おせん 莚助

一 支那人倅双種 三寿丸

（大同江陸軍戦の場（別本による））

本舞台三方打抜き、続通り朝鮮の山を見  
 たる遠見。十六日の月を切り出シ、平舞  
 台奥深に五間高弐重。是より前へなぞへ  
 にしゆる伏せの土手。所々松の立樹。頂  
 上の境に丸竹にてあみたる簀を張詰、都  
 而朝鮮中和道の体。風の音、ラツパの音  
 にて幕明く。

ト風の音打上ゲ、床の浄瑠璃に成る。

へ爰は名におふ朝鮮の黄州の北にして、中和を過  
 ぎし平壤の道は一ト筋猛勢なる、朝日輝やく陸  
 軍の勇氣満たるそのいきをひ。

ト文句の止り、合方進軍ラツパの音に成

り、向ふより日本兵士、黒の服、白のズボン、サハベル、わらんじ掛ケ、ランドセーを背負、鉄炮を抱へ三人一列に出て来る。

此次へ士官北野勇、軍服わらんじ両眼鏡の袋をかけ、サハベルを構へ。

北野 かけ足エー○

ト是にて走り出て来り、皆々舞台上寄りにとまる。

□<sup>脱巻</sup> 七千貫分捕がりました。

北 ム、左程迄攻軍せしか○ 弥平壤のつとる上は、

我陸軍も増々勝利。

壤 早、此上は支那領へ攻込むは最安き事。

輝 大元帥広嶋へ大本營を移されし上は。

(以下、判読困難、脱落あり)

### 旅順口海軍戦の場

本舞台真中より上寄りに支那山を見たる遠見。是より舞台ばな迄一面海原の波布を敷詰、真中に沖中に詭らへ切出シの清艦、帆柱の頂上に支那雨籠の国旗を掲ゲ、煙出し

より石炭の黒煙上り居る。都て支那旅順口の体。大波の音にて幕明く。

ト浪音打上ゲ、床の淨るりに成る。

へ吹荒れし其海上は日の本より西に当りし異国コトクニの要害の地の沖合に、煙りを上ゲし清艦は豊嶋近く進み寄。折柄敵の動揺を伺うこなたの浪間より。

ト文句能程に上下の合方、波の音に成、下手より白ペンキ塗のバツテラ、日本水夫四人、橈ヲこぎ、楫取一人艦にて楫を取。船の真中に士官浪崎進、日本海軍の服、サーベルを帶し、赤白黒の小旗三本かためて持て居る。片手に望遠鏡を持、立身にて出て来る。バツテラは舞台真中迄来り、静に成る。浪崎は向ふの清艦ヲ望遠鏡にて眺める事有て。

浪崎 アレ／＼見よや、向ふの支那艦体は彼国有名の致

遠号なり。今、鴨緑江の岸へ残兵運送と認定致ス。

何の数十隻来る共、恐れんや。ソレ、我本艦迄進メー。

ト号令をかけ、是をきつけに四人きつと成て橈をこぎ、是にて船は上手へは入。是

と一時に一発放ス。

へ 覗ひ違はぬ炮声に、船の真中打崩ケ、忽ち登る黒煙り。虚空はるかに雨龍の国の御旗も飛去て。

ト文句の止り、又一発打。是にて清艦の真中、仕かけにてくだけ、花火のパチくといふ音して艦中より発火なし、黒煙りの内、折々火の手上り、トゞ段々沈没する。此内小筒の音しきりとして海中へ沈み、帆柱斗り残り、此内風の音烈敷、帆柱の頂上にある支那の国旗切れて合引にて飛、ぐるく廻り乍、トゞ日覆へ引てとる。此内帆柱段々海中へ這入。

へ 目覚しかりける。

ト三重欠入にて此道具、居所にて替る。

### 入船町貸長家の場

本舞台一面の平舞台。正面鼠の破れ壁。是へ豎三尺の窓。是に青イペンキ塗のすだれをかけ、上手一間の附家体。此張壁、雨染のある唐紙形。下手一間の附家体。前側西

子役

ハア。

へ 声ヲ張上ゲ泣ければ、勝手に居たる母親は野菜た

洋形の青ペンキ塗窓。蝶つがひの放れし二枚開き。此横手、破れし芭蕉布の長のふれん。いつもの所に同じくペンキぬりの腰板の有ガラスの引戸。此外、支那人の明家の前側。是へ紅唐紙へ老少平安と記シ、此札と並びてかしや札を張。都て入船町貸長家の体。真中の壁に鹿末なる観音の軸。此前はげたる春慶ぬりのテーブル。上に線香立あり。平舞台真中にもテーブル一ツ置、上手の二重に支那人の悴双種、やつしの形りにて赤ゲットを着て寝て居る。此模様、床の三重にて道具納る。

へ 破れ果し棟は通りし南京長家。コートも禿し軒先に雨の古塚、古ゲット。破る昼寝に驚きに双種は立て、目をしばたゝき。

ト此内子役寝返りをして二重よりころがり落、恟りして静かに起上り、あたりをきよろく見廻して。



づさへ出来り。

ト此内奥より序まぐのおぎん、丸鬚世話女房、南京人のラシヤメンにて、まな板と白瓜茄子を入レし籠を抱へ出て来り、タイプルの上へ置。文句の止り、合方になり。

女房 何を其やうに泣のたへ。

子 おいら夢を見たよ。

女 夢を見た迎、其やうに泣事が有ものかいな。

子 夫でもこわいもの。

女 何が其やうにこわいのじや。

子 今南京の国の蒸気船と日本の蒸気船と火炮を打合せ、南京の船が打れると直ぐ海へ沈んで仕舞つたが、夫に乗て居た人がやつぱり南京だから、おいらこわく成て来た。

へ夫といわねど胸に釘。思ひあまれど素知らぬ体。

ト是を聞、女房思入有て、氣を替。

女 なんの其様な夢を見た迎、こわい事が有ものかネ。

子 夫でもおとつさんに似た人が乗て居て、皆死んで仕舞つたから、おいら悲しくなつたのよ。

女 其様な事にせず、裏へいつて遊んできや。

子 おいら、裏へ行のはいやだ。みんながチャンく坊主くとはやすから、モウどつこいも出ねへ積りよ。女 本にそふで有たか。○ 現在産んだ子乍も表向ひて出られぬとは、情ない子じやナア。  
へ親子乍も明シ兼、肌寒夜半の心地して憂事流ス井戸端の戻りに入来る人くが。

ト此内子役をとらへ二重にある手遊びを持て、遊べといふ思入。文句の止り、さんげく合方、あたまへ乗せる飴屋の太鼓に成り、下手より長家の嬢アお鈴、お兼、やつしの形り、洗だくだらいを抱へ、跡より勝五郎妹お仙、前垂着流しにて岡持をさげ出て来り。

お鈴・三人 お銀さん、お内かへ。

女 ハイ、居り升わいな。

女 今洗濯に来ましたから、一寸寄つて行ますよ。

女 マアこつちへお掛なさい。

トこわれかゝりし椅子を出ス。

お兼 真平御免なさいよ。おせんさんもお這入り。

ト是にて三人椅子にかけ。

すゞ 其後はどんな様子だか、只世間では朝鮮で軍が始つて、支那へ押して行のだと、軍<sup>サ</sup>は朝鮮に有といふし、押して行のは支那だといふし、どちらだかさつぱり訳が分らないのさ。

兼 夫から大家さんに聞いて見ると、何だか大層知つたやうな様子で、ウム何アニ、今度の戦争は上野の山王山へ彰義隊が詰て居るが、官軍がトあおりあおれば、夫で仕舞になると、かういふのだ。

すゞ 夫から二人りもちつともわからないから、イ、エ其上野の咄じやア有ません。此頃なる日清の戦争の事でござい升といつたら、ア、熊本<sup>ノ</sup>籠城が連らくすれば、日本は安心だ、といふのだ。

トしきりに凶に乗て咄すを、おせん聞て心遣ひの思入有て。

お仙 ア、モシく、夫は違つているわいな、夫は御一新から西南のはなしで、聞たのは今度の支那と日本の軍<sup>サ</sup>のはなし。そふ一所にするとわからなくなつて仕舞升よ。

すゞ いゝやね、どうせ混雑中だから、支那でも日本でも、四ツ谷でも麴町でも、大した違ひはないではな

いか。

せん イ、エ、夫は大違ひでムんす。斯ふして三人でお寄り申のも、入船町の南京さんが段くと出立するのに、此お隣りもいつて仕舞、さぞおまへさんがおあんじだろふと、其御見舞に来たわいなア。

すゞ ア、本にそふでムんす。やうく本道へ出たやうだ。夫でね、此先どふなるか、新聞は読ないから、只噂さで案事で斗り居るのさ。

かね 昔しならお触が来るからいゝが、当時は新聞をよめの、かんかうを見ろのと、天保時代では仕方がないね。

せん モシ、かんこうではムんせぬ、官報といふたではムんせぬか。

かね 其官報にしる、勘考にしる、なんだかちつともわからないわね。

すゞ 何にしても心配な事だから、勘考しろといふのだが、嚙官報してお出だらうね。

女 有難ふムり升が、内でも毎日心配して、此辺に居る国の衆や永田町の公使館へいつて、聞合しては居り升が、やうす訳らぬ夫のみか、なんだか肩身がせま

くなり、外へも出にくふムリ升。

子 おかつさん、腹がへつて来たよ。

女 ア、コレ、今お米が来ると、直キに焚てやるわいな。

子 夫でも腹がへつていけねへものを。

すゞ ヲ、しやべつて斗り居て、忘れて居た。今おまへ

にお芋を上やうと思つて、三ッ角が安いから、お仙さんに買って来て貰つたのだ。よう、夫を出しておくれ。

せん アイく。

へ眞は泣よりまめく敷、手提の内より取出し折

敷に取て差出せば、見る女房はあらぬ思ひ。

ト此内おせん、岡持よりふかし芋を出して、

有合ふ盆にのせ、子役に遣る。是を悦んで

喰ふ。女房実と思入有て。

女 支那の国では罪もなき日本人を見る度に、むごい事

をするといふに、斯ふして此子にたべもの迄 ○

へ跡言さして胸せまり、せき来る泪、打払ひ。

実に深切な事じやナア。

へ嬉し泪にくれければ、女房達は目をしばたゝき。

すゞ ナアニお銀さん、御家事でないよ。新聞屋なんぞ

が言事は、何にも当にやならアしませんよ。

かね 決して軍サなぞありやアしないのを、新聞を売ふ

と思つて有るといつて言ふらすのだよ。

すゞ しとヲつけに、軍のいの字もありやアしないのだ

よ。

かね ほんとに大業ツたら騒ぎすぎるアね。

せん ア、モシく、そんな事を大きな声でいひなさん

すと、世間の人に笑われるわいな。

かね おつう新聞屋の肩を持つてよ、おまへの身内に配

達でも有のだろう。

へ口さがなくも遣り込れば、あきれて答へあらざる

所へ、勝五郎は尋ね来て。

ト此内兩人ムキに成ていふを、お銀心遣ひ

の思入。おせんは一人りで笑ふ。文句よき

程に、下手より大蔵組の世話役勝五郎、羽

織着付平ぐけ、尻はしおり股引、沓にて出

て来り、門口より欠ケ込み。

勝五郎 ヲイ仙公、爰に居たのか。おれは今銀座の店へ

行から、内へ帰つてくんねへ。

すゞ おや、勝さん。マアおはんなさいな。さぞおいそ

がしふり升ふねへ。

勝 エ、お影で仕合といそがしい事でムり升。

女 是は勝五郎さん、マアこちらへ御這入り被成いな。

勝 エ、這入るは這入が、主<sup>マ</sup>は内かね。

女 今朝程から諸方を廻つて、只今るすでムり升。

勝 そんなら眞平御免なさいまし。

へ内へ這入るを人くは不審顔して。

ト是にて勝五郎、靴の俣這入、椅子へかける。

お鈴不審の思入有て。

すゞ モシ勝さん、爰の主じが居ないなら這入とおいひ

のは、何だかこりや変だねへ。

かね おまへ、亭主の居ない所へ這入とは、そりやア罪

になるよ。

勝 エ、余計な事をいひなさんな。屋上が居ねへから爰

へ這入るといふのは、チャンく坊主だから癪にさ

わるのだ。

トおせん、女房に兼、袖を引を。

なアに、ちつとも驚く事はねへ○お銀さん、おま

への兄貴はたいしたものだけぜ○

ト替つた合方に成り。

おぎやアと産れると水道の水で産湯を遣つて、江戸

ツ子のチャキくがゑつちらおつちら会津迄往て、

屋敷奉公したのはいゝが、御一新の時、戦争で批興<sup>「軍法」</sup>

未練に国を逃出し、たつた一人りの妹を南京のラン

ヤメンにするといふのは、なんたる事か。夫に引か

へ咄しを聞やア、会津さまのお国の人、女子供に

至るまで、みんな軍に出たといふ事。エ、コウ、ほ

んとうに江戸ツ子の面よごしだけ。おれが其時がき

でなけりや、打やつては置ねへのだが、人をツケあ

きれ帰つて物がいゑねへ。実におめへは○

ト実となり。

気の毒ナア。

へ誰に遠慮も打明て、いふは勢ひの頼母敷。聞にお

銀は其尾につき。

ト勝五郎はよろしく思入。

女

夫をいはれると、穴へでも這入度なりますが、夫も

私しの不仕合。御一新の時、兄さんに会津のお国へ

置さられ、路頭に迷ひはるくくと江戸へ出て来て尋

ぬる内、やうく此頃兄さんの居処を見附て逢まし  
たら、ちつとは年のせいかして、目が覚たやうでム

んすわいな。

勝 此度逢たらおいらがいつたと、決して人の事じやア  
ねへから、よくそふいつて下せへ。

女 御こんいにしたおまへの御深切親。いわいでなんとし  
ませうぞいな。

勝 是から銀座の店へ行から、又チャン公の居ねへ時に、  
妹かおれが尋てやるよ。

すゞ わたし共の鑑定では、亭主のるすと聞たから、お  
つう気を廻したら、飛んだお門下違ひの咄しで。

かね こりや、勝さんの深切から為になる咄しでムんす  
が、そふ聞とお銀さんは、ほんどうに不仕合だねへ。

勝 又わつちが逢たら、異見意見をいつてやります ○ヨイ  
仙公、夫では内へいつて居てくんねへ。

せん アイ、直グ帰るわいなア。

勝 大きにおやかましようムり升した。  
すゞ わたし共も洗濯を明地へ干たら。

かね・兩人 咄しに来升よ。  
ト是にてみなく、門口へ出る。勝五郎心付  
き。

勝 ヨイ、塩を少しくんねへ。

せん アイ ○お銀さん、塩を少しおくれ。

女 アイく。

ト有合う塩壺を出ス。おせん受取ル。

勝 ヨイ、骸へふつてくんねへ。

せん エ ○お弔らひじやア有まいし。

勝 い、ツテ事よ。是から大蔵組へ行のに、爰の敷居を  
またいじや、出がけに延喜が悪ひからよ。

せん エ、モ、粹においひなねへ。

へ顔を おゝふて人目を憚り、塩打かくれば勝五郎。

トおせん、内へ見へぬやうに塩を勝五郎に  
かける。

勝 ア、是でさばくした。

へ暇乞して人くは後チを約して出て行。

ト勝五郎、袖をふるひ乍向ふへは入る。女  
達は暇乞して盥をかゝへ、おせんと伴く  
下手へは入る。

へ跡にお銀は門の口、恨めしげに見送りて、身の不

仕合を思ひやり、椅子にもたれてかこち言。  
女 御一新に奥州からまだ十代で只言人り、はるく江

戸へ出て来たも、たつた一人りの兄さんを尋ねやう

ばつかりに、所々をさまよふ其内に、どこを当てもあらざれば、非人同様門に立ち、弾く三味線の心憂く年月を送る内、追々開ける世の中に進みられて此家へ来り、子迄もふけし中なるに思ひがけなき此度の戦争。夫故にこそ斯迄に世間の人に見下ぐられ。

〇 へ穢多か非人なんぞのやうに。

人交りの出来ぬのは、何たる事の因果ぞいなア

〇 へ悔し泪にくれけるが、我子の前をつくろひて。

ト此内無念の思入有て、氣を取直し。

ドレ、観音さまへ御供物上げ、どふぞ事のふ納るやふ、お願ひ申升うわいな。

へ涙だ払らひて立上り、貧女が一灯のさげもの。

灯りも細き線香の薫りも抜けてやつれたる、国の安危に思案顔、爪づく路次にイテ。

ト此内件の青物を供物台へ乗せ、正面の観音へ備へ、線香を上げやうとしてなきゆへ、

箱の隅に残りある折れを探し出し、是を上る。此内子供は竹切レにて窓の所に遊んで居る。文句よき程に支那人道昌恵、やつれ

しかづら、よごれたる服、同じく沓にて腕組をなし、思案仕乍出て来り、花道にて跡先を見廻し、氣味の悪きこなしにて。

支那人 お巡りさんの保護が有から安心とはいふ物の、何んだか肩身が狭ひ。表を歩行にも心配あります。

〇 へおもやつれたる姿にて、我家の門へ歩行寄。

ト考へ乍舞台へ来り。

今歸りました。

へいふに女房は出迎ひて。

ト蝶番ひの放れし門口をやう／＼に明ケ、内へ這入、椅子へかける。

女 ヲ、よふ無事で歸つて来て下さりました。さうして様

子はどふでムんしたか。おあんじ申て居たわいな。

支 やうすよつほど悪ひ。わたくし困りました。

女 エ、。

ト床のメリヤス、ミシンの音になる。

支 方々／＼国の者聞合せました。ミイナ皆、歸るよろしいといひ升。わたくし、日本へ来て十五年。此悻まで出来ました。

へ思ひもよらぬ戦争に、跡に見なして帰るとも、今は国にも身内はなく。

親方ある斗り。何も有ません。今いつでも、中く構つて呉ません。日本の方、深切でよろしい。夫を行ねばならぬとは。

へ何故、軍サを初めたか。国がたいさん大きいとて、愛国心のあらざれば。

軍サする、まけ升。先年、南支那、仏蘭西にとられました。又北支那も露西亜にとられ、又東を日本にとられ升と、地球の内の大国、ちまつて仕舞ます。夫も構わず戦ひ仕ますと。

へ可愛そなたや此子まで、歎きをかけて別れるかと、右と左りへいだきしめ、只おいくと泪斗り。

ト女房と子供を引寄せ泣く。

女 身の不仕合に路頭に迷ひ、どふ仕やうかと思ふた所、大家さまの御深切で子迄まふけし中なれば、今度の軍サに是非なくも、どふでも別れねばならぬとは。

へ李鴻章とは名に聞ケど、たらぬ智恵より戦ふて恥辱を取るも知らずして。

軍サをせねばよかるふに、斯ふいふ歎きをさするの、身の程知らぬ南京の。

トいかけ心付キ、思入有て。

支 サ、おまへの前では言にくいが、私共の思ひでも、軍サに勝せぬわいな。

支 へ愚知と恨らみにかきくどき、悔し涙にくれにける。只わたし困るのは、上海まで行ますにも、五十円は入ます。此頃不仕合せ続キまして、ちつとも金有ません。是に困ります。

女 サ、夫が心配でならぬから、兄さんの所へ手紙を出して、けふは来やうか、翌は来やうかと、毎日待てるけれど、未だなしもつづてもなく、又きのふは

支 ア、それは忝ひ。能頼んでくれた。悦ばしいく。ア、それは忝ひ。能頼んでくれた。悦ばしいく。

女 ア、モシく、まだ出来るか出来ぬか返事の来ぬ内、安心出来ぬわいな。

支 安心出来ませんでも、夫力らになります、よろしいく。○ア、たいさん腹へりました。米飯ミイフツたべませう。

トテーブルの上を片付、椅子へ掛直す。女

房実となり。

女 サ、さつき米屋へいふたけれど、現金でなければやられぬと、断わられたに依てナア。

支 ハア、米飯有ませんか。

ト女房せつなき思入有て、実となり。

女 アイナア。

トうつむく。支那人、是を察し服フツの隠しを

さがし、ト丸をこしらへ、手をふり乍。

支 モウ銭チエない。

へハツと斗りに声張上ゲ、途方に暮て泣沈ム。双種

は其性さかしくも。

ト兩人どふ仕やうといふ思入。子供、いぜ

んの芋を盆の俣持出て。

子 おとつさん、此芋を食ねへな。

支 ヲ、わたくし、たいさん悦ばしい。よく、心付ました。

女 テモ感心なものじやナ。

へ忍び難なく戦場に敗軍なせし思ひにて、しばしと

しのぐ其所へ、矢よりも早き配達夫。此家の門ド

へ音信て。

ト此内支那人、件のふかし芋を悦んで喰う。

能キ程に向ふより郵便配達出て来り、舞台

へ来て門口の札を見やり。

配達夫 郵便。

へ跡をも見ずにいそぎ行。お銀は嬉敷一通を渡せば

いそぐ悦びて。

ト配達、手紙を置いて下手へ這入。女房、支

那人に渡し。

女 待兼し兄さんの返じ。早う読で見なさんせいナア。

支 忝チひく。○

ト床のメリヤスに成り。

「此間の返事、度々の催促だからいやく出し候。

ヤイ妹、能物ヲ考へて見る。手まへの心柄でチャ

ンくの所へ行やがつて、今日本と軍サが始まつた

て路用を貸せとは、人馬に○しやアがるな、ペラ

ン ○

ト始終読にくそうに読乍。

しやアがるな、ペラン」○是わかりません。なん

の事あります。

ト手紙を出ス。女房氣の毒なこなし有て、

是非なく。



女 「しやるアがる、ベラン」ではムんせぬ。前から読下すと○「人を馬鹿にしやがるな、ベランめへ」○でムんすわいな。

支 夫なんの事あります。

女 サ、夫はナ ○

ト実なきこなしにて。

マア、跡を読んで見なさんせいナ。

支 「ベランめへ。たとへ石が舍利になるとも、南京のなの字にも百も出せねへ」○ア、貸ませんか ○

トがっかりして、又よみ。

「手めへ達はのめつてくだばつても、構アねへ。コレ、能聞よ。幾年たつても日本は弱ひと思やはつて、のめく軍<sup>サ</sup>を初めたるうが、モウ軍艦も上等が出来れば、軍<sup>サ</sup>人と来たら兵隊まで強勇揃で、夫で足らざア跡にいくらも控へて居るのだ。しとをツケ」○人を附るとは、兵隊さんに人を附る有ますか。

女 イエ、人を附るではありませんせぬ。夫は悪体といふのでムんすわいな。

支 ア、人を附るのでは有ませんか ○「しとをつけ、

百でも出来ねへとよくくチャンくにそふいふがい。ベランめへく」○又わからぬ。

女 夫も悪体といふのでムんす。

支 ハア ○「手めへに貸銭があるなら、陸海軍へ献金

すらア」○ア、是では中く貸ません ○「モシ、

夫でぐずくいやアがつたら、胴中へ穴を明けて奈

良の大仏の煙草入の根附にして、手めへはこつちへ

けへつて来い」○おぎんどの ○金太郎」○

へ読終りて兩人は、顔見合てあつけにとられ。

ト再び書状を取、中ばをより出し。

「貸銭が有なら、陸海軍へ献金すらア」○此所よくわかりました。是はいけません。

女 罪もむくいもない物でも、刃向ふ国の産れ故。

支 かうも人にきらわれますか。

女 現在実の兄迄に。

支 ア、力ない。

女 事じやナア。

へ今は詮方泣泪。打しほれてぞ居たりける。折柄表  
へいつきせき、始終を案事、入来る長兵衛。

ト支那人夫婦、愁ひの思入よき程に、下手

より差配人長兵衛、羽織着流し、駒下駄にて出て来り、文句の止り相方に成り。

長兵衛 ヤア、皆内か。能事を聞て来た。悦ぶがいゝゝ。

支 あなた、お出なさいまし。

女 シテ、能事とは何事でムリ升。

長 サア、何んと有難い事ではないか、新聞でも承知だらうが、現在敵の支那人をお巡りが保護して下さるといふ、有難いお達しが出たから、悦ばせやうと飛んで来たのじや。

女 エ、そんなら、こちらに別条なく居られるのでムリ升か。有難ふムリ升。

長 所で斯ふいふ世の中だから、今迄通りすまして居られぬ。先、年齢姓名姓はいふに及ばず、何の営業でムるといふのを委しく書て、願つて出れば、お上から登録を下げて下され、夫さへあれば何年でも無事に日本に居られるのだ。どふだへ、敵と成た支那人でも、こなた衆は科はないと登録書迄下げて下され、政府の保護に預るとは、文明国の有難さ。なんと日本政府は大きな了簡じやアないか。此太ツ腹の長兵衛も今度は驚いたよ。

へ皇居の方を伏拝み、椅子ごとこなたへすりいだし。ト悦び。

サ、善はいそげだ。名前と営業を記しなさるがいゝ。

支 ハイ〇ハイ。

長 ハイじやねへ、早くするがいゝ。

支 ハイ。

ともぢくして居る。

長 何、決して心配する事はない。サ、書付をこせへるがいゝ。おれが警察署へ持ていつてやる。実にこなたは仕合だ。かうして隣りまで引越して仕舞たに、辛抱して居たのが大当りだつた。第一おれも仕合だ。〇ヲイ、何をぐずくして居るのだ。早く書がいゝじやアねへか。

トせき立る。女房も心遣ひの思入。支那人うつむき居て、此時顔を上げ。

支 沢山有難いが、登録願ひ、出来ません。

長 エ、何が願へねへといふのだ。

支 登録書へ出す営業有ません。

長 何、ねへ事が有ものか。チーハをやるじやアねへか。トいゝかけ心付き。

ア、仕舞た。チーハは内証の事だツケ○ヲ、あ  
るく帯地を売つたらいゝじやアねへか。

支 サ、その帯地も近頃は沢山顔がふへて、わたし共の  
はちつとも買人有ません。

長 昔から南京繻子はあんなに弘まつて居るのに、売な  
い事はなかるふにな。

支 イエ、そふでなくても敵国の品だといつて、ちつと  
も売れませんか、日本に居てもたべる事出来ませ  
ん。

へ打しほるれば長兵衛が。

長 おれも太ッぱらの長兵衛と人の難義を身に引受、救  
つてやるので京橋区で人の中でも立られるが、無商  
売では肝腎の登録が下らねへから、救つてやるわけ  
にもゆかず、こんな困つた事はねへ。

支 此上の願ひ有ますは、是は国へ連れて行ますが、妻の  
身の上、兄貴よろしく有ますから、よろしく頼  
みます。

女 エ、そんならどふでも此子連れ、おまへは国へ行  
なさんすか。

支 行度有ませんが、仕方有ません。

へ途方に暮るゝ灯笼のまへ。目鏡なければ軒別に門  
下の張札やうくく尋ぬる老の車曳き。若しや爰  
かとためらへば。

ト此内長兵衛、当惑の思入。向ふより五郎  
助、更たる鬻のかつらやつし形り脚半わら  
じがけの拵へにて、一人乗の人力車を引、  
トボく出て来り、舞台へ来て考へて居る。  
女房心附き、下手へ行。

女 どこをさがしなさんすへ。

人力車夫 ハイ、南京さんの荷物を曳に参りました。

支 ア、わたし頼んで置ました。爰の内有ます。

人力 お頼みになりました若イ衆が来る筈でムりました  
が、南京さんと聞て誰も来人が有ませんで、私しが  
頼まれて参りました。早くは引ケませぬから、其お  
つもりでお頼み申ます。

支 積ム物少々有升が、わたくし一所に乗ませぬか。

人力 一人乗りでも急には曳けませぬから、荷と一所で  
は無益でムリ升から、旦那は歩行て行て下さりませ。  
長 心元ねへ車屋さんだが、能夫で車が曳るの。

人力 イエ、誰も行人がない所から頼まれて来ましたが、

実はわたしは飴湯を売って居る物でムります。

長 ア、夫では支那人と聞ては、車を曳く者もいやがるのか。成程こいつア、日本はやまと魂に違へねへなア。

ト此内支那人、観音の軸とその外の物をまとめ、支那カバンのこわれかゝりしへ詰メ、荒縄にて結へる。其外、赤ゲツトの包み一ツと門口の方へ持て行。

女 どうぞ是を積んで下さい。

人力 ヘイく。

トやうく／＼に二個を車へ乗せ、繩をかける。

長 たつた夫切りか。そふして鍋釜などはおめへの所有物にするのか。

女 イ、エ、此間から遊んで居るので、実の所は一ツ宛。

ト言かけてうつむく。

長 そんな事じやア大変だが、是から支那へ行のに、おまへのみじんまへはいゝのか。

支 横浜迄引上ます。実はその汽車賃も。

長 エ、ねへのか。

支 ハイ。

長 そいつアいけねへ。待ちねへよ○

ト紙人より壱円出し。

サ、壱円餞別だ。お銀さんの事は安心して是で一先引揚なせい。

支 ハイ、有難うムり升く。○こんな情ケの有国と。

へ何たる事にて戦ふかと、齒を喰しばり男泣。サア、双種。おとつシヤンと横浜へ行ますのだ。へ手を持添へば、振払ひ。

ト子役かぶりをふり。

子 おいら南京の国へ行のはいやだ。

支 夫でも行ないと、おつかさん困ります。おとつさんと一所に行よろしい。

子 日本の内ならいゝが、若シ南京へ行時は○

へ入船町のお友達に、アノ南京は逃て行と、はやされるのが悲しいもの。

おいらの此毛を剃落し、散切天窓に成たなら、弱い奴だと言れもせず、爰に残つて居られやう。

へ夫故置て下されと、母にまつはりかき口説けば。

ト此内子役よろしく有て。

支 支那で恐れます大將軍は、丁度今年は東の方。其日

本に刃向ふても、わたくし国利益有ません。

長 夫を知りつゝ、なんで又、勝ぬ軍<sup>サ</sup>を仕た物か。

女 思へば是が見し夢は、その前表の負軍。

支 兵糧責の私しは、今目前の此有様。

長 軍用金の不足も当れば。

女 親子の別れも国の煩らひ。

支 差配人さま。

長 フ、。

支 妻<sup>ハメ</sup>。

女 アイ。

支 わたくし、困ります。

へ寄辺定めぬ浮竹のあたり憚る様子もなく、声張上

げて三人は泣より外はなかりける。長兵衛不便

弥増て。

ト支那人夫婦、三人よろしく愁ひの思入。

長兵衛是「を」察しやり。

長 飛んだ国性爺の和藤内だが、父は唐土、母は日本に

其合の子は幾分か受継ぐ日本の倭魂。爰らは一番太

ツ腹の此長兵衛が引受て、跡の始末は仕て遣るから、

心残さず置て行ねへ。其代り国へ行たら、日本人は

町人でも此位な義が有ると、倭魂しいを咄して下せ

へ。

支 ハイ。此御恩、決して忘れません ○

ト平舞台へ手を突き、辞義をして門口へ行。

車屋は楯棒へ腰をかけ居眠りをして居る。

ヲイ、車屋さんく。

ト大きな声をする。是にて恠りして目を覚

し。

人力 ハイく、お待遠ふさまでムります。

ト鉢巻をして、やうく楯棒を上る。

支 夫では左やうなら。

ト門口へ出るを、女房引とめ。

女 モシ、おまへはおなかは。

支 芋で沢山腹よろしい。

へ行んとなせど、恩愛に曳ぬ車の跡や先。行つ戻り

つ、とつおいつ。秋の苜蓿に置露のいなおふせ

鳥<sup>ドリ</sup>、メからむ思ひは尽ぬ異国へ別れてこそは。

ト此内支那人、門口へ出懸り、実と思入。

女房悴すがり泣、車夫は楯を引出そうとし

て車動かず、しきりに足を踏ばり居る。こ

なたは泣く、門口へ出て、車の後ろへとりつき、此支那人の裾へ女房悴取付キ泣く。長兵衛心遣ひのこなしにて、車屋に早く行ケといふ思入すれど、車先へ進まず、支那人は振り返り、車を押乍花道へ行。舞台は是を見送る。長兵衛隔てる。双方よろしく、ト、思ひ切て車を押して向ふへ這入。是を本釣鐘三重にて

幕  
ト幕引附ると、人寄の鳴物にてツナギ、直グ引かへす。

明治廿七年十月吉日

紙員 十七葉

千穂万歳大々叶

作者 竹柴其水

# 七幕目

当ル午の十月狂言

会津産明治組重

## 第七幕目

相模教心寺山の場

浜離宮汐先橋の場

新橋ステーションの場

## 明治座

- 一 支那人道昌恵 左団次
- 一 小町の金太 同
- 一 世話役勝五郎 小団次
- 一 寺男十兵衛 寿美蔵
- 一 実ハ進藤勇介 同
- 一 差配人太ッ腹の長兵衛 荒次郎
- 一 人足会津の六兵衛 大ぜみ
- 一 郵便配達喜太郎 同
- 一 大蔵組の人足 同

- 一 見送り人 同
- 一 査官人見明 権十郎
- 一 会津屋四郎兵衛 同

## 相模教心寺山の場

本舞台正面の奥より廻し、一ぱいに舞台前までなぞへにしゆる伏の山の半腹。向ふ一面敷畳。山の惣体、塔婆石塔沢山。此間松柏の立木。能所に石塔を横に仕たる新シ仏ケの盛り土。白張の高張。やはり半腹の上手、三間の物置小屋。雨戸壺枚開放し、内に古塔婆、櫛ミの枯葉杯積あり。都て相模在教心寺山惣卵塔の体。木魚入の合方にて幕明く。トやはり右の合方にて向ふより大詰の久六、寺男十兵衛と変名して、ぼつとかづら袖なし半天やつし形り。三人、半股引わら草履にて鍬と竹ぼうきをかつぎ出来り、花道にて。

十兵衛 やうく、本堂の前が片附たと思つたら、モウ卵塔場が草だらけだ。警察署がやかましいから、寺男





人見 こりや、とぼけるな。其方が此山で測量リヨウをしておる事は遠に目が附ておるぞ。

十兵 日々爰へ参る事も、下男と成て存じておるのだ。サ、其箱の内を改メさせろ。

トやはり聞へぬ思入にて、小音にて念仏を唱へ乍、鉦を叩き下手へ下りて行を、人見ソレと思入。十兵衛つかくといつて腰を捕らへる。修行者モウ是迄といふ思入有て、振もぎつて下手へ行を、人見後コより捕らへ箱へ手をかけ、きつと見へ。ラツパの音へ風の音を薄くあしらひ、卵塔の廻りを廻ると山の上下へ逃廻り、捕物の立廻り。ト、三人組打に成り、坂の半腹よりころげ乍落る。此とたん石塔、修行者の足の甲へ倒れる。

修行者 ア、痛ひ有升く。

人見 ソレ、見込みの支那人じゃ。

十兵 承知しました。

ト兩人折重つて早繩をかける。人見は箱を取上ゲ、中を見やり。

人見 望遠鏡に測量機械。又此辺シの画図面迄。

ト悔りの思入。修行者は是を聞、立上るを十兵衛背中を突。是にてひよろくと下手へ行キ、しやんと成るを道具替りの知らせ。修 ム、、、、、。

ト無念の思入。十兵衛繩目と背中を一所に極み、人見右の品くをまとも附添へ、花道へ這入。此もやう寺鐘ラツパにて道具廻る。

### 浜離宮汐先橋の場

本舞台前へ出して常足の二重。石垣の蹴込み、上手丸物ぎぼし附の橋。汐見橋ト記したる板札を打、向ふ浜離宮の森より見附を見た中遠見。切出し十八日の月を出し、下手柳の立樹。石垣川岸の見切。橋の下より舞台前へ水布を敷詰、花道の附際、二重へ上る足掛り。都而芝口汐花橋夜の体。波の音題目太鼓にて道具留る。

ト鳴物打上ゲ、外座下の独吟に成る。

へ露時雨、思ひ余りて袖ぬらす、しめり勝なる暮の

秋。いつしか月も西へ落、身はあへなさの薄き影。

ト能程に本釣鐘を打込、向ふより二幕目の  
金太郎、四十以上の散髪かづら着流しやつ  
し形り、小倉の帯草履にて草履にて考乍出  
て来り、花道に留り。

金太郎 両国から大川端へ出て、考へくうかく来た  
ら、汐留から左りへ切し、とふく御浜へ出て仕舞  
た。お巡りさんの影も見へず、こりや死ねとのしら  
せで有ふ。○

へ海辺へ続く川ぎしを、引や汐路にたどり来て。

ト此内花道にてあたりへ思入有て舞台へ来  
り、石を拾ひ袂へ入ながら。

凡夫盛りに神崇りなしと、何んでもいふ目が出る所  
から遊び歩行共、揚句が力と思ふたお竹に死なれ、  
現在実の妹はチャンく坊主のラシヤメンで、日□  
手□で路頭に迷ひ、今じやア乞食同様にする事なす  
事いすかのはし。是では死ぬより外はないわい。○  
へ樹くは錦を飭れ共、恥る心の水鏡。

ト腕組をして橋の上へ行、両の袂の重みを  
計り、欄干へ片足をかけ、実と思入有て飛

込ふとして思案なして下手へ戻り、考へ居  
て又橋の上へ行、思ひ切て。

南無阿弥陀仏。○

へ曇りし空も又晴て。

ト独吟の上ゲよふの節にて飛込ふとしてた  
ぢくとして、ほつとして実と考へ。

こいつア、うつかり死なれぬわい。

へ今迄ありし雨雲も吹晴れて行森影に、人目厭ひし  
ほふかむり。虫の音さへもかれぬに。

ト此内金太郎、袂の石を出して捨、向ふへ  
思入有て、下手柳の影へ隠れる。文句能程  
に向ふより二幕目蕎麦屋の四郎兵衛、四十  
以上の散髪かづらやつし形り平ぐけ駒下駄  
にて思案乍出て来り、花道にて。

四郎兵衛

金杉橋は人通りが多ひので、どこに仕様か爰  
に仕様かと、先爰迄は思つて来たが、此川なら障り  
は有まい。○

へ泣音も哀れ十日菊、床しき薫り忘れ兼。

ト舞台へ来り、地上へすはり両手をつき。  
モシ会津の殿様、どふぞ御免被成つて下さりませ。

只今申訳に四郎兵衛が身を投て死に升から、是をお詫びと思召て下さりませ。

へ思ひ残して。

ト独吟の上にてツカく、と橋の上へ行、飛込ふとする。此時下手より金太郎走り出、

四郎兵衛を抱止メ、往来迄引戻し。

金太 モシ、マアお待被成せへく。

四郎 イエく、どふぞ放して下さりませ。

金太 イ、ヤ放さねへ。マアお待被成へ。

四郎 イエく、どうぞ死なして。

金太 エ、待ねへといふに○

ト無理に下に居らせ。

ヤ、おまへさんは蕎麦屋の御亭主じやムりませんか。

四郎 ム、そふいふお前さんは、どなたでござりますすへ。

金太 サア、久しい跡石町でおまへさんがそばやをした

時、廿四衛つたので、薬種問屋の旦那に迄迷惑かけた小町の金太。あの時の腹いせを存分爰でして貰わにやア、わつちが心が済ませぬよ。

ト是にて四郎兵衛、月影に能々すかし見て。

四郎 ヲ、成程、こなたはあの時の金太といふお人の有

たか。そうして今頃どふして爰へ。

金太 ヘイ、おまへさんより一ト足先へ爰へ身を投ゲに参りました。

四郎 エ、。

ト恟りする。合方に成り。

金太 子供の時より白糸も染り安ひは悪ひ道。桑折様の馬丁で戦地の御供をする時分は、会津さまの御家来は女子供に至る迄、殿さまの御恩を忘れず命を捨るも厭わずに、忠義を顕わすけなげさを、わつち共迄見習つて、たとへ馬丁風情でも万分が一の御恩返しを仕様と思つて働く内、仮病院で看護婦が一発やられたひゞきから、億病風（億）にさそわれたも、女に心引されて、ついには色と欲とに迷ひ、うつかり踏込ム脇道に、心の駒の通ひ初め、産れた当地の江戸へ帰り、女を玉に遊んで暮し、樂を仕やうと思ひの外、十一年の時コレラで死なれ、夫からすつかり番狂わせに、路頭（ト）に迷つて居ましたが、進ム世界に気が附て、今夜死ぬ氣に成りましたのさ。

四郎 イヤ、思ひがけなきざんげばなし。実はわたしも

我身に氣が附、今夜死ぬ氣で出て来ました。

金太 へエ、おまへさんもやつぱり死ぬ気で。

ト合方きつぱりと成る。

四郎 若ひ時に上方から会津の御出入町人へ養子に入て相續なし、屋敷出入を始めると、直ぐ御一新の戦争に、軍用□の御用が出ると、足元を見て高直で納め、入札だと出□□で通しを引て落札させ、とつたか見たかでもふけた上、弥々会津は降参だと聞とひとしく跡足で砂をかけて江戸へ逃出し、懇意な者が借金で仕舞懸つた蕎麦屋の店を二足<sup>(ツツ)</sup>三文に踏たをし、<sup>ケイキ</sup>景気直しの店開きも、運に叶つて繁昌したが、おまへが衞りに来た頃から、段々店も裏へかゝり、終には元の仕込も出来ず、かさむ物は借金斗り。トゞの詰り執達吏迄さし向られて、諸式は元より蒸籠まで封印附られ公売所分。往来中へ持出す諸道具、実に近所の手まへもあり、面目のふて居られぬから、一時顔を隠す為メ安宿の二階に居たが、何をせうにも金はなし、我身で我身に愛想が尽た。扱こふなつて考へると、先第一に会津様の御恩を忘れて不人情に戦地を逃た其罰と、心が附ケば、一日でも此世に居るのが面目なく、死ぬ気で爰へ来ましたのさ。

金太 そふいふ訳でムリ升なら、猶さらわつちも心掛り。

今いつた腹いせを存分してから死で下さへ。

四郎 イヤ、あの時の衞りの金は、若松屋さんが気の毒だと、いゝといふのを無理に下され、夫で内済になつたから、決してこなたを恨らみは仕ませぬ。

金太 夫じや恨らみなさらねへとか。

四郎 何の恨らみに思ひませう。

金太 夫聞て安心仕升た。○逆<sup>とて</sup>もの事に二人り乍、爰で死なずに済すといふ、相談には乗ませぬかへ。

四郎 シテ、其相談とは。

ト是より替つた相方、虫の音になり。

金太 斯うお互ひに身投げが落合、明して見りやア二人りとも、御一新の戦争に批興に会津を逃た同士。しかし爰が理屈の附やう。アノ時殿さまへ忠義を立て、御武家の中へ交はつて、鉄砲玉や兵糧を運んだ揚句に命を捨てても、高が日本の国の小ぜりあひ。扱アノ時は済なかつたが、夫から段々生延て明治の世界に進んで来て、ツイニ講釈でも聞た事のねへ□□相手の大戦争。今度斗りやア日本中、子供迄が気を揃へ、負めいといふ倭魂。斯いふ場合に成て来たのに、

ぼんやり身を投ゲ死ぬ位へ、つまらぬ事はありやアしねへ。トサア、斯ふいふわつちも死とこだつたが、橋の欄干へ片足踏かけ、ふつと浮んだ開明の心は天の助ケと気が附、むだに爰で死ぬよりも、モウ徴兵の間に合ズとも、万部が一でも日本の皇国の為に成る事したれば、会津で討死した忠義な人にもわらわれめいと、自分勝手の理屈を附ケ、一トまづ死ぬのを止りましたが、死なずに国の為に成るのがよいと思てくんなさるなら、身投仲間二人りで文殊の知恵には足りねへが、よく相談を仕よふじやアねへか。

トよろしく思入にていふ。

四郎 実意を尽したこなたの了簡。何にもいわず其異見に荷担任たい所だが、御一新の時億病から戦地を逃た位だから、外国杯の軍<sup>サ</sup>場へ出ても役には立升まい。

金太 ナア二、決して軍に出る斗りが国の為じや有ません。商人は外国へ商ひをして金を溜、又職人は勉強して何でも日本で間に合せりやア、世界で負ねへ国に成て、刃向ふ国はねへといふから、たとへわつち

其の瘦腕でも、其気でやりやアいつか一度、蟻が塔を積<sup>ツキ</sup>試しもあれば、やる所迄やらにやアいかねへ。

四郎 ム、それでは死ぬ気で働らいたら、他国に負ないたしに成ふか。

金太 成共く、身を投よふといふ了簡のわつち杯には訳らねへが、是には立派な保証人が有升のだ。

ト是にて四郎兵衛思入有て。

四郎 そんなら是から産れ替つて、一番ふんばつ仕ませうか。

金太 こなたがそふいふ氣に成たら、心を改メ以前に増り。

四郎 会津の軍<sup>サ</sup>と二人り前、恥をすゝぎに力を尽し。

金太 兄弟分の勝五郎が大蔵組の世話やきで、今度あつちへ行とあれば。

四郎 調度頼んで朝鮮でも、または芸州広嶋でも。

金太 上の為なら腕かぎり。

四郎 ちやんく坊主の降参迄。

金太 命を切りに。

四郎・兩人 働<sup>ツキ</sup>らふか。

ト兩人きつと思入有て。

金太 待てよ、斯立派に口はきくが、葉種屋で衞りをしたアノ一件を、無沙汰でも意張<sup>威張</sup>て世間へ出られぬ骸。こいつハア一番よわつたな。

ト腕組をなし、投首をする。此時下手立樹の影より以前の寺男の十兵衛実ハ近藤勇助、洋服サハベル、官吏の拵らへにて伺出て。

十兵 金太郎、能改心致したな。

ト前へ出る。兩人悔りして飛退き、夜目にすかし見て。

金太 どなたさまでムリ升か。どふもお見それ申しました。

十兵 ア、しれんじやらう。僕は御一新の際、若松の城内に中間をしておつた久六じやわへ。

金太 ヘエ、成程、おまへさまは久六さん。どふして折助からこんなに出世を被成れましたな。

十兵 元より上の御用にて、奥州路を探索の為、中間に這入おり、御一新より横須賀に在勤致した近藤勇助と申官吏。今日急の御用にて出京致し居たのじや。

四郎 夫ではあなたが姿をやつして。夫だもの、悪ひ事は出来ないな。

十兵 貴さまが病院から竹と逃る時は、僕もあれに一所

におつて、委細よふしつちよるぞ。

金太 エ、。

ト悔りする。

十兵 マア左様な事は子細ないが、只今申した葉種屋の衞りも主<sup>ま</sup>が、大の慈善家に、科人の訴へせず、事秘便に済したれば、上の科目は決してないから、改心なさば心置なく是より力を尽されよ。

金太 ヘエ、夫では内済にして呉升たか。是も偏へに主人のお影。礼に参るでムリ升。

ト此時上手より新聞の売子、号外を沢山持、鈴をふり乍はしり出て。

新聞や 只今出ました号外く。日本陸海軍、大勝利。

チャンく大まけ、大メチャく。号外く。

ト呼乍向ふへ走り這入る。みなく向ふを見やり悦んで。

十兵 二人りが改心致した矢先<sup>ま</sup>。

金太 日本勝利の号外は。

四郎 時にとつての能辻占。

十兵 コリヤ、兩人。

四・金 ヘイ。

ト下に居るが道具替りの知らせ。  
十兵 奮発いたせ。

金・四郎 ハイ〜〜。

ト勇み立。此もやう賑やかな合方題目の太鼓にて此道具ふん廻る。

### 新橋ステーションの場

本舞台一面の平舞台、向ふ新橋ステーション入口の中遠見。上手はすに芝口鉄道前町家の片遠見。右手鉄道局構内貨物庫の張物。惣体灯入り。平舞台所々に大蔵組と神田市場の高張沢山建て、都て新橋ステーション夜の景色の体。爰に前幕「の」世話役勝五郎、羽織の下印伴天腹がけ股引、沓。二幕目の出前持六兵衛、更たる袋附のかづら、印半天も、引腹がけわらじがけ。此外人足を喰て居る。下手、見送り人の内、神田市場の若イ衆、襷鉢巻にてたち、庖丁にて盤台の上にて西瓜をたつて居る。上下大蔵組

勝五郎と市場と印せし長提灯を並らべ、立掛り居る。此見へ席亭の鳴物、馬車のラツパの音にて賑やかに道具留る。

見送り① 世話役皆の勢ひは。

② 大したもの。

みなく、ムリ升ねへ。

勝五郎 是は皆さん、おいそがしい所を見送つて下さい

まして、大きに。

①・皆々 ありがたふムリ升。

見① 世話役、日本の軍人は大勝利といふのは極りきつ

た咄したが。

② 夫に続く鳶方、井戸掘、大工、石屋に家根屋に左官。

③ 其外数多の諸職人が大奮発で働らくので。

④ 朝鮮人も肝をつぶし、ごぶぎな手際といふそふだから。

⑤ 負けねへよふに大蔵組の一番、手際を。

みなく、見せてくんねへ。

勝 皆んな能いつてくん被成た。わしも日本の国とは違

ふから、土地の勝手を知つたやつを多くの内から撰

み出し、腕こぎ斗りを揃へ、上の差図が有次第、奉

天府から北京迄も押込んで行了簡だ。モウ、斯なりやア軍人同様。一ト足でも跡へは引ず、日本男子の勇気を見せ、決して引ケは取らねへから、勝利の号外を待て居てくんねへ。

六兵衛 わしら杯は若い時から会津の戦地を踏んだものだが、惣身へ知恵が廻り兼、久しく蕎麦屋のかつぎで居たが、今度こそは日頃の願ひ、あつちへいつて一ト働らき。ちゃんく坊主の髪の毛を引ツ抜て国へ送り、会津塗のうるし筆に遣わせる了簡だ。

人足一 おいらは又陸海軍の跡へ廻つて南京「の」。

二 首を拾つて持て帰り、お玉杓子の化物だと。

三 公園の奥山で南京繻子の幟を立て。

四 見世物にする了簡だから、帰つて来るのを。

一・皆々 待て居てくれねへ。

見一 西の瓜で支那を聞せ、南京の国の西瓜を切ておめへ達に喰せるのは。

二 出立を祝つて。

一・みなく 能心持だ。

ト賑やかな合方ラツパの笛。ばたくに成り、向ふよりいぜんの金太郎、四郎兵衛い

つさんに出て来り。

金太 ヲ、勝兄イか。味へ所へ間に合つた。

四郎 モウ直グ乗なされ升かな。

勝 ナア二、まだ十五、六分間が有るが、二人り共息を切て、何か用でも有て来たのか。

金太 外じやアねへが、二人り共此御時節に兵營から予備に呼れる当もなく、献金仕度も銭はなし。幸ひ今夜、勝兄が<sup>(マ)</sup>出立へすると聞たから、宙を飛んで欠て来たのだ。

四郎 献金代りに根んかぎり、骸でお上みの奉公を仕升から、金太郎さんと御こんいと聞てどかく参りましたが。

金太 どふぞ二人りを是から直に。

四郎・金 つれていつて下さらねへか。

勝 不断の氣前に引替つて、日当を献金の替りにするのは、感心だ。爰が倭魂の証話といふのだ。連て行なくてどうする物だ。

四郎 そんなら連ていつて下さり升か。

四郎・金 こんな有難事はねへ。

トやはり右の鳴物、ばたくに成り向ふよ



り前幕の差配人長兵衛、鉢まき尻はしより、  
弓張丁ちんをかざし、走り出て来り。

長兵 ヤア、間に合ツたかく。勝さんの出立と、あし  
た予備軍の募召のあるのと一所に成て、大混雜。ま  
づおめへに逢て悦ばしい。日本の評判は各国共に能  
いといふから、おいらも大きに安心だ。マア目出度  
いつて来るがい。

勝 そりやア態々有難ふムリ升。所でおめへさんの御存  
じの此二人りが、今急に行よふに成りました。

長 ヲ、金太に四郎兵衛さんか。丁度い。アノ南京は  
出立したが、おめへの妹はおれが預り、御先途を見  
届けて遣るから、案心あんしんして行がい。又四郎兵衛さ  
んも大奮發だ。○斯ふみんなを見ると、おれも勇氣  
がりんくとして来て、骸がひよいくと持上るや  
ふだ。○ア、平民でさへ此勢ひ。軍人は威勢が能  
かるふな。

金太 長兵衛さん、一所にいつては。  
みなく、どうでムリ升へ。

長 ア、行てへな。ちやんくの首を斯ふいふあんべい  
に引こぬいて、毛でいわつては又つなぎ、数珠子玉

の様につなぎ附て、芋洗ひの弁慶の所へ遣ひ物にし  
てへもんだなア。

ト此時ステンシヨンの内にてガランくの  
音する。勝五郎、時計見やり。

勝 ヲ、モウ五分めへだ。サ、乗込ふぜ。

金太 そんなら是で見送りの。

四郎 長兵衛さんから皆さん方。

勝 大きに。

みなく、有難うムリ升。

ト辞義をする。爰へ六兵衛、西瓜を二ツほ  
り出し、胴中へ竹槍を突通して、其俣建てる。

此西瓜のへたに赤ひ紙と繩が付て居て、支  
那人の天窓と見へる。

金太 こいつは南京の。

みなく、首のよふだ。

長 日本帝国万歳。

皆々 天皇陛下万歳。○

ト残らず帽子と提灯をとつてさし上る。

ヤア、、、、。

トきやりに成り、是へガランく賑やかな

合方を冠せ、皆々上手へ行、引張りの見へ。

頭取出て。

頭取 先、今日は是切。

ト目出度

打出し

明治廿七年十月大吉日

紙員 十式葉

千種万歳大々叶

作者 竹柴其水

